令和４年度（2022年）
地域との協働による高等学校教育改革推進事業
（プロフェッショナル型）

研究実施報告書
（第３年次）

令和５年（2023年）３月

秋田県立金足農業高等学校

巻　頭　言

秋田県立金足農業高等学校長　松　田　　聡

本校は、昭和３年（１９２８年）、可美（うま）しき郷、秋田市金足追分の地に、秋田県中央地区の産業教育（主に農業）を担う高校として創立され、令和４年で創立９４年目を迎えました。これまで２万名を超える卒業生を輩出しており、その多くは、農業分野を始めとする様々な分野において、秋田県を支える人材として活躍しています。また、秋田県の農業高校の中心校として、授業や実習を通しその専門性を高め、さらには運動部・文化部においても目覚ましい活躍をしております。文武両道を実践しながら地域連携・地域貢献など、特色ある教育活動に取り組んでいます。また、以前から構想をたてていた校舎改築が、昨年度正式に決定し、今年夏前の着工を待ちわびているところです。

本校では、農業教育を通じて、地域の課題を発見し、それらを解決するための思考力・判断力・表現力等に加え、発信力、人間関係形成能力を身に付けること、そして様々な人々と協働して課題に立ち向かうための実践的な力を身に付けさせることも重要な実践目標として設定してきました。また、専門教科だけではなく普通教科も含めて学校全体として資質能力の向上を図り、自らの実践的指導力を高めるための取り組みの充実も大きな課題として捉えてきました。

さて、本校における「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」は今年度で最終年度を迎えました。

この事業に取り組んで以降、多様な経験を持つ方々の講演を受けたり、現場見学をしたりする機会に恵まれました。その結果、生徒にとって、「本物」を見たり体験したりする機会が増えました。学校だけでは学べないことを、生徒たちは興味津々で学んでいます。様々な経験を持つ人と出会い、話を聞き、本物を見ることで、生徒が後の職業選択に生かし、どのようにしたらより豊かな人生を歩めるのかを考える、いいきっかけとなりました。

３年間の事業を通し、特色として挙げられるのが、生徒の変容の様です。「自分の住んでいる地域で働きたい」「地域の担い手として、政策の決定に関わりたい」「自分が関わることで社会を変えられるかもしれない」などといった項目で、「そうだ」という肯定的な意識の割合が年次を追うごとに上昇しています。現在は地方都市において、若者の地元離れが顕著であります。確かに、より便利で、より文化的に発展した土地で生活することは若者にとっての憧れであり、そのように考えることは自然です。しかし、若いうちから地元に貢献できないか、という考えを持ち、自分を育ててくれたふるさとのために役に立ちたいという気持ちや、課題を見つけ、改善し、より住みやすい環境にできないか、という意識を持ち始めることが大切です。その意味では、本事業は本校の生徒にとって地域と自分の将来をつなげて考える、大きな意義を持つ結果となりました。生徒の変容ぶりについての詳細は本誌に記載されていますのでそちらをご覧ください。

最後になりますが、この３年間、コロナ禍の中で多くの制約はあったものの、柔軟な御指導・御支援を賜りました文部科学省、秋田県教育委員会、各関係大学や事業所、委員の皆様にお礼を申し上げ巻頭の御挨拶といたします。

農と林の営みが意味なすもの～土に親しみ直きは一つ～

研究開発主任　教諭　照内　之尋

地域との協働による高等学校教育改革推進事業の指定を受け、３年の月日が経とうとしています。この間、新型コロナウイルス感染症対策と本事業の両立を図るべく、多くの工夫とアイデアを出し合い、安心・安全な事業の遂行を第一に進めてきました。本来であれば、海外でのファームステイ体験や、県外先進農家等での長期インターンシップを計画していましたが、計画変更を余儀なくされダイナミックな動きがほとんどできない３年間でした。その一方で、この事業のタイトルにあるとおり、身近な足下にあるところから見つめ直し、地域と協働することで多くの経験とその成果を出すことができたと考えています。本校は令和２年度に採択されましたが、当該年度において全国の農業高校では唯一の指定校でした。記憶に新しい平成３０年の甲子園では本校硬式野球部が準優勝という快挙を成し遂げ、本校の名が全国に知れ渡りました。この波を農業教育に波及できるチャンスと捉えると同時に、本来の農業高校の存在意義を農業教育で見出すためには本事業の採択が必須であるという考えのもと、採択に向け申請書類を作成したことが思い出されます。

農の営みは人類の歴史とともに古く、人類を特徴づけるものとして農の営みの意味づけが存在するといってもよい。農業は自然と直接的に関わりを持ちつつ自然の論理にしたがって、自然と共存しながら私たちが生存してゆくために欠かすことのできない食料を生産し、衣料、住居をつくるために必要な原材料を供給する機能を果たしてきた。その生産過程において自然人間が共存しながら人工的な改変を加えて生産活動を行うが、大規模な自然破壊を行うことなくその営みが永続的に行われてきた。また、林業も日本の森林の保全に際して重要な役割を果たしてきた。日本は元来きわめて特殊な地理的構造を持ち、河川の急勾配と多雨地域の存在によって森林の保全が自然環境の維持のために不可欠な要件となっているだけでなく、文化的社会的な側面からも重要な役割を果たしてきた（宇沢弘文『社会的共通資本』2000 年）。これらの意味するところは、農地や森林を良好なかたちで保全・維持するためには、農業や林業に従事する人間がそこに存在し、その作業を担うことで我が国の国土保全が可能となることです。すなわち、その地域に人が住み、農業や林業など関連産業を担うことではじめて国土形成の基盤を維持できるという観点から、未来の地域産業を担う専門高校の役割はきわめて重要であり、その責務は農業教育を担う農業教員の存在意義の根幹をなすものと考えています。また、本事業を通じた研究課題の一つのテーマに人間の「幸福感や豊かさ」を掲げました。人間の基本的活動とは十分な栄養をとること、早死にを防いだり病気の際に適切な医療を受けたりすることなどの「生」に関する基本的な諸活動から、自尊心を持ったり、幸福であったり、地域生活に積極的に参加したり、他人から認められたりしながら人間の能力（Capability）が明らかになってくる（西川潤『人間のために経済学』2000 年）とあります。12 月に行われた富士大学学長の岡田秀二先生の基調講演でも人間的「生」の実現が一つのテーマであったと思います。

本事業を通じて若い高校生がしっかりと「地域と社会」を捉えることができれば、またその視点が変化していくと思いますし、実際この３年間で大きな変容を見ることができました。最後になりますが、文部科学省をはじめ管理機関である秋田県教育委員会、運営指導委員会、ご協力いただきました皆様方に感謝申し上げ挨拶といたします。

もくじ

第１章　研究の概要

１　研究開発名・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１ｐ
２　研究開発の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１ｐ
３　目的・目標　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１ｐ
４　現状の分析と研究開発の仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・１ｐ
５　研究開発実施計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２ｐ
６　事業実施体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３ｐ
７　運営指導委員会の体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３ｐ
８　高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制・・・・・３ｐ
９　カリキュラム開発等専門家および地域協働学習実施支援員・・・３ｐ
１０　課題項目別実施期間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４ｐ
１１　検証・評価方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４ｐ
１２　カリキュラム・マネジメントの推進体制・・・・・・・・・・・４ｐ
（資料）ロジックモデル、ビジュアル資料、令和２年度成果概念図
　　令和３年度成果概念図、ロードマップ・・・・・・・・５～９ｐ

第２章　研究の経緯

１　契約締結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０ｐ
２　事業運営と実施体制・・・・・・・・・・・・・・・・・１０～１２ｐ

第３章　領域別研究開発の取組

１　研究開発における構想の目的・・・・・・・・・・・・・・・・１３ｐ
２　構想目的の達成手段としての４領域・・・・・・・・・・・・・１３ｐ
３　各学科別事業実施数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３ｐ
（資料）各領域別事業実施報告・・・・・・・・・・・・・１４～４３ｐ
（資料）各領域およびに各学科別実施事業数一覧・・・・・・・・４４ｐ
（資料）実施事業・研修等一覧・・・・・・・・・・・・・・４５～４６ｐ

第４章　課題研究の取組

１　科目「課題研究」について・・・・・・・・・・・・・・・・・４７ｐ
２　令和４年度課題研究における研究課題名一覧・・・・・・・・４７ｐ
（資料）課題研究要旨・・・・・・・・・・・・・・・・・４８～６６ｐ

第５章　カリキュラム・マネジメント

１　探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け・６７ｐ
２　各科目における学習を相互に関連させ教科等横断的な学習とする
　　取組について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６７ｐ
３　地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・
　　マネジメントの推進体制について・・・・・・・・・・・・・・７０ｐ
４　学校全体の研究開発体制について・・・・・・・・・・・・・・７０ｐ
（資料）学校設定科目設置届ならびに年間指導計画・・・・７１～７４ｐ

第６章　研究成果の検証・評価

１　目標設定シートによる進捗状況・・・・・・・・・・・・・・・７５ｐ
２　高校魅力化評価システム・・・・・・・・・・・・・・・・・７５ｐ
３　金農ＶａｌｕｅＲｕｂｒｉｃによる評価とその分析・・・・・７６ｐ
４　金農総幸福量ＧＫＨ(Ｇross Ｋanano Ｈappiness)指標開発に向けて
　　・・７７～７８ｐ
５　定性評価－生徒が何を学び、何を感じ取ったかー・・・７９～８０ｐ
（資料）目標設定シート・・・・・・・・・・・・・・・・・８１～８３ｐ
（資料）ルーブリック評価基準ならびに自己評価・・・・・８４～８５ｐ
（資料）金農総幸福量ＧＫＨ(Ｇross Ｋanano Ｈappiness)指標
　　・・８６～８７ｐ
（資料）高校魅力化評価システムポートフォリオ・・・・・８８～９３ｐ

第７章　次年度以降の課題及び改善点

１　到達目標から見る最終年度の成果・・・・・・・・・・・・・・９４ｐ
２　本事業に対する各科の取組状況の是正・・・・・・・・・・・９４ｐ
３　校内組織体制の強化と地域協働の情報発信による広報活動の推進
　　・・・・・・・・・・９４ｐ
４　指導と評価の一体化と金農総幸福量（ＧＫＨ）指標の確立・・９５ｐ
５　新型コロナ対応について・・・・・・・・・・・・・・・・・９５ｐ
６　事業終了後の自走を見据えた取組について・・・・・・９５～９６ｐ
７　本事業のまとめと考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・９７ｐ

関係資料１　議事録
　第１回運営指導委員会・・・・・・・・・・・・・・・・９９～１０４ｐ
　第２回運営指導委員会・・・・・・・・・・・・・・・１０５～１０９ｐ
関係資料２　新聞記事・・・・・・・・・・・・・・・・１１０～１１２ｐ

第１章　研究の概要

１　研究開発名

縮減社会を生き抜き、あきたの未来を創造する新たな農業高校成長モデルの研究開発
～地域定住人材の育成を目指したＫＡＮＡＮＯスタイル農業高校改革プロジェクト～

２　研究開発の概要

縮減社会に対応したあきた型農業高校成長モデルの研究開発を通じて、農業関連産業を変革することができる人材を育成する。産学官連携の「金農支援コンソーシアム」を構築し、地域のニーズを教育活動に取り入れ、各機関の専門性を生かし、１「グローバルスタディ」領域、２「第４次産業・農業革命」領域、３「ソーシャルスキルアップ」領域、４「地域一体型農業コミュニティ形成」領域で、教科「農業」の各科目と学校設定科目との有機的融合を図り、地域に開かれたカリキュラム開発を行う。また、プロジェクト学習法により地域の課題解決、商品開発、ＩＴ・スマート農業の実践を取り入れた先進的技術の導入等を図り、成果を地域に普及させる。その研究成果を、学校独自の金農総幸福量ＧＫＨ（Gross Kanano Happiness）指標を用いて、検証的に評価する。学校設定科目「地域創生論（令和３年度開設）」、「社会起業家実践（令和４年度開設）」では、コンソーシアムに属する機関や地域の関連産業等と学校との協働による講演や意見交換、さらに課題研究を通じて探究的なフィールドワークやワークショップを取り入れ、地域づくりを行う態度や意欲の育成を目指す。また関連産業での長期研修の実施や関係機関と連携した商品開発、スマート農業の実践が遂行できるよう、カリキュラム開発を行う。

３　目的・目標

社人研の試算による全国最大の人口減少率（41.2%）と、それに連動するかたちで、減少する農家数（18.4%減の 48,900 戸）は、本県の基幹産業である農業の危機的状態を意味している。これら、本県が抱える人口減少、地域縮小社会に対応しつつ、今後ますます拡大するグローバリゼーションとイノベーションに対し、「秋田型農業成長モデル」の開発を通じて、地域課題を発見し、協働しながら課題解決に取り組むことができる人材の育成を図るとともに、秋田の未来を創造し、持続可能な地域社会の構築や、Society 5.0 に対応できる資質・能力を身に付けることを目的とした研究の構想となっている。この目的を踏まえ、本研究開発を行うことにより、次世代を生み育てイノベーションを創出し、地域社会を支える地域定住人材の育成が目標であり最優先課題でもある。

４　現状の分析と研究開発の仮説

（１）現状の分析

2015 年農林業センサスから見る秋田県農業の特徴として、2010 年と比較した場合、この５年間で農業経営体は 20%の減少、次いで農家数は 18.4%減の 48,900 戸、農業就業人口は 54,600 人で 23.9%の減であり、平均年齢は 66.7 歳と、65 歳以上の構成割合が初めて６割を越えている。耕作放棄地は 9,600ha で５年前より 30%も増加している。

以上から、県内の農業後継者および担い手の育成が急務であり、地域産業ならびに地域農業の振興に向けた人材の育成が大きな課題でもある。そこで、地域と学校との協働体制による農業改革を体現し、持続可能な地域社会ならびに地域産業を支える高度な職業人の育成を図ることによる研究開発の成果として、次の仮説を列挙する。

（２）仮説Ⅰ（将来の地域の状態）

①地域資源の有効活用や地域の結びつきの強化による新規就農者が増加し、コミュニティの維持が見られ、活性化が図られている。

②多様な地域資源の有効活用により、地域の潜在力を最大限に発揮し、地域産業の育成や雇用の確保、所得の増大に成功している（稲作複合経営の拡充とブランド化）。

③産学官連携等、内発的で持続する仕組みが完成し外部やモノとの結びつけに成功している。

④幸福感や豊かさを実感し、日本、日本人、そして秋田県人らしさを活かしながら、新しい価値を創造していく営みが身に付いている。

（３）仮説Ⅱ（生徒の変容）

①長期インターンシップや、地元企業との連携による産業研修の実施により、「地域理解」や現場の「実践力」ならびに「多文化協働力」が育成される。

②農業のＩＣＴ化による農業改革を実践することで、「改革する力（実行力）」や「マネジメント力」が育成される。

③コンソーシアムならびに地域との協働による商品開発や６次産業化を実践することで、「思考力」や「創造力・将来設計力」、「人間関係構築力」が形成される。

５　研究開発実施計画

令和４年度３年目の到達目標は「地域創造実践」とし、地域の諸課題に対する解決策を盛り込んだ「地域創造モデル」をプランニングし、地域に提言できることを目標とした年間を四期に分けた実施計画内容は次のとおりである。

	４～６月	７～９月	１０～１２月	１～３月
内容	・生徒への今年度「到達目標」の提示と確認、授業等での周知。 ・地域の実情や課題を踏まえたうえで、「社会起業家実践」等により地域のみらい創造を行う。 ・評価方法の確認	・農家や法人、関連企業等での長期インターンシップや現場見学の実施。 ・スマート農業教育の実践ならびに地域特産品の商品化 ・調査研究等の実施と、課題研究への落とし込み。	・探究活動「課題研究」のまとめ。 ・地域創造ならびにビジネスプランの作成を通じた地域への提言 ・研究成果発表会の実施（全体会、領域別報告、運営指導委員長からの講評等）	・課題研究発表会、成果研究発表会の実施（全体会、領域別報告等） ・ﾙｰﾌﾞﾘｯｸ評価や金農総幸福量(GKH)調査、金農ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵの実施、高校魅力化評価の分析とまとめ ・地域への提言

6　事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
秋田型農業成長モデル研究開発部門 （１）グローバルスタディ領域 （２）第４次産業・農業革命領域 （３）ソーシャルスキルアップ領域 （４）地域一体型農業コミュニティ領域	左記（１）～（４）を校内では、本校教室、ＰＣ室、体育館、農業圃場、実習棟等で実施する。校外では、秋田市、潟上市、大潟村等の県内、他県で実施する。	研究開発主任 教諭　照内之尋 農場長 教諭　近江広和
カリキュラム開発部門 （１）学校設定科目に関わること （２）教育課程委員会の運営	左記（１）～（２）を「研究開発推進委員会」にて適宜、会議室等で実施する。	教務主任 教諭　山崎隆之
ＫＰＩによるオリジナル学習評価部門 （１）ポートフォリオ・ルーブリック （２）金農版ＧＫＨの指標作成 (Gross Kanano Happiness) （３）高校魅力化評価システムの導入	左記（１）～（３）を「研究開発推進委員会」が教室、ＰＣ室等にて実施する。併せて外部評価も導入する。	研究開発副主任 教諭 髙橋寿徳 教諭 中嶋将信 進路指導主事 教諭　戸坂昌成

7　運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
岡田　秀二	富士大学・学長 元農水省林政審議会会長	地方創生に関する国家行政経験からの知見
藤　　晋一	秋田県立大学生物資源科学部 生物生産科学科・教授	農業学習や産学官･企業連携の手法等に関する指導
細川　和仁	秋田大学教育文化学部学校教育課程・准教授	カリキュラム論･開発に関する専門的な知見
齋藤　　了	公益社団法人秋田県農業公社・理事長	農業･農業法人等に関する知見
藤村幸司朗	秋田県農林水産部・次長	農林業政策に関する県行政からの知見
椎川　　浩	ＪＡ全農秋田県本部・副本部長	農業･農業法人等に関する知見
佐藤　　進	（管理機関） 秋田県教育庁高校教育課・課長	学校教育活動や学習の手法に関する知見

8　高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
秋田市	市　長　　穂積　　志
潟上市	市　長　　鈴木　雄大
大潟村	村　長　　髙橋　浩人
秋田県産業教育振興会	会　長　　藤井　　明
国立大学法人秋田大学	学　長　　山本　文雄
公立大学法人秋田県立大学	学　長　　小林　淳一
秋田県立金足農業高等学校	校　長　　松田　　聡
秋田県教育委員会	教育長　　安田　浩幸

9　カリキュラム開発等専門家および地域協働学習実施支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発等専門家	伊東　金一	秋田県農業研修センター 企画・研修班専門員	非常勤
地域協働学習実施支援員	田口　淳一	公益社団法人秋田県農業公社 事務局長	非常勤

１０　課題項目別実施期間（令和４年度の実施予定表から）

業務項目	実施期間（令和４年４月　～　令和５年３月）											
	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10 月	11 月	12 月	１月	２月	３月
先進技術講習会	計画立案	実施	→	→	→	→	→	発表準備	まとめ発表	評価改善	ﾓﾃﾞﾙ構築	ﾓﾃﾞﾙ提言
出前授業・講演	計画立案	開催	→	→	→	→	→	発表準備	まとめ発表	評価改善	ﾓﾃﾞﾙ構築	ﾓﾃﾞﾙ提言
現場視察研修	計画立案	実施	→	→	→	→	→	発表準備	まとめ発表	評価改善	ﾓﾃﾞﾙ構築	ﾓﾃﾞﾙ提言
長期インターン	計画立案	実施	→	→	→	→	→	発表準備	まとめ発表	評価改善	ﾓﾃﾞﾙ構築	ﾓﾃﾞﾙ提言
課題研究(2~3 年)	事前指導	実践	→	→	→	→	→	発表準備	まとめ発表	評価改善	ﾓﾃﾞﾙ構築	ﾓﾃﾞﾙ提言
IT ｽﾏｰﾄ農業実践	計画立案	実践	→	→	→	→	→	発表準備	まとめ発表	評価改善	ﾓﾃﾞﾙ構築	ﾓﾃﾞﾙ提言
研究機関との連携	計画立案	実施	→	→	→	→	→	発表準備	まとめ発表	評価改善	ﾓﾃﾞﾙ構築	ﾓﾃﾞﾙ提言
六次産業化実践	計画立案	実施	→	→	→	→	→	発表準備	まとめ発表	評価改善	ﾓﾃﾞﾙ構築	ﾓﾃﾞﾙ提言
評価/アンケート	指標改善	実施	→	→	→	→	→	→	実施	評価改善	報告作成	報告作成
研究成果発表会					計画	計画	開催準備	開催準備	開催	報告作成	報告作成	報告作成

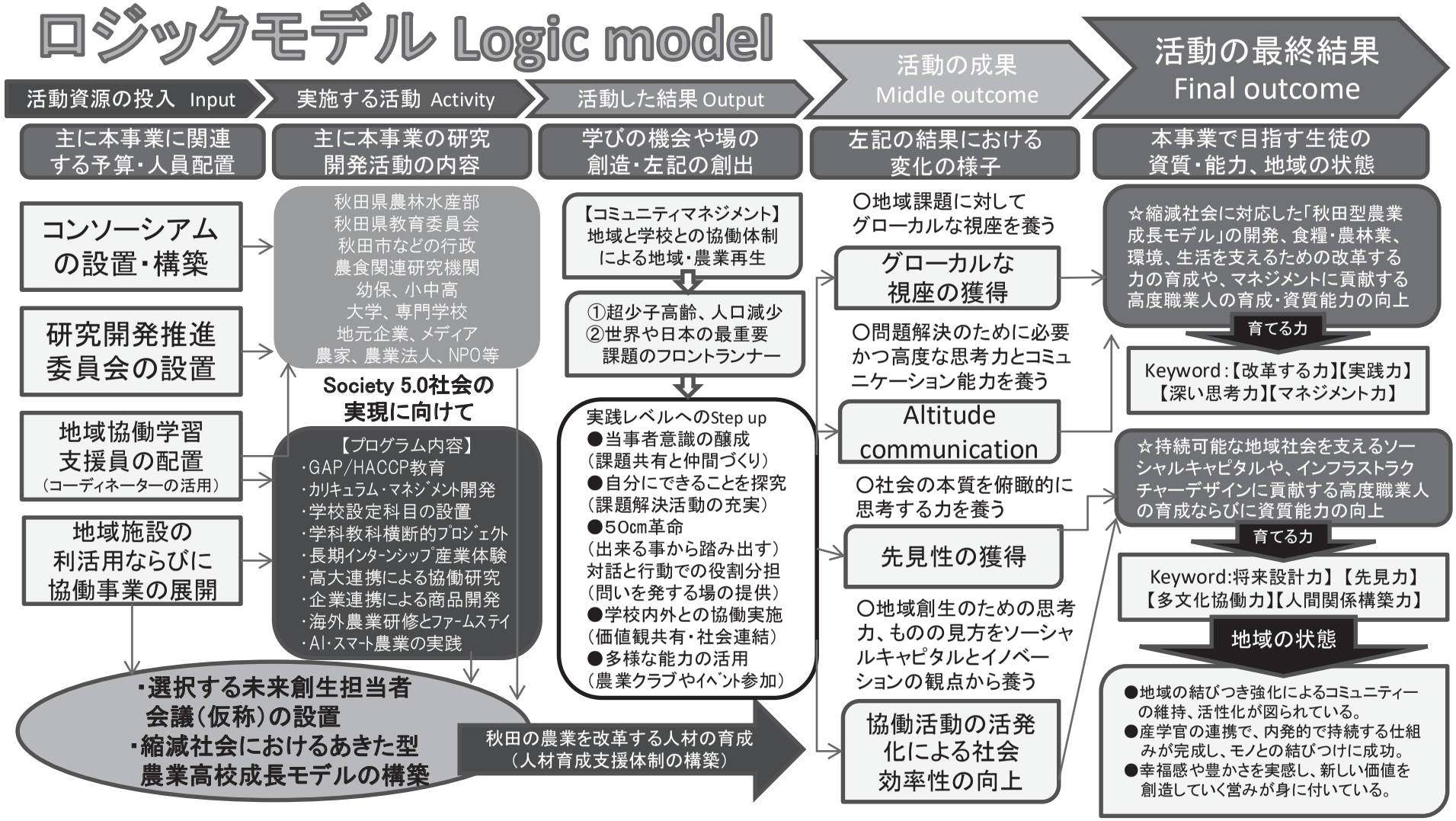
１１　検証・評価方法

ＫＰＩの指標を活用し、ルーブリック評価やポートフォリオ（金農ポートフォリオ:ＫＰＦの新規作成）、アンケート評価を実施する。さらに、金農版ＧＫＨ（Gross Kanano Happiness）を作成・評価し、幸福度や豊かさの量を指標とし、個別評価する。また、外部委託調査として、「高校魅力化評価システム」を活用し、質的評価を検証する。これらを有機的に組み合わせた学校独自の評価システムを開発し、可視化された指導と評価の一体化を実践するとともに、次年度の計画や実施方法を改善するＰＤＣＡサイクルの仕組みを明確に設定し、適切かつ信頼度の高い検証・評価を実施する。

１２　カリキュラム・マネジメントの推進体制

校長を統括にあて「研究開発推進委員会」を設置する。委員には教科農業、家庭のみならず普通教科の教員も委員として配置し、多角的な見地ならびに教科間連携から研究開発を進める。役割としては、主として、カリキュラムの編成を担う教務主任と、農場運営ならびに農業実習を司る農場長が中心となり、カリキュラム開発に係る教務部ならびに、カリキュラム開発専門家からの適切な指導・助言等によって、教材の開発や評価方法の検討を行う。その際は校内の「教育課程委員会」と情報共有を行う。また、地域協働学習実施支援員がコンソーシアムとの連絡・調整を行うことで円滑な事業の進展に期する。さらに、学校の教育目標ならびに本事業の到達目標達成のために、学校設定科目である「地域創生論（令和３年度開設）」ならびに「社会起業家実践（令和４年度開設）」を核とした教育課程を教科・科目横断的な視点で５学科が連動するかたちで課題研究を深化させていく。そのためにコンソーシアムを引き続き構築し、その地域連携の強化を図るとともに、校内における研究推進委員会を充実させ、評価の改善を図る。

ロジックモデル Logic model



秋田県教育委員会、秋田県立金足農業高等学校

令和2年度　地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）

研究課題「縮減社会を生き抜き、あきたの未来を創造する新たな農業高校成長モデルの研究開発」

～地域定住人材の育成を目指したKANANOスタイル農業高校改革プロジェクト～

目指す生徒像　1　人口減少に対応しつつ、農業関連産業を変革することができる人材を育成する。
2　地域に定住し、本県農業の在り方や地域農業を担う人材を育成する。

視角1　秋田は超少子高齢、人口減少県。世界・日本の最重要課題のフロントランナー
視角2　地域との協働による地域再生・農業改革を5学科で体現する研究開発プログラム

金農オリジナル学習評価法（可視化された指導と評価の一体化）
GKH（金農総幸福量）、ポートフォリオ、ルーブリック等により評価・検証

「秋田型農業成長モデル」

○地域に魅力を感じ、地域に定住したいと思う生徒の割合‥ 90%（令和4年度目標値）
○就職希望者の中で県内に就職をした生徒の割合‥‥‥‥ 95%（令和4年度目標値）
○地域協働事業を活用して研修等に参加した生徒の割合‥‥90%（令和4年度目標値）

1「グローバルスタディ」領域
GAP教育やSDGS等のグローバルスタンダードから地域を見る目を養う

2「第4次産業・農業革命」領域
大学や研究関連機関との連携によるスマート農業などの先端技術の習得

3「ソーシャルスキルアップ」領域
長期インターンシップや企業との協働による商品開発・6次産業化の実践

4「地域一体型農業コミュニティ形成」領域
地域資源の活用、地域文化の継承・普及、コミュニティプラットフォーム形成

地方創生として目指す地域の将来像

- 新規就農者等の向上、コミュニティの維持
- 地域産業の発展や雇用確保、所得の向上
- 持続的で内発的な地域社会の実現
- 幸福感や豊かさなど新しい価値観の創造

身に付けさせたい資質・能力

①改革する力
②思考力
③人間関係構築力
④実践力
⑤創造力・将来設計力
⑥先見力
⑦マネジメント力
⑧多文化協働力

先駆的な取組を支援「金農支援コンソーシアム」

◆共学共創コミュニティの創出
行政（秋田県、秋田市、潟上市、大潟村）、等、大学等研究機関（秋田大学、秋田県立大学）、関連企業、農家等との連携

◆研究推進の環境整備
研究開発推進委員会の設置（校内研究体制の推進）
◆地域に開かれたカリキュラム開発
「カリキュラム開発等専門家」・「地域協働学習実施支援員」の配置

カリキュラム1年次 基礎	カリキュラム2年次 発展	カリキュラム 3年次 応用と実践
職場見学等で地域理解 ⇒	学校設定科目【地域創生論】 ⇒	学校設定科目【社会起業家実践】
到達目標 地域理解	到達目標 地域課題発見と解決	到達目標 地域創造実践と提言
◆関係科目「農業と環境」「農業情報処理」「総合実習」他	◆関係科目「作物」「野菜」「畜産」「測量」「課題研究」他	◆関係科目「課題研究」「農業経営」「水循環」「食文化」他

縮減社会を生き抜き、あきたの未来を創造する新たな農業高校成長モデルの研究開発
～地域定住人材の育成を目指したKANANOスタイル農業高校改革プロジェクト～

【研究開発の背景】

秋田県は超少子高齢、人口減少県であり、世界をはじめ日本の最重要課題のフロントランナーでもある。地域との協働体制による地域再生・農業改革を5学科で体現するプログラムの構築が、研究開発の背景である。
◆2020年全国平均高齢化率29%⇒秋田県38%　◆2040年秋田県の高齢化率予測50%⇒「2040年問題」

【目指す生徒像】

縮減社会に対応した「秋田型農業成長モデル」の開発を通じて農業関連産業を変革することができる人材の育成。あきたの未来を創造し、持続可能な地域社会を支えるソーシャルキャピタル（協調行動が作りだす社会関係資本）の構築や、Society 5.0に対応できる社会の実現に向けて、自らの意思で地域マネジメントに貢献する高度職業人の育成を目指す。

1　金農コンソーシアムの構築（8つの関係機関で構成）
①秋田市 ②潟上市 ③大潟村 ④秋田県産業教育振興会
⑤秋田大学 ⑥秋田県立大学 ⑦秋田県教育委員会 ⑧本校
2　金農コンソーシアムへの支援・配置
①カリキュラム開発等専門家（秋田県農業研修センター）
②地域協働学習実施支援員（公財法人秋田県農業公社）
3　研究推進に向けた校内環境整備
①研究開発推進委員 ②教育課程委員会 ③農業部会

運営指導委員会による事業への指導助言

秋田市主催美人街道フォーラム
令和2年10月17日

コンソー・運営指導委員合同会議
令和2年10月20日（本校）

秋田県立大学との連携協定
令和3年2月17日（県立大学）

「KPI」による金農オリジナル学習評価法（可視化された指導と評価の一体化）
ポートフォリオ、ルーブリック、金農版GKH（Gross Kanano Happiness）等により評価・検証

身に付けたい資質能力
①改革する力 ②思考力 ③人間関係構築力 ④実践力
⑤創造力・将来設計力 ⑥先見力 ⑦マネジメント力 ⑧多文化協働力

運営指導委員会による指導助言

カリキュラム1年次
基礎（In　About）

到達目標「地域理解」
関係科目「農業と環境」「農業情報処理」「総合実習」他

○1年次の重点目標
現場視察や出前授業等で**地域理解**を深める

2年次学校設定科目
「地域創生論」課題発見

成長モデル研究領域

1 「グローバルスタディ」領域
GAP教育、グローバル農業研修

2 「第4次産業・農業革命」領域
スマート農業実践、大学等との連携

3 「ソーシャルスキルアップ」領域
長期インターン、6次産業化実践

4 地域体型農業コミュニティ形成」領域
農業交流活動、文化伝統の継承活動

令和2年度の取組状況

長期インターンシップ

スマート農業実践

商品化の実践

〔各学科における取組内容〕
生物資源科：GAP研修、長期インターン、米食味官能調査
環境土木科：現場視察、長期インターン、ドローン技術講習
食品流通科：酒造会社視察、販売戦略講演、出前授業
造園緑地科：長期インターン、スマート農業実践、技術講習会
生活科学科：梨商品化、着付け講座、巻き寿司講習

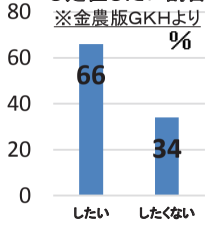
〔取組状況（実数）〕
○産業界、大学等研究機関と連携した事業所数：**20人**
○講師を招聘し、講義や講演等を実施した回数：**20人**
○本事業を活用して研修等に参加した生徒割合：**74%**
○長期インターンシップに参加した生徒の数：**18人**

成果と課題

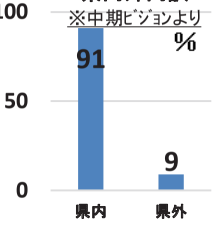
〔成果〕
○今年度の目標である「地域理解」に関しては、72%の生徒が地域の課題を見つけ、意欲的に取り組みたいと認識している。
○六次産業化の実践は、地域の魅力再発見に繋がっている。
○コンソーシアムの構築は、組織同士の連携強化に寄与した。

〔課題〕
○校内組織体制の強化と、情報発信による広報活動の推進。
○金農版GKH指標の確立と、評価の一体化に向けた検証。

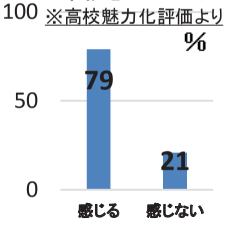
①地域に魅力を感じ定住したい割合
※金農版GKHより



②就職決定者の県内外内訳
※中期ビジョンより



③今の生活への幸福感や豊かさ
※高校魅力化評価より



縮減社会を生き抜き、あきたの未来を創造する新たな農業高校成長モデルの研究開発
～地域定住人材の育成を目指したKANANOスタイル農業高校改革プロジェクト～

【研究開発の背景】

秋田県は超少子高齢、人口減少県であり、世界をはじめ日本の最重要課題のフロントランナーでもある。地域との協働体制による地域再生・農業改革を5学科で体現するプログラムの構築が、研究開発の背景である。
◆2020年全国平均高齢化率29%⇒秋田県38%　◆2040年秋田県の高齢化率予測50%⇒「2040年問題」

【目指す生徒像】

縮減社会に対応した「あきた型農業高校成長モデル」の開発を通じて農業関連産業を変革することができる人材の育成。あきたの未来を創造し、持続可能な地域社会を支えるソーシャルキャピタル（協調行動が作りだす社会関係資本）の構築や、Society 5.0に対応できる社会の実現に向けて、自らの意思で地域マネジメントに貢献する高度職業人の育成。

1　金農コンソーシアムの構築（8つの関係機関で構成）
①秋田市 ②潟上市 ③大潟村 ④秋田県産業教育振興会
⑤秋田大学 ⑥秋田県立大学 ⑦秋田県教育委員会 ⑧本校
2　金農コンソーシアムへの支援・配置
①カリキュラム開発等専門家（秋田県農業研修センター）
②地域協働学習実施支援員（公社法人秋田県農業公社）
3　研究推進に向けた校内推進体制
①研究開発推進委員 ②教育課程委員会 ③農業部会
4　学校設定科目「地域創生論」の開設と公開講座

「運営指導委員会」による事業への指導助言

第1回 運営指導委員会
令和3年5月11日（火）

地域創生論 島根大学中村怜詞
令和3年11月17日（水）

地域とともにある学校づくり推進フォーラム
令和3年11月19日（金）石巻市

「KPI」による金農オリジナル学習評価法（可視化された指導と評価の一体化）
高校魅力化評価、ルーブリック、金農版GKH（Gross Kanano Happiness）等により評価・検証

身に付けたい資質能力

①改革する力 ②思考力 ③人間関係構築力 ④実践力
⑤創造力・将来設計力 ⑥先見力 ⑦マネジメント力 ⑧多文化協働力

カリキュラム・マネジメント

カリキュラム1年次
基礎　（In About）
到達目標「地域理解」
関係科目「農業と環境」「農業情報処理」「総合実習」他

カリキュラム2年次
発展（About For）
到達目標「課題発見・解決」
関係科目「課題研究」「地域創生論(学校設定科目)」他

成長モデル研究領域

1 「グローバルスタディ」領域
GAP教育,グローバル農業,SDGS等

2 「第4次産業・農業革命」領域
スマート農業実践,大学等との連携

3 「ソーシャルスキルアップ」領域
長期インターン,6次産業化実践等

4 地域一体型農業ｺﾐｭﾆﾃｨ形成」領域
農業交流活動,環境,地域ｺﾐｭﾆﾃｨ活動

令和3年度の取組内容

現場見学(秋田港)

東京大学集中講義

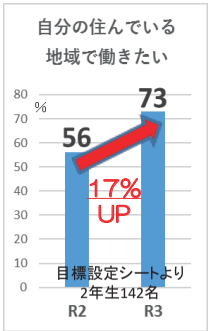
商品化の実践

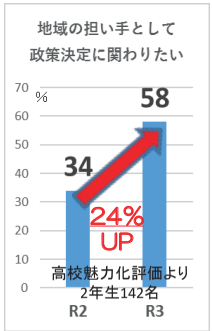
〔各学科における取組内容〕※各学科の取組から抜粋
生物資源科：長期ｲﾝﾀｰﾝ、県立大AIUｽﾏｰﾄ農業実践
環境土木科：現場視察、ﾄﾞﾛｰﾝ講習、県立大連携研究
造園緑地科：長期ｲﾝﾀｰﾝ、樹木医研修、現場視察
集中講義（国際教養大、東京大学 他）
生活科学科：梨商品化、ハーブ活用研修、着付け講座

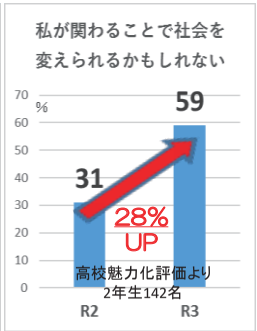
〔取組状況（実績）〕※目標設定シートより抜粋
○産業界や大学,研究機関と連携した事業所数：**20箇所**
○講師を招聘し、講義や講演等を実施した回数：**16人**
○長期インターンシップに参加した生徒の数：**13人**
○就職希望者の中で県内就職した生徒の割合：**88%**

成果と課題・生徒の変容

〔成果と課題 〕
○今年の目標「地域課題の発見・解決」に関しては、78%の生徒が地域の問題や課題に関わり行動したいと認識している。
○91%の生徒が、現在の生活に豊かさや幸福感を感じている。
▲情報発信による広報活動の推進(様々な情報管理の一元化)
▲事業終了後の自走に向けた校内外体制システム化の構築







秋田県立金足農業高校　地域との協働による高等学校教育改革推進事業

Research and Development　ROAD　MAP

	1年目(2020)「地域理解」	2年目(2021)「課題解決」	3年目(2022)「地域創造」
学校設定科目	・教育課程委員会での検討 ・現場視察等での**地域理解**	「地域創生論」の設置 ・**地域課題の発見・解決**	「社会起業家実践」の設置 ・**地域の未来創造**、モデル構築
グローバル スタディ領域	・GAP(農業生産工程)研修 ・グローバル農業講演会	・**ＧＡＰ研修・学習会** ・**県立大、AIU出前授業**	・**ＧＡＰ研修・学習会** ・オンライン国際交流学習
第四次産業・ 農業革命領域	・ドローン、パワースーツ研修 ・高度木材加工研究所視察	・**ICT,スマート農業実践** （水田ｾﾝｻ,ﾄﾞﾛｰﾝ等）	・大学等と連携した**スマート農業実践、研究成果報告**
ソーシャル スキルアップ領域	・長期インターンシップの実施 ・関連産業現場視察研修	・**長期インターンシップ** ・関連産業現場視察	・**長期インターンシップ 成果研究発表会の実施**
地域一体型 コミュニティ領域	・商品開発や地域連携事業 ・食や地域文化の講習会	・商品開発**実用化検証** ・食や地域文化講習会	・新商品の**販売、ﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ** ・地域文化の**継承・普及**
金農GKH指標 の確立	①金農GKH指標作成・検討 ②ルーブリック評価基準作成	①**GKH指標改善**・運用 ②ルーブリック改善・運用	①**GKH指標確立・学校比較** ②ルーブリック評価の確立

目標値 KPI

- 地域課題に意欲的に取り組む　65 ⇒ 85%
- 外からの視点で地域を考える機会　60 ⇒ 80%
- 関連産業への就職率　40 ⇒ 50%
- インターン参加生徒数　8 ⇒ 15人
- 地域のために役立ちたい　80 ⇒ 90%
- 現在の生活に対する豊かさや幸福度　80 ⇒ 90%

目指すべき最終ゴール　FINAL　GOAL

1　農業関連産業を変革することができる（地域マネジメントに貢献できる）人材の育成
2　地域の魅力に気づき、地域に定住しながら、地域の関連産業を担う人材の育成

第２章　研究の経緯

１　契約締結

（１）契約締結　令和４年（２０２２年）　４月　１日
（２）予算伝令　令和４年（２０２２年）　３月３１日

２　事業運営と実施体制

（１）学校における研究体制、教職員の役割，事業実施への支援体制

校長を統括にあて「研究開発推進委員会」を設置する。委員には教科農業、家庭のみならず普通教科の教員も委員として配置し、多角的な見地ならびに教科間連携から研究開発を進める。役割としては、主として、カリキュラムの編成を担う教務主任と、農場運営ならびに農業実習を司る農場長が中心となり、カリキュラム開発に係る教務部ならびに、カリキュラム開発専門家からの適切な指導・助言等によって、学校設定科目の設置、教材の開発や評価方法の検討を行う。その際は校内の「教育課程委員会」と情報共有を行う。また、地域協働学習実施支援員がコンソーシアムとの連絡・調整を行うことで円滑な事業の進展に期する。

（２）カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の位置付け

①カリキュラム開発等専門家の位置付け

秋田県農業研修センター企画・研修班専門員の伊東金一氏を非常勤職員として配置した。今年度は年間３回の協議実績であり、具体的には１）研究開発推進委員会への参加、指導・助言、２）評価方法に関する手法の検討、３）授業改善の手立てならびに研究授業の検証等を通じたカリキュラム開発、４）学校設定科目における講師選定・年間指導計画の作成など、研究開発に係わる具体の部分で参画いただいた。

②地域協働学習実施支援員

公益社団法人秋田県農業公社事務局長の田口淳一氏を非常勤職員として配置した。年間２回の協議実績であり、具体的には受入事業、研修先とのマッチング、いわゆる連絡調整に係わる打ち合わせ等を実施した。

（３）学校長の下での研究開発の進捗管理ならびに成果の検証・評価等について

校長の下で設置された研究開発推進委員会や各種会議において、定期的な確認や成果の検証・評価を行った。検証・評価方法としては、ＫＰＩ指標をもとにルーブリックやポートフォリオ、アンケートを実施した。

さらに、金農版ＧＫＨ（Gross Kanano Happiness）作成・評価し、幸福度や豊かさの量を指標とした個別評価を実施した。また、外部委託評価として、「高校魅力化評価システム」を活用し、質的評価を検証している。

これらを有機的に組み合わせた学校独自の評価システムを開発し、可視化された指導と評価の一体化を実践するとともに、次年度の計画や実施方法を改善するＰＤＣＡサイクルの仕組みを明確に設定し、適切かつ信頼度の高い検証・評価システムを構築・検討した。さらに、研究成果発表会を年１回実施し、生徒の自己評価にも繋げている。

（４）研究推進に関わる会議等の実績

①コンソーシアム関連との協議・打合せ・会議等

月日	曜	協議内容等
４月１４日	木	協議(秋田県立大、大潟村、秋田県農業公社)
４月１５日	金	協議(秋田市、潟上市、ＪＡ全農秋田県本部)
６月１４日	火	第１回学校評議員会兼関係者評価委員会
６月２７日	月	第１回運営指導委員会
１１月１５日	火	産業教育審議会（秋田県総合教育センター）
１２月　６日	火	研究成果発表会（金足農業高校）
１２月　６日	火	第２回運営指導委員会
１月１７日	火	全国サミット（プロフェッショナル型）発表
１月３１日	火	成果検証事業ヒアリング（金足農業高校）
１月３１日	火	成果検証事業ヒアリング（秋田県農業研修センター）
２月　２日	木	第２回学校評議員会兼関係者評価委員会
２月　２日	木	秋田県教育研究発表会
３月１７日	金	成果検証発表会

②運営指導委員会（主担当：秋田県教育庁高校教育課）

ア　第１回運営指導委員会　令和４年６月２７日（月）１０時３０分より
委員への委嘱状交付、運営指導委員長の選任、事業趣旨の説明
課題研究発表（生徒)、昨年の報告と今年の概要説明及び質疑応答等

イ　第２回運営指導委員会　令和４年１２月６日（火）１３時より
３年間の事業成果報告、各学科からの取組内容の報告
今後の展望（予算面、実施体制面等)、委員からの指導助言等

午前中は３年間の集大成である研究成果発表会を実施。運営指導委員長である富士大学長の岡田秀二氏より基調講演を実施した。

③カリキュラム等開発専門家ならびに関係会議

月日	曜	協議内容等
６月２０日	月	教育課程委員会（学校設定科目に関する協議）
６月２７日	月	第１回運営指導委員会・第１回研究開発推進委員会
６月３０日	木	教育課程委員会（学校設定科目に関する協議）
９月３０日	月	第２回研究開発推進委員会
２月１０日	火	第３回研究開発推進委員会

④地域協働学習実施支援員（日常的にメール等にて情報交換を実施）

月日	曜	協議内容等
４月１４日	木	今年度の事業説明及び協議（受入先とのマッチング）
６月２７日	月	第１回運営指導委員会

⑤校内関係会議

ア　経営企画会議：学校行事や学校経営に関わる主任級レベルの会議であり、この会議おいて、本事業の進捗状況等の報告、情報を提供することで職員の共通理解と本事業内容の共有化を図っている。

〔会議開催日〕計１０回の開催

４月１３日（水）、５月１１日（水）、６月９日（木）、７月７日（木）
９月１３日（火）、１０月１３日（木）、１１月９日（水）
１２月８日（木）、２月７日（火）、３月３日（金）

イ　農業部会：校長、教頭、事務長、農場長、５学科主任および各学科所属職員、事務実習費担当者から構成される会議であり、事業計画の立案・計画・実行といった実務を取り扱う会議である。この会議を通じて、進捗状況などの共通理解と情報の共有化を図っている。

〔会議開催日〕計７回の開催

４月１８日（月）、５月１９日（木）、７月１５日（金）、９月６日（火）、
１０月１１日（火）、１１月１７日（木）、２月７日（火）

ウ　職員会議：全職員による事業の共通理解と情報の共有化を図った。

〔会議開催日〕計１２回の開催

４月２２日（金）、５月２５日（水）、６月２２日（水）、
７月２２日（金）、８月３０日（火）、９月２９日（木）、
１０月２７日（木）、１１月２８日（月）、１２月２１日（水）
１月２４日（火）、２月１６日（木）、３月２０日（月）

第３章　領域別研究開発の取組

１　研究開発における構想の目的

社人研の試算による全国最大の人口減少率（41.2%）と、それに連動するかたちで、減少する農家数（18.4%減の 48,900 戸）は、本県の基幹産業である農業の危機的状態を意味している。これら、本県が抱える人口減少、地域縮小社会に対応しつつ、今後ますます拡大するグローバリゼーションとイノベーションに対し、「秋田型農業成長モデル」の開発を通じて、地域課題を発見し、協働しながら課題解決に取り組むことができる人材の育成を図るとともに、秋田の未来を創造し、持続可能な地域社会の構築や、Society 5.0 に対応できる資質・能力を身に付けることを目的とした構想である。

２　構想目的の達成手段としての４領域

縮減社会に対応した地域定住人材の育成及び研究・カリキュラム開発、産学官連携の金農支援コンソーシアム活動を「秋田型農業成長モデル」とし、コンソーシアムにおいて地域のニーズを教育活動に取り入れ、１「グローバルスタディ」領域、２「第４次産業・農業革命」領域、３「ソーシャルスキルアップ」領域、４「地域一体型農業コミュニティ形成」領域で、教科「農業」の各科目と学校設定科目との有機的融合を図り、地域に開かれたカリキュラム開発をプロジェクト学習法により実施する。

（1）グローバルスタディ領域

グローバル化に対応するため、環境教育（ＥＳＤ）やＳＤＧs関連を学ぶ領域。

（2）第４次産業・農業革命領域

ＩＴ・スマート農業を実践し、高度な知識と最先端の農業技術を修得するためのプログラム。地域の関連産業を変革させる意識を醸成させる領域。

（3）ソーシャルスキルアップ領域

長期インターンシップや関連産業現場視察等を通じて、技術や社会性を身に付けるための高度化社会人育成プログラム領域。

（4）地域一体型農業コミュニティ形成領域

地域の少子高齢にともない減少しつつあるコミュニティを持続するため、地域の伝統農産物の栽培や、地域の伝統文化の継承等を推進する領域。

３　各学科別事業実施数（５６事業、複数の学科による横断的事業１事業を含む）

学科別で見ると、生物資源科９事業、環境土木科１２事業、食品流通科１事業、造園緑地科１２事業、生活科学科６事業の合計４０事業（表３－１、表３－２）の実施であった。次ページでその取組内容を報告する。なお、本事業に参画した生徒の延べ人数は**2,392名**（令和２年度811名、令和３年度1,631名）であり、初年度の約３倍の生徒が今年度は参画した実績となっている。３年間を通じて本事業が教職員ならびに生徒へ浸透した結果が数値として表れたと考えている。

領域名【　グローバルスタディ領域　】

ＳＤＧｓ出前講座２０２２

担当者　造園緑地科　臨時講師　小野聡悦

１　実施目的

SDGs が伝えたいことについて深く知り学ぶことにより、持続可能な社会とは何か、持続可能な社会の創り手として将来どのように貢献していけるのか、新しい社会とどう向き合っていけば良いのか等、より深く考えるきっかけとしたい。

２　主催・講師等

NPO 法人環境会議所東北　主任研究員　海藤　節生　氏

３　実施内容

（１）実施期間　令和４年６月３０日（木）

１・２校時　９：００～１０：４５　造園緑地科１年

３・４校時１１：００～１２：４５　造園緑地科３年

５・６校時１３：３０～１５：１５　造園緑地科２年

（２）対象学科　造園緑地科　１～３年

対象生徒　１年生（２９名）、２年生（３２名）、３年生（３５名）

以上９６名

（３）開催場所　秋田県立金足農業高等学校　実習棟　造園施工実習室

４　研修の様子

写１）SDG s について講義の様子

写２）興味ある目標について考え中

５　参加生徒の感想

１Ｌ笹渕　心：街で見かけるＳＤＧｓに関する募金箱に募金すると、どこの誰に届くのか、疑問や関心を持つことができました。

２Ｌ石川　璃緒：今の世界で起こっている問題の現状を知ることが出来たと共に、改めてＳＤＧｓについて正しく、詳しく知り、考えることが出来ました。

領域名【　グローバルスタディ領域　】

ＳＤＧｓ親子ワークショップ

担当者　造園緑地科　教諭　和泉有紗

１　実施目的

これまで環境教育とアップサイクルの普及を目的として、剪定等の管理作業の際に発生する廃材を活用したアレンジメント製作を行うワークショップを実施してきた。今回は、小学校低学年の児童とその保護者を対象にしたワークショップを行い、持続可能なものづくり（クラフト製作）を体験することで、自然の恩恵に感謝する心と豊かさを見つめ直す気概を育みながら、子・親世代への環境教育の実践ならびに地域社会へ訴えかける契機とする。

２　主催・講師等

本校造園緑地科３年１４名（課題研究班）

３　実施内容

（１）実施期間　令和４年１１月２３日（水）１０：００～１２：００
（２）対象学科　近隣小学校１～３年生および保護者１５組（計３２名）
（３）開催場所　本校見本園および実習棟「測量実習室」

４　研修の様子

写真１）樹木クイズを出題している様子　写真２）ワークショップ終了後の記念撮影

５　参加生徒の感想

３Ｌ　渡部　春樹：これまで学んだ樹木に関する知識を生かし、小学生に分かるよう言葉を選んで説明した。クイズや材料収集（剪定）、作品製作に満足いただき、とても嬉しく、やりがいを感じた。

３Ｌ　佐々木柚羽：大きな声でアナウンスすることに慣れていなかったが、次第に自信を持って話せるようになった。協力して物事を成し遂げる喜びを学び、自分自身の成長を感じることができた。

領域名【　第四次産業・農業革命領域　】

「建設技術公開ＥＥ東北２２視察研修」

担当者　環境土木科　教諭　冨田和樹

１　実施目的

（１）土木系の新技術展示会の見学
（２）新技術プレゼンテーションから学校現場で取り入れることができそうな情報を収集する。
（３）インフラ DX（ICT）体験に参加する。

２　主催・講師等

ENGINEERING EXHIBITION 東北‘２２

３　実施内容

（１）実施期間　令和４年６月１日（水）１０：００－１６：３０
　　令和４年６月２日（木）　９：３０－１６：００
（２）対象職員　環境土木科　冨田和樹
（３）開催場所　夢メッセみやぎ（宮城県仙台市宮城野区港３丁目 1-7）

４　研修の様子

写１）RealFlight 体験の様子

写２）空間再現ディスプレイの様子

５　参加職員の感想

さまざま展示がされていたが、一番興味があったのは昭和コンクリート工業（株）さんの「イタオトシ（試作品）」で、金農の農場に取り入れることができそうであった。水口に設置し、確実な取水や水資源の節約など、環境負荷低減を目標にホームセンターで手に入りそうな部材を加工し作成されていた。

領域名【　ソーシャルスキルアップ　領域　】

農業の省力化・スマート農業に関する講義(AOC 施設見学)

担当者　食品流通科　臨時講師　佐藤旭浩

1　実施目的

近年の秋田県農業では農業従事者の減少や、農業現場におけるベテランの勘やノウハウに頼った農業経営が課題となってきている。そのため、本講義ではハウス内環境の可視化に関する IoT 技術の実例を学ぶことで、農業従事者の高齢化、後継者問題など、さまざまな課題をＩＣＴやロボット技術で解決するスマート農業についての理解を深める。

2　実施内容

・実施期間　　令和４年７月１５日（金）
・対象学科及び生徒　　３年食品流通科　野菜専攻１６名、３年進学希望者５名
・開催場所　　秋田県立大アグリイノベーション教育研究センター
・講師　　生物資源科学部アグリビジネス学科　教授　吉田康徳　氏

3　研修の様子

写真１）技術体験の様子

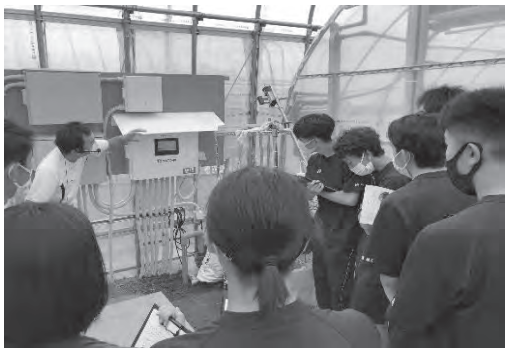


写真２）機器の説明を受けている様子

4　参加生徒の感想

３Ｆ北嶋　晶：まず、施設の広さに驚きました。そして多くのビニールハウスに機械などの自動的な設備があり、人の労働力が軽減されていました。ですが、農産物を生産する上でやはり天気には逆らえないので、結局は人の力が必要であるということを実感しました。

３Ｆ畠山愛夢：今まで見たことない機械や知らなかったことがたくさんあって驚きました。研究について説明を聞いて、農業のことをもっと知りたいと思うきっかけになりました。

領域名【　第四次産業・農業革命領域　】

「測量先端技術出前講座」

担当者　環境土木科　教諭　冨田和樹

１　実施目的

国土交通省主導で取り組んでいる i-Construction に よる生産性の向上を実現するため、調査・測量の段階から３次元データを導入していることから、最新の３次元データ計測機材等に触れる。

２　主催・講師等

一般社団法人秋田県県土整備コンサルタンツ協会
(石川技研・ウヌマ地域総研・創和技術・測地コンサル・眞宮技術)

３　実施内容

（１）実施期間　令和４年９月１２日（月）終日
（２）対象生徒　環境土木科２年３０名、造園緑地科２年３２名
（３）開催場所　金足農業高校（実験実習棟付近、陸上競技場）

４　講座の様子

写１）③GNSS-RTK の説明の様子

写２）自動追尾の様子

５　参加生徒の感想

２Ｅ高坂　篤輝：測量の分野でも自動化が進んでいることを初めて知ることができた。

２Ｅ芹田　　蒼：今回の出前講座で将来の選択肢を増やすことができた。この講座を生かして、自分の技術を高めていきたい。

領域名【　第四次産業・農業革命領域　】

「現場見学（成瀬ダム・相野々ダム）」

担当者　環境土木科　教諭　冨田和樹

１　実施目的

⑴ダムの現場説明と現場内見学から実際の施工方法を学ぶ。
⑵ダム展望台から自然に配慮しながらの施工である事を学ぶ。
⑶KAJIMA DX LABO から現場で利用されている最新の機械を見る。

２　主催・講師等

成瀬ダム　　住所：秋田県雄勝郡東成瀬村椿川字トクラ　TEL 0182-23-8450
相野々ダム　住所：秋田県平鹿郡山内村大字山野沢　　TEL 0182-35-5401

３　実施内容

（１）実施期間　令和４年１０月６日（月）終日
（２）対象生徒　環境土木科１年２８名
（３）開催場所　成瀬ダム、相野々ダム

４　見学の様子

写１）成瀬ダムの説明の様子

写２）タブレット端末での操作の様子

５　参加生徒の感想

１Ｅ工藤　六叶：KAJIMA DX LABO で見た成瀬ダムの VR の説明がわかりやすくて、印象に残りました。
１Ｅ荻原　太陽：成瀬ダムは大きな工事で最新の ICT を使っていて、この先の土木の分野でも多くの ICT が導入されていくのを学ぶことができました。

領域名【　第四次産業・農業革命領域　】

農業ｗｅｅｋ視察研修（教員研修）

担当者　教頭　藤原　淳

１　実施目的

次世代農業及び６次産業化に関する商品を提供している企業からの最新情報の収集と、各分野において先進的な取組みを行っている講師による講演を聴講することにより、専門的知識を深める。

２　主催・講師等（視察先）

ＲＸ　Ｊａｐａｎ株式会社農業 week 事務局　千葉県千葉市幕張メッセ

３　実施内容

（１）実施期間　令和４年１０月１１日（火）～１３日（木）２泊３日

（２）対象職員　教頭　藤原淳　１名

（３）出展社からの最新情報の収集

（４）特別講演聴講

・クボタの見据えるスマート農業の未来と市場戦略

（株）クボタ　特別技術顧問 工学博士　飯田 聡

・スマート農業の現状と今後の展望

北海道大学大学院農学研究院　野口 伸

４　研修の様子

写１）会場全体の様子

写２）セミナー会場の様子

５　参加教員の感想

今回のイベントは「農業資材」「スマート農業」「６次産業化」「畜産資材」の４つのコーナーに分けられており、私は「スマート農業」「６次産業化」のコーナーに出展された企業を中心に見学した。出展企業数が多く、全てを見学することは難しかった。農業との関連が薄いと思われる企業からの出展もあり、農業は成長産業であることを認識できた。特別講演を受講し、これからのスマート農業について詳しく知ることができた。研修の機会をいただいたことに深く感謝申し上げます。

領域名【　第四次産業・農業革命領域　】
相野々ダム・玉川ダム視察

担当者　環境土木科　臨時講師　氏名　中田耀介

1　実施目的

① 現場説明と現場内見学から実際の施工方法を学ぶ。
② 展望台から自然に配慮しながらの施工であることを学ぶ。
③ KAJIMA DX LABO から利用されている最新の機械を見る。

2　主催・講師等

東北農政局　旭川農業水利事務所（秋田県横手市本町２番９号）
次長　　髙橋　忠行　氏

国土交通省　東北地方整備局　（仙北市田沢湖玉川字下水無 92）
玉川ダム管理所　専門職　成田　進也　氏

3　実施内容

（1）実施期間　令和４年１０月２８日（金）８：００～１６：５０
（2）対象学科　環境土木科２年
　　対象生徒　環境土木科（３０名）　以上３０名
（3）開催場所　相野々ダム（秋田県平鹿郡山内村大字山野沢）
　　玉川ダム　（仙北市田沢湖玉川字下水無 92）

4　研修の様子

写１）工事現場見学の様子

写２）ダム小模型見学の様子

5　参加生徒の感想

２Ｅ加賀屋いずみ：新しい技術が使われていることを知った。ダム工事では一つの決まった工事方法だけではなく、その場に合わせた工事を行っていることが分かった。
２Ｅ杉本　夢斗　：ダム見学では、水力発電や地域の水害、農地に水を送る機能などを知ることができた。見学をさせていただいてあらためて、ダムの大切さを知った。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

学校設定科目「社会起業家実践」ビジネスプラン作成に関わる出前授業

担当者　研究開発主任　教諭　照内之尋

１　実施目的

活力ある日本を創り、地域を活性化するためには、次世代を担う若者の力が必要である。日本政策金融公庫は、将来を担う若者の創業マインド向上を目的に、全国の高校生を対象としたビジネスプラン・グランプリを開催している。科目「社会起業家実践」において、このグランプリに参加するための事前学習として作成プランのブッシュアップのため、出張授業を活用する。

２　主催・講師等

日本政策金融公庫　国民生活事業本部東北創業支援センター
上席所長代理　　本田正人　氏

３　実施内容

（１）実施期間　・令和４年６月１０日（金）基礎・中級編
　　・令和４年９月　２日（金）実践・応用編
　　・令和４年９月２２日（木）ブラッシュアップ
（２）対象学科　全学科選択Ｂ社会起業家実践選択者３１名
（３）開催場所　秋田県立金足農業高等学校　会議室

４　研修の様子

写１）講師の本田先生

写２）質問をする生徒

写３）プラン作成の様子

５　参加生徒の感想

３Ｈ石田　千歩：少子高齢化の進む秋田において、若い私たちのアイデアやチャレンジで地域を盛り上げ、積極的に挑戦していきたい。
３Ｈ長谷川智花：ビジネスプランを作成する難しさと同時に、いろいろなアイデアが浮かび、発想力や創造力が身に付く授業だった。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

樹木医研修（樹木見本園樹種調査）

担当者　造園緑地科　教諭　和泉有紗

１　実施目的

現在、本校の樹木見本園は経年変化により、樹勢が抑えられ、成長が妨げられている。また、樹名板が劣化し、教材としての役割を果たせていない状況である。専門家の意見や対処法を知り、樹種の特定や保護・維持管理を学ぶ一環とする。

２　主催・講師等

講師　日本樹木医会秋田県支部　三浦　貫才　氏（樹木医）
　　日本樹木医会秋田県支部　藤原　恒雄　氏（樹木医）

３　実施内容

（１）実施期間　第１回：令和４年　６月１０日（金）５・６校時
　　第２回：令和４年　７月１５日（金）５・６校時
　　第３回：令和４年　９月３０日（金）５・６校時
　　第４回：令和４年１１月　４日（金）５・６校時
　　第５回：令和４年１１月２５日（金）５・６校時
（２）対象学科　造園緑地科３年　１４名（課題研究班）
（３）開催場所　本校見本園および実習棟「造園設計材料実習室」、製図室

４　研修の様子

写真１）葉形について講義を受ける様子

写真２）樹木の枝張りを計測している様子

５　参加生徒の感想

３Ｌ渡辺　勇気：樹木医から講義を受けた後、見本園にて調査を行った。見るべきポイントを丁寧に教えていただきながら、今年度担当した樹木に対して理解を深め、目指すべき見本園の姿を検討することができた。

３Ｌ鈴木　　凪：慣れない調査に初めは戸惑う部分が多かったが、少しずつ慣れていき担当した樹木に愛着を持って作業できた。見本園の維持・管理に日々の管理が重要であることを自覚しながら整備にあたった。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

「森林・林業講習会（木材流通・利用促進について）」

担当者　造園緑地科　教諭　宮腰　明

1　実施目的

「課題研究」の授業の一環として、秋田県の財産である林業材料の利活用について学ぶキャリア教育充実事業。林業事業において専門技術者の講話を学ぶことにより、本校生徒に秋田の産業に携わることの意義と使命感を身に付けさせることを目的とする。

2　主催・講師等

講師　秋田県農林水産部林業木材産業課
調整・木材流通班　主幹　　小玉　理　氏

3　実施内容

（1）実施期間　令和４年６月１７日（金）５・６校時

（2）対象学科　造園緑地科３年　３５名

（3）開催場所　本校実習棟「造園設計材料実習室」

4　研修の様子

写真１）林業の現状についての様子

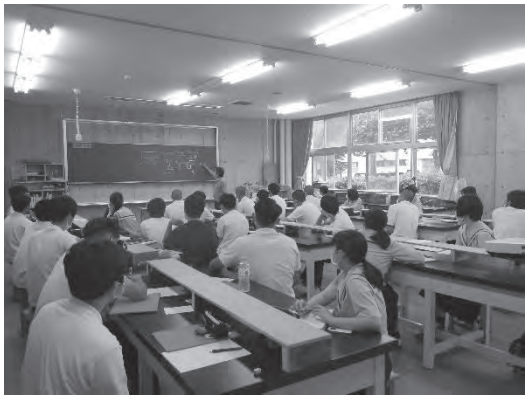


写真２）木材の利用促進についての様子

5　参加生徒の感想

３Ｌ永井　慈仁：秋田県農林水産部の小玉さんから講義を受けて林業の現状や役割を知った。自分の進路希望は県職員の林業職なので、細かいところまで学べて、進路対策の講座にもなった。

３Ｌ工藤　健汰：林業に興味があり、林業系の進路を考えているので、とても興味深い講習会になった。山林の役割や林業の可能性について、普段知れないことが知れた講習会になった。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

「外部施設見学（東北地方整備局玉川ダム管理所中和処理施設）」

担当者　環境土木科　教諭　冨田和樹

1　実施目的

（1）ＲＣＤ工法（現在主流となっている工法）の特徴や構造を学ぶ。
（2）玉川の大噴から流れ出す強酸性泉の環境への影響を理解する。

2　主催・講師等

（1）玉川ダム（ダム、資料室）
　　仙北市田沢湖玉川字下水無 92　ＴＥＬ：0187-49-2170
（2）東北地方整備局 玉川ダム管理所 中和処理施設
　　仙北市田沢湖玉川字渋黒沢 ＴＥＬ：0187-49-2360

3　実施内容

（1）実施期間　令和４年７月２１日（木）８：００－１７：００
（2）対象生徒　環境土木科１年２８名
（3）開催場所　玉川ダム・東北地方整備局 玉川ダム管理所 中和処理施設

4　見学の様子

写１）ＲＣＤ工法の説明の様子

写２）中和処理実験の様子

5　参加生徒の感想

１Ｅ松岡　　珀：ゲートの種類や使用時の過程をジオラマで見ることができた。良い経験になった。

１Ｅ加藤　汰空：ダムが下流の住民の生活を支えていることがわかった。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

長期インターンシップ

担当者　生物資源科　教諭　近江広和

1　実施目的

インターンシップを通して、コミュニケーション能力や職業理解能力、課題解決能力を養い、自己の将来の在り方生き方について考え、自己実現に向かって主体的に人生を切り開いていく力を育む。

2　主催・講師等

株式会社　寿牧場　秋田県秋田市河辺松渕字餅田沢1-6　ＴＥＬ：090-5353-3415
担当：代表　高橋　寿

3　実施内容

・実施期間（日時）　令和４年７月２５日（月）から７月２９日（金）の５日間
・対象学科、生徒　　生物資源科２年　伊藤　矢姫・藤田　あさひ
　　生物資源科３年　鷲尾　謹
・実施場所：秋田市河辺　寿牧場

4　研修の様子

写真１）えさ箱の掃除

写真２）給餌について説明を受けている様子

5　参加生徒の感想

２Ｂ藤田あさひ：このインターンシップで、仕事をする大変さ、動物の命をいただいているという感謝の気持ちを学ぶことができました。
３Ｂ鷲尾　謹　：作業をしながら牛をよく見ていて、小さな変化を見逃さず、すぐに対応していてすごいと思いました。出荷した牛の枝肉を見たときに命の大切さを実感できました。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

長期インターンシップ

担当者　生物資源科　教諭　近江広和

1　実施目的

インターンシップを通して、コミュニケーション能力や職業理解能力、課題解決能力を養い、自己の将来の在り方生き方について考え、自己実現に向かって主体的に人生を切り開いていく力を育む。

2　主催・講師等

農事組合法人大進農場　秋田県男鹿市角間崎字楢沢 10 番地　ＴＥＬ：0185-46-3245
担当：理事　進藤　俊之介

3　実施内容

・実施期間（日時）　令和４年７月２５日（月）から７月２９日（金）の５日間
・対象学科、生徒　　生物資源科３年　目黒　優芽
・実施場所：男鹿市　大進農場

4　研修の様子

写真１）えさ箱の掃除

写真２）敷料の交換作業

5　参加生徒の感想

３Ｂ目黒　優芽：５日間がとても楽しくあっという間に感じた。働くうえで大切なことや仕事のやりがいを学ぶことができ大変勉強になりました。将来は大進農場で働きたいと思いました。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

長期インターンシップ

担当者　生物資源科　教諭　近江広和

1　実施目的

インターンシップを通して、コミュニケーション能力や職業理解能力、課題解決能力を養い、自己の将来の在り方生き方について考え、自己実現に向かって主体的に人生を切り開いていく力を育む。

2　主催・講師等

農事組合法人　鳥海高原花立牧場
住所：秋田県由利本荘市矢島町城内字花立 2-32　ＴＥＬ：0184-27-5111
担当：代表　佐藤　俊弥

3　実施内容

・実施期間（日時）　令和４年７月２７日（水）から７月３１日（日）の５日間
・対象学科、生徒　　生物資源科２年　加藤　百華
・実施場所：秋田県由利本荘市　花立牧場

4　研修の様子

写真１）ロボット搾乳機を操作

写真２）子牛に授乳している様子

5　参加生徒の感想

２Ｂ加藤　百華：牧場での体験を通して、仕事の取組に対しての考え方が変わりました。自分のやりたい仕事を経験してみて、将来是非牧場で働いてみたいと思いました。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

宮城県志津川高校視察研修（教員研修）

担当者　教頭　藤原　淳

１　実施目的

南三陸町からの支援を受け、校内に公営塾「志翔学舎」を開設したり、県外からきずな留学生を募集したりするなど地域と特徴的な連携が図られている志津川高校の県外中学生を対象としたオープンキャンパスを視察することにより、今後の地域連携の在り方についての理解を深める。

２　主催・講師等（視察先）

宮城県志津川高等学校　宮城県本吉郡南三陸町志津川字廻館９２番２

３　実施内容

（１）実施期間　令和４年７月２９日（金）～３１日（日）２泊３日
（２）対象職員　教頭　藤原淳　１名
（３）開催場所　宮城県志津川高等学校　復興祈念公園　他

４　研修の様子

写１）オープンキャンパス校長挨拶

写２）情報ビジネス科授業体験

５　参加教員の感想

町から高校が無くなることは町の衰退につながるとの危機感から、町全体で学校を支援している様子を伺い知ることができた。塾の運営費や留学生のための寮建設費についても、ほとんどが町からの援助であり、校名も来年度から南三陸高校に変更されるとのことである。

秋田県でも統廃合が進み高校が消える町が増えてきている。高校を残すことが町の活性化につながるのであれば、県立高校でも市町村からの支援を受けながら地域とより深い関係を構築することも選択肢の一つになり得ると感じた。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

県産農産物のドライ加工研修

担当者　生活科学科　教諭　佐藤睦子

１　実施目的

県産農産物のドライ加工・販売をしている県内のプロフェッショナルから、その加工技術を学び、本校の農産物のドライ加工食品の開発のヒントを得る。

２　主催・講師等

能代市「木能実」代表　　高濱遼平　氏、高濱奈保子　氏

３　実施内容

（１）実施期間　令和４年９月１日（金）１３：２５～１５：１５
（２）対象学科　生活科学科、造園緑地科
　　対象生徒　生活科学科１年３５名、造園緑地科２年６名
（３）開催場所　本校会議室、調理室

４　研修の様子

写１）県内農産物の加工例を紹介してもらう　　写２）金農高の農産物を加工

５　参加生徒の感想

１Ｈ　小西めぐみ　：高濱さんの行動力と実践力に大きな刺激を受けた。規格外のものや県産の農産物を積極的に活用し、失敗しても工夫を凝らして再び挑戦する姿勢が、地域の方々に愛される商品づくりにつながっているのかなと思った。さらに秋田県の産業を盛り上げ、農業の課題を解決することにつながっており、社会に貢献する活動を私たちもしていきたいと思った。

領域名【　ソーシャルスキルアップ　領域　】

事業・研修名　梨のコンポート製作・商品化

担当者　生活科学科　教諭　川村桃子

１　実施目的

地域の特産物「男鹿梨」で商品化されない梨(傷付いたもの・形の悪いもの)を活用し、コンポートを製作・商品化を目指す。生徒の活躍の具現化(令和元年度の乳製品コンクール東北大会最優秀賞受賞レシピの活用)、食糧資源の活用(廃棄予定の梨)、金農の人材活用(金農生のレシピ、金農卒のアドバイザー、金農卒の梨農家)を図る。

２　主催・講師等　講師：本校食品流通科　臨時実習助手　遠藤　敦氏

３　実施内容

（１）実施期間　試作 令和４年９月１日（木）・令和４年９月１５日（木）
製作 令和４年９月２６日（木）３００個製作
販売 令和４年１０月２０日（木）、２３日（日）

（２）対象学科　生活科学科３年生活文化コース１６名

（３）開催場所　本校調理室　食品製造実習室

４　研修の様子

写真1)商品化した「男鹿梨のコンポート」

写真2)一つひとつ商品チェック

５　参加生徒の感想

３Ｈ宮田亜希菜：男鹿なしのコンポートの商品化を目指し、より良い商品にしようと試行錯誤することができました。実際に販売して一般の方からの意見があると参考になるため、改善しやすいことが分かりました。

３Ｈ萩原　日彩：１年生の時は本当に形になるのかととても不安でしたが、たくさんの方に助けていただき３年間で２回も商品を作ることが出来て忘れられない経験になりました。商品を作る楽しさを知ることができました。

３Ｈ佐藤　杏美：３年間取り組み、商品開発の大変さや秋田の美味しい食材を知ることが出来ました。このような経験を高校生で出来たのはとても貴重なことだと思います。この経験を進学後も生かして頑張ります。

３Ｈ川井　薫乃：自分たちで意見を出し合い、試作を何度も行い大変なこともあったけれど、それ以上に達成感を得ることが出来ました。多くの人に協力してもらったことに感謝すると共に、秋田の食資源の活用や食品ロスに少しでも貢献できたことを嬉しく思います。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

「先進農家視察研修」リンドウ生産農家

担当者　生物資源科　教諭　平沢隆志

1　実施目的

秋田県の草花の栽培主力品種であるリンドウについて、圃場見学と生産者の話を伺うことによってリンドウ栽培の現状等を理解する。本研修は生徒の課題研究と進路の参考になる機会となる研修である。

2　実施内容

（1）日　時　　令和４年９月８日（木）
（2）場　所　　視察受け入れ農家および圃場
　　氏　名　　梶原　浩栄（S62 本校農業科卒）
　　住　所　　由利本荘市鳥海町上直根字大宮内２４
（3）参加者　　３年生物資源科　草花専攻生３名（小野美羽、豊島柑南、吉原白桜）
（4）協　力　　秋田県由利地域振興局農林部農業振興普及課　産地普及班

3　研修の様子

写１）リンドウ農家の梶原さんの説明

写２）リンドウ圃場の見学

4　参加生徒の感想

３Ｂ豊島　柑南：私の地元の由利本荘市では現在、「秋田鳥海りんどう」の栽培に力を入れています。私は、大学に進学しリンドウの研究をしたいと考えています。リンドウ農家は、リンドウの品質向上と理想のリンドウづくりのための知識と技術を求めています。大学で学んだことを実際の生産現場で活かし、「秋田鳥海りんどう」の更なるブランド化の促進に繋げていくことが私の考えるビジョンです。そして、由利本荘市をリンドウの町として盛り上げ、地元秋田の農業を活気づけたいと考えています。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

Ｅ＆Ｇアカデミー視察研修

担当者　造園緑地科　教諭　和泉有紗・生活科学科　教諭　小玉美香子

１　実施目的

エクステリアに関する専門学校への視察を通して、造園のプロを育成するカリキュラムおよびキャリア形成を学ぶ。また、明治神宮や日比谷公園、重要文化財の庭園を見学し、造園の歴史や植生・植栽、都市計画等今後のあるべき姿を学ぶ一環とする。

２　主催・講師等

Ｅ＆Ｇアカデミー東京校　鈴木　恵美子　氏、廣井　茂美　氏、山添　崇宏　氏
Ｅ＆Ｇアカデミー東京校　講師　グランスケープ有限会社取締役　舘林　康行　氏

３　実施内容

（1）実施期間　１０月２日（日）１３：００～１７：００　明治神宮　視察
１０月３日（月）１０：００～１２：３０　Ｅ＆Ｇアカデミー　視察
１３：００～１８：００　講義・進路・学校説明
１０月４日（火）１０：００～１３：００　東京都庭園美術館　視察
１４：００～１６：００　日比谷公園　視察
（2）対　　象　造園緑地科　教諭　和泉有紗、生活科学科　教諭　小玉美香子
（3）開催場所　明治神宮（東京都渋谷区）、Ｅ＆Ｇアカデミー（東京都中央区）、
東京都庭園美術館（東京都港区）日比谷公園（東京都千代田区）

４　研修の様子

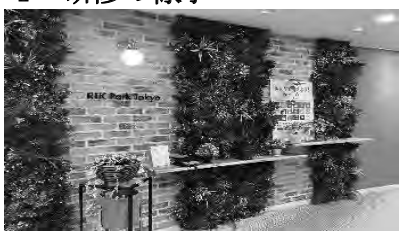


写真１・２）洗練されたデザインのアカデミーエントランス

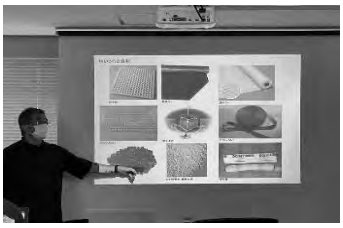


写真３）舘林氏による講義

５　感想

Ｅ＆Ｇアカデミーでは、屋上庭園の設計・施工に関する講義と就職試験対策を学生とともに受講した。就職・勤務状況について伺い、場所を問わず何処でも働ける時代となり、女性が長く務められる職種であることが分かった。専門校独自の即戦力を育むカリキュラムと在学中だけでなく、就職後にまでおよぶ手厚い指導があることは学生にとって大きなメリットとなることを実感した。グランスケープの舘林氏が講演でおっしゃった「どんなに都市化しても、人は緑を求める」という言葉が特に印象に残っている。人間生活や心身の健康、環境問題との関わりについて考え、人と植物とが共生していく重要性、そして教え導く立場である農業教員としての使命を改めて感じることができた。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

全国和牛能力共進会和牛審査競技会参加および視察研修

担当者　生物資源科　教諭　近江広和

１　実施目的

第１２回全国和牛能力共進会の付帯行事である和牛審査競技会の「高校生の部」参加すること、また、日本固有の肉用種である和牛に対する理解を深め、全国の優良な和牛を視察することを目的とする。

２　実施内容

・実施期間　　：令和４年１０月６日（木）～令和４年１０月８日
・対象学科及び生徒：生物資源科３年　瀬下　葉奈・鷲尾　謹
・開催場所　　：鹿児島県霧島市

３　研修の様子

写真１）審査をしている様子

写真２）肉用牛の説明を受けている様子

４　参加生徒の感想

３Ｂ瀬下　葉奈　：牛の各部位の見る点を抑えながら、最終的には４頭の中から１頭を選ぶのはとても難しかったです。結果は入賞できませんでしたが、牛を見て個性を見つけるのは楽しいと思いました。空港や道路沿いに看板やのぼりがあり鹿児島での注目度は高いことがわかりました。

３Ｂ鷲尾　謹　　：５年に１度の貴重な大会を見学できてありがたさを感じました。全国の優秀な和牛がそろうのでとても楽しみにしていました。見学して感じたことは、牛を大事に育てているということです。毛並みもきれいで、手入れが行き届いていることがとても感動しました。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

「現場見学（横堀道路・相野々ダム）」

担当者　環境土木科　教諭　中嶋将信

１　実施目的

⑴道路工事とダム工事の現場見学から実際の施工方法を学ぶ。
⑵自然に配慮しながらの施工である事を学ぶ。
⑶現場で利用されている施工機械を見ることで、理解を深める。

２　主催・講師等

横堀道路　　住所：秋田県湯沢市下院内字横堀
相野々ダム　住所：秋田県横手市山内平野沢字上岩野目沢

３　実施内容

（１）実施期間　令和４年１０月３１日（月）終日
（２）対象生徒　環境土木科３年３４名
（３）開催場所　横堀道路、相野々ダム

４　見学の様子

写１）横堀トンネルの現場説明の様子

写２）相野々ダムの施工説明の様子

５　参加生徒の感想

３Ｅ　板橋　拓也：トンネル掘削状況の説明がわかりやすくて、印象に残りました。秋田県と山形県のアクサスがさらによくなることを期待しています。
３Ｅ　三船　咲雪：相野々ダムは大規模な改修工事であることがわかった。農業や生活に欠かすことのできない水の供給について、今まで以上に深く学ぶことができました。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

農業農村工学会東北支部大会での研究発表

担当者　研究開発主任　教諭　照内之尋

1　実施目的

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」の研究指定校の生徒による実践内容や事業を通じて学んだ成果等について発表をすることで、学校の取組の特色や魅力の発信を行うとともに、学術的な研究の場で発表することで、研究者との議論・意見交換を行う。

2　主催・講師等　農業農村工学会東北支部

・宮城大学事業構想学群地域創生学類社会・文化学系　教授　千葉克己
・秋田県立大学生物資源科学部アグリビジネス学科　　教授　増本隆夫

3　実施内容

（1）実施期間　令和４年１１月１日（火）
（2）対象学科　環境土木科３年　蛯名礼武・嶋崎優星
（3）開催場所　ハーネル仙台

4　研修の様子

写１）生徒による研究発表の様子

写２）約 200 名の研究者で埋まる会場

5　参加生徒の感想

３Ｅ蛯名　礼武：多くの大学の先生方の前で発表するのは緊張したが、本校の取組を理解していただく良い機会となり勉強になった。

３Ｅ嶋崎　優星：学科の学びを深める貴重な経験となった。発表後の質疑応答を通じてより深く専門(農業土木)を理解することができた。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

スマイル“フード”プロジェクト決勝審査会・仙台市場視察

担当者　生活科学科　教諭　佐藤睦子

1　実施目的

秋田県産食材を活用した創作郷土料理の魅力を県内外へ発信するとともに、他県の食文化について理解を深め、地域の食文化について広い見識と感性の醸成を養う。

2　主催・講師等

東洋水産株式会社ＣＳＲ広報部

3　実施内容

（1）実施期間　令和４年１１月２５日（金）～２６日（土）
（2）対象学科　１年生活科学科、食品流通科
　　対象生徒　鎌田あいな（生活科学科）、仲野谷舞、鎌田紗季　以上３名
（3）開催場所　ホテルＪＡＬシティ仙台、仙台市場、阿部蒲鉾店、他

4　研修の様子

写１）商品の試作

写２）仙台市場にて

写３）準優勝の盾

5　参加生徒の感想

１Ｈ　鎌田あいな　：食文化を守るために自分たちが対応することの必要性を強く感じた。結果は準優勝で商品化は叶わなかったが、商品を開発しプレゼンする活動をとおし実践力を鍛えられた。

１Ｆ　仲野谷　舞　：商品化にむけて、様々な課題をチームで協力して一生懸命に乗り越えてきました。伝統食について深く学べました。

１Ｆ　鎌田　紗季　：これまで秋田のよさに気づけなかったけれど、この研修をとおして、あらためて食材の豊かさや地域の人の温かさにふれ、ふるさと秋田への意識が高まりました。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

「現場見学（二ツ井今泉道路・干拓博物館）」

担当者　環境土木科　教諭　中嶋将信

1　実施目的

（1）道路工事と博物館の見学し橋梁工事・土工事・干拓工事の施工を学ぶ。
（2）環境に配慮した道路工事の施工方法・工程管理・安全管理について学ぶ。
（3）八郎潟干拓と大潟村の歴史について、資料を見ることで理解を深める。

2　主催・講師等

二ツ井今泉道路　　住所：秋田県能代市二ツ井町
大潟村干拓博物館　住所：秋田県南秋田郡大潟村

3　実施内容

（1）実施期間　令和４年１２月９日（金）終日
（2）対象生徒　環境土木科３年３４名
（3）開催場所　能代市、大潟村

4　見学の様子

写1）二ツ井より能代方面を望む

写2）施工機械と ICT について学ぶ

5　参加生徒の感想

３Ｅ伊藤　且樹：干拓博物館では、江戸時代から干拓の計画があったことを知り驚きました。男鹿･大潟ジオパークとして登録されているので、卒業後自分の運転で見て回りたい。
３Ｅ浅利　太陽：卒業後、国土交通省に勤務します。高速道路の工事の概要を知ることができて、大変有意義な見学となりました。

領域名【　ソーシャルスキルアップ領域　】

大学教員による集中講義

担当者　研究開発主任　教諭　照内之尋

1　実施目的

専門領域である農業土木の面白さを高校生に伝え、進学において学部・学科を選ぶ際の参考にしてもらうと同時に、農業土木・農村計画分野を学ぶことを通じて、専門的な知識だけではなく社会に出て必要とされる汎用的能力も身に付けることができるようになることを目的とし実施する。

2　主催・講師等

国立大学法人宇都宮大学農学部農業環境工学科　准教授　田村孝浩
講義テーマ「日本の農業・農村を守るためには」

3　実施内容

（1）実施期間　令和５年１月２０日（金）１３：３０～１５：００
（2）対象学科　環境土木科２年３０名・環境土木科３年１５名
（3）開催場所　金足農業高校

4　研修の様子

写１）熱心に授業をされる田村准教授

写２）分かりやすいプレゼン説明

5　参加生徒の感想

２Ｅ目黒　　嶺　：農作業中の事故に関係する研究が殆ど無く、先進的な研究内容で興味深かった。また、自分の進路にも参考になった。

２Ｅ加賀谷いずみ：私たちが農業土木を学んでいる事を通じて、農作業で起こる事故を減らすことができることを知り、学習への意欲が沸いた。

領域名【　地域一体型農業コミュニティ領域　】

八峰町生薬栽培研修

担当者　生活科学科　教諭　佐藤睦子

1　実施目的

・秋田県内で初めて生薬（ハーブ）栽培に着手した八峰町の取り組みと生薬の栽培の課題や活用方法について見聞を広める。
・八峰町産の生薬を生かした商品にふれ、生薬の新たな商品開発のヒントを得る。

2　主催・講師等

八峰町農林振興課課長補佐　　門脇　朝哉　氏

3　実施内容

（1）実施期間　令和４年６月３日（金）８：００～１５：３０
（2）対象学科　生活科学科１年
　　対象生徒　ハーブ班１０名
（3）開催場所　八峰町役場及び圃場

4　研修の様子

写１）生薬栽培の講義

写２）新たな生薬の圃場を見学

5　参加生徒の感想

１H加藤さくら：カミツレとキキョウについて、専門的な知識を学ぶことができました。活用するために仲間と意見交換を密にして取り組んでいきたいと思います。また加工の製造過程が複雑すぎない等、様々な視点で活用と商品化を考えていきたいと思います。

１H松田未空：「無駄をなくす」という考え方に活用のヒントを得た。生薬の加工の際に廃棄されるキキョウのひげ根や皮を活用して廃棄率を下げられたら、生産農家の利益はもっと上げられると思った。

領域名【　地域一体型農業コミュニティ形成領域　】

地域住民宅（独居老人）剪定事業

担当者　造園緑地科　教諭　宮腰　明
生活科学科　教諭　猿田美樹

１　実施目的

追分地域の一員として造園緑地科・生活科学科、ともに郷土を愛する心とボランティア精神を身につけ、郷土理解を深めるとともに、集団生活のルールを学び、学科間の友情を深める。

２　主催・講師等

むつみ造園土木株式会社　専門技術者　泉田 幸仁　氏

３　実施内容

（１）実施期間　令和４年７月１３日（水）
１～４校時　９：００～１２：３０　造園緑地科３年
生活科学科３年

（２）対象学科　造園緑地科　３年（１２名）
生活科学科　３年（　９名）　以上２１名

（３）開催場所　追分地域　独居老人宅（剪定事業）
金足農業高校　研修館（障子張り替え）

４　事業の様子

写１）剪定の様子

写２）障子張り替え作業

５　参加生徒の感想

３Ｌ齊藤　蒼：普段応援していただいている地域の方に、３年間学んだ技術で恩返しできる機会であり、地域校としての誇りを持つことができ、更に地域に関する関心を持つことができました。

３Ｈ登藤　舞桜：高齢者と関わる機会が少なくなってきているので、このような活動を次世代に繋げることが大切だと思います。高齢者と過ごす時間を増やし、大切にしたいと思いました。

領域名【　地域一体型農業コミュニティ形成領域　】

富士大学公開授業「地域創生論」
シンポジウム『地域創生の実現に向けてⅦ』　への参加

担当者　研究開発主任　教諭　照内之尋

１　実施目的

持続可能な地域社会ならびに地域産業を支える高度な職業人や、地域に定住する人材を育成することを目的とする。地域の実態を理解し地域課題は何か、地域政策はどのようなものかを理解し、他者に説明できることを目標とする。以上から、地域創生の在り方を学び、必要性を理解するものである。

２　主催・講師等（シンポジウム司会：富士大学　学長　岡田秀二　氏）

パネリスト：岩手県政策企画部部長　　小野　博　氏
株式会社岩手日報社編集局報道部次長　川端章子　氏

３　実施内容

（１）実施期間　令和４年７月２１日（木）
（２）対象学科　生物資源科３年 伊藤弥麻斗, 加藤楓基, 白川楓花, 鷲尾 謹
（３）開催場所　富士大学

４　研修の様子

写１）遠藤教授によるエコシステムの説明　　写２）シンポジウムで説明する岡田学長

５　参加生徒の感想

３Ｂ伊藤弥麻斗：地方創生には地域の産業を担う人材が必要であり、まだまだ地域改革（イノベーション）が求められることを知った。
３Ｂ白川　楓花：同じ東北の隣県であっても秋田と岩手では地域政策が異なることを知った。私も秋田で積極的に社会参画していきたい。

領域名【　地域一体型農業コミュニティ形成領域　】

特別基調講演「今後の地域づくりの根底に据えるべきこと」

担当者　研究開発主任　教諭　照内之尋

1　実施目的

グローバリズムがさらに進展する中で、今後の地域づくりの在り方、地域政策はどうあるべきかについて考察し、理解を深めることを目的とする。また、本講演は指定最終年度である今年度の研究成果発表会における基調講演とすることで、本事業の総括的意味合いを含むものである。

2　主催・講師等

富士大学　学長　岡田秀二　氏（本事業における運営指導委員長）

3　実施内容

（1）実施期間　令和４年１２月６日（火）１０：２０～１２：００
（2）対象学科　全学科　全校生徒　計４９３名
（3）開催場所　秋田県立金足農業高等学校　第一体育館

4　研修の様子

写１）壇上での講演の様子

写２）熱心に講演をされる岡田学長

5　参加生徒の感想

３Ｌ嶋﨑　朱莉：地域課題を認識し改善することは国や世界の課題解決にも繋がることを知った。経済追求よりも環境重視が望まれる。

３Ｌ橋本　泉愛：グルーバル下において物質的な豊かさよりも、一人ひとりが人間的な「生」を実現、尊重されるべき時代だと実感した。

表３－１　令和４年度各領域およびに各学科別実施事業数一覧

領域	各学科	実施数	合計
A領域 ＧＡＰやＨＡＣＣＡＰ グローバル化やＳＤＧｓ等 に関わる内容 〇主たる関連学科 【生物資源科・食品流通科】	B（生物資源科）	1	3
	E（環境土木科）	0	
	F（食品流通科）	0	
	L（造園緑地科）	2	
	H（生活科学科）	0	
B領域 スマート農業やICT関連等 に関わる内容 〇主たる関連学科 【生物資源科・環境土木科】	B（生物資源科）	1	8
	E（環境土木科）	6	
	F（食品流通科）	1	
	L（造園緑地科）	0	
	H（生活科学科）	0	
C領域 インターンや現場見学、商品化 六次産業化等に関わる内容 〇主たる関連学科 【生物資源科・環境土木科 食品流通科・造園緑地科 生活科学科】	B（生物資源科）	7	28
	E（環境土木科）	7	
	F（食品流通科）	0	
	L（造園緑地科）	9	
	H（生活科学科）	4	
	全学科共通	1	
D領域 地域づくりや資源活用・ 伝統栽培、コミュニティ創出 に関わる内容 〇主たる関連学科 【生物資源科・食品流通科 造園緑地科・生活科学科】	B（生物資源科）	0	5
	E（環境土木科）	0	
	F（食品流通科）	0	
	L（造園緑地科）	1	
	H（生活科学科）	2	
	全学科共通	2	
学校設定：地域創生論(D領域扱) **〇選択Ａ群　全学科共通科目**	B-E-F-L-H	9	9
学校設定：社会起業家実践 **〇選択B群　全学科共通科目**	B-E-F-L-H	4	4

表3－2　令和4年度地域との協働における高等学校教育改革推進事業　実施事業・研修等一覧

領域区分　A:グローバルスタディ　B:第四次産業・農業革命　C:ソーシャルスキルアップ　D:地域一体型農業コミュニティ形成

No.	実施時期	受入先ならびに外部連携事業所等	モデル領域	対象学科（教科・科目）	対象生徒
1	5月25日	「地域創生論」第1講 秋田大学教育文化学部地域文化学科　准教授　益満　環	D	全学科	・選択A群聴講生31名 ・2L27名,1-3F科60名
2	6月1日 6月2日	「建設技術公開EE東北22視察研修」 夢メッセみやぎ 新技術展示会・基調講演・インフラDX体験	B	環境土木科 （農業）	冨田和樹 （教員研修）
3	6月3日	「八峰町生薬栽培研修」 八峰町農林振興課　課長　門脇朝哉 八峰町役場（圃場）・鹿の浦食堂サザエさん・道のみねはま	D	生活科学科 （家庭）	1H10名
4	6月7日	「あきた家畜市場視察見学」 あきた家畜市場株式会社　代表取締役　加藤　義康	C	生物資源科 （農業）	2B畜産専攻生 8名
5	6月8日	「地域創生論」第2講 秋田県林業研究研修センター　専門員　菅原　冬樹	D	全学科	・選択A群聴講生31名 ・2B25名、2L33名、3F34名
6	6月10日	「ビジネスプランセミナー（基礎編・中級編）」 日本政策金融公庫国民生活事業本部東北創業支援センター 上席所長代理　本田　正人　　他4名	C	全学科	選択B群専攻生31名
7	6月10日	「樹木医研修」 日本樹木医会秋田県支部　三浦貫才 （①6/10　②7/15　③9/30　④11/4　⑤11/25　計5回）	C	造園緑地科 （農業）	3L課研14名×5回 70名
8	6月17日	「森林・林業講習会（木材流通・利用促進について）」 秋田県農林水産部林業木材産業課調整・木材流通班主幹 児玉 理	C	造園緑地科 （農業）	3L35名
9	6月22日	「地域創生論」第3講 秋田県観光文化スポーツ部観光振興課　調整・観光地育成班 主事　　柴田　　雄登	D	全学科	選択B群専攻生31名
10	6月28日	「地域創生論」第4講 秋田県立大学生物資源科学部アグリビジネス学科准教授　酒井徹	D	全学科	・選択B群専攻生31名 ・2F12名(食品製造) ・進学希望者3年7名
11	6月30日	SDGS出前講座 NPO法人環境会議所東北　主任研究員　海藤節生	A	造園緑地科 （農業）	1L・2L・3L 96名
12	7月7日	「造園業現場視察研修」 有限会社玉尾造園　代表取締役　玉尾重秋	C	造園緑地科 （農業）	2L6名・3L3名 引率2名
13	7月7日	「農場HACCPの認証について」（農林政策課・高校教育課） 岩手県立農業大学校　畜産学科　教授　武田　哲	A	生物資源科 （農業）	1B～3B 101名
14	7月13日 7月14日	「地域住民宅（独居老人）剪定事業」 むつみ造園土木株式会社　泉田幸仁	D	造園緑地科 生活科学科	3L12名 3H9名
15	7月15日	「農業の省力化・スマート農業に関する講義・AIC施設見学」 秋田県立大学生物資源科学部アグリビジネス学科教授 吉田 康徳	B	食品流通科 （農業）	3F野菜専攻16名 3B進学希望者5名
16	7月21日	「富士大学公開授業地域創生論シンポジウム 地域創生の実現に向けてⅦ」参加・意見交換 富士大学　学長　岡田秀二（他）	D	全学科	3B4名・3L1名
17	7月21日	「外部施設見学」 玉川ダム・東北地方整備局玉川ダム管理所中和処理施設	C	環境土木科 （農業）	環境土木科1E28名
18	7月25日 7月29日	「生物資源科長期インターンシップ（5日間）」 株式会社寿牧場　代表　高橋　寿	C	生物資源科 （農業）	2B伊藤矢姫・藤田あさひ 3B鷲尾　謹
19	7月25日 7月29日	「生物資源科長期インターンシップ（5日間）」 農事組合法人大進牧場　代表理事　進藤　俊人	C	生物資源科 （農業）	3B　目黒優芽
20	7月27日 7月31日	「生物資源科長期インターンシップ（5日間）」 農事組合法人鳥海高原花立牧場　代表理事　佐藤俊弥	C	生物資源科 （農業）	2B　加藤百華
21	7月29日 7月30日 7月31日	「先進校視察研修」（地域留学制度導入新設校） 宮城県志津川高校見学・南三陸高校オープンキャンパス視察	C	環境土木科 （農業）	教頭　藤原　淳 （教員研修）
22	8月31日	「地域創生論」第5講 加藤建設株式会社　代表取締役社長　村上 仁志	D	全学科	・選択B群専攻生31名 ・1E28名、2E30、2L27名 ・選択B英語表現21名
23	9月1日	「県産農産品のドライ加工研修」 木能実（能代市）代表　高濱 遼平 ・ 高濱 奈保子	C	生活科学科 （家庭）	・1H35名 ・2L　6名
24	9月2日	「ビジネスプランセミナー（実践編）」 日本政策金融公庫国民生活事業本部東北創業支援センター 上席所長代理　本田　正人	C	全学科	選択B群専攻生31名
25	9月8日	「先進農家視察研修」リンドウ生産農家　梶原 浩栄 協力：由利地域振興局農林部農業振興普及課産地普及班	C	生物資源科 （農業）	草花専攻生3名
26	9月12日	出前授業「次代を創るスマート農業と秋田県農業の可能性」 秋田県立大学生物資源科学部生物環境科学科　教授　長濱健一郎 ※農業教育高度化事業（農林水産部）とのタイアップ	B	生物資源科 （農業）	3B33名 1～2年進学希望者5名
27	9月12日	「測量先端技術出前講座」(ドローン・自動追尾・ネットワーク型RTK) 一般社団法人秋田県県土整備コンサルタンツ協会 （石川技研・ウヌマ地域総研・創和技術・測地コンサル・眞宮技術）	B	環境土木科 （農業）	2E30名・2L32名

28	9月22日	「ビジネスプランセミナー(実践編)」 日本政策金融公庫国民生活事業本部東北創業支援センター 上席所長代理　本田　正人	C	全学科	選択B群専攻生31名
29	9月28日	「地域創生論」第6講 国際教養大学　グローバル・スタディズ領域准教授　名取 洋司	D	全学科	・選択B群専攻生31名 ・3年生国公立大希望者9名 ・県立大学生3名
30	9月26日	「梨のコンポート制作・商品化」 本校調理室　　本校食品流通科　臨時実習助手　遠藤　敦	C	生活科学科 (家庭)	3H文化コース16名
31	9月30日 10月1日	「E＆Gアカデミー視察研修」 E＆Gアカデミー校長　古橋 宣昌	C	造園緑地科 (農業)	和泉有紗・小玉美香子 (教員研修)
32	10月6日	「現場見学」 成瀬ダム・相野々ダム	B	環境土木科 (農業)	1E28名 引率2名(冨田・小田島)
33	10月6日 10月7日 10月8日	「全国和牛能力共進会和牛審査競技会」参加ならびに視察研修 鹿児島県立霧島自然ふれあいセンター	C	生物資源科 (農業)	3B瀬下葉奈 3B鷲尾　謹 近江広和(教員研修)
34	10月11日 10月12日 10月13日	「農業Week」視察研修会場:幕張メッセ　主催:RX Japan株式会社 農業資材・スマート農業・6次産業化・畜産資材／EXPO (株)クボタ特別技術顧問　飯田　聡　・　北海道大学大学院　野口　伸	B	環境土木科 (農業)	教頭　藤原　淳 (教員研修)
35	10月12日	「地域創生論」第7講 桃山学院大学　ビジネスデザイン学部長　菊地昌弥	D	全学科	・選択B群専攻生31名 ・3年選B 起業家実践専攻生30名
36	10月15日	「第32回全国産業教育フェア青森大会」 地域との協働による高等学校教育改革推進事業(プロフェッショナル型) 発表会ならびに・ブース展示運営	C	全学科	生物資源科3年 安藤思学・鷲尾謹
37	10月28日	「社会起業家実践～地域における元気ムラ活動の実践について～」 秋田県あきた未来創造部地域づくり推進課主任　柿崎亨介・主事　畠山友那	D	全学科	選択B群専攻生31名
38	10月28日	「環境土木科現場見学」 相野々ダム・玉川ダム	B	環境土木科 (農業)	2E30名 引率2名(大島・中田)
39	10月31日	「環境土木科現場見学」 横堀道路・相野々ダム	C	環境土木科 (農業)	3E34名 引率2名(中嶋・鈴木)
40	11月1日	「農業農村工学会東北支部大会」への参加ならびに研究発表 ハーネル仙台(支部総会・研究発表会等) 宮城大学事業構想学群　千葉克己・秋田県立大学　Ag学科長　増本隆夫	C	環境土木科 (農業)	3E嶋崎優星 3E蛯名礼武 引率:照内・鈴木涼
41	11月2日	「地域創生論」第8講 農業法人安田農園　代表　安田淳一	D	全学科	・選択B群専攻生31名 ・1B34名、2B24名、3B33名 ・2L27名
42	11月17日	「高性能林業機械操作体験」 秋田県林業研究研修センター	C	造園緑地科 (農業)	1L29名
43	11月18日	「令和4年度秋田県農林水産フォーラム」高校生によるプロジェクト発表 秋田県農林水産部(ANAクラウンプラザホテル)	C	生活科学科 (家庭)	3H5名
44	11月23日	「SDGSワークショップ」 金足農業高校でのクリスマスアレンジメントワークショップ	A	造園緑地科 (農業)	・3L14名 ・地域の保護者、児童32名
45	11月25日	「スマイルフードプロジェクト決勝審査会」 東洋水産株式会社 CSR広報部	C	生活科学科 (家庭)	3H3名・引率教員1名
46	12月6日	「今後の地域づくりの根底に据えるべきこと」 富士大学学長　岡田 秀二　(成果研究発表会との同時開催)	D	全学科	全校生徒対象 493名
47	12月9日	「環境土木科現場見学」 ①国道7号線能代地区改良工事現場　②大潟村干拓記念館	C	環境土木科 (農業)	3E34名
48	12月12日	「環境土木科現場見学」 ①八郎潟地区土木工事現場　②VOLTERAKITA(株)③森吉山ダム	C	環境土木科 (農業)	1E28 名
49	12月14日	「地域創生論」第9講 次世代・女性活躍支援課　調整・結婚・若者支援班副主幹　青山真紀子	D	造園緑地科 (農業)	選択B群専攻生31名
50	12月15日	「木の学校出前授業」 山本地域振興局・木産連・木材高度加工研究所・池田建築店・大栄木工	C	造園緑地科 (農業)	1L29名
51	12月16日	「農業の六次産業化への取組について」講義・講演 秋田県農林水産部農林政策課主催 講師:株式会社ナチュラルスタンスクラブ代表取締役　佐々木彰	C	生物資源科 (農業)	1～3年生物資源科 101名
52	1月17日	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミット 研究成果発表会:文部科学省	C	教員	教員研修(報告) 照内之尋
53	1月20日	「環境土木科集中講義」 国立大学法人宇都宮大学農学部農業環境工学科准教授　田村 孝浩	C	環境土木科 (農業)	2E30名・3E15名
54	2月1日	「造園・エクステリア3次元CAD　RIKCAD作図設計」 11:00－15:00　本校3階製図室 株式会社ユニマットリック仙台営業所　佐々木 寛子(他2名)	C	造園緑地科 (農業)	1L29名
55	2月8日	特別講演「環境と地震～リモートセンシングを利用したピンポイント予測～」 東京大学名誉教授、(株)地震科学探査機構取締役会長　村井俊治 神奈川産業振興センター 多目的ホール	B	環境土木科 (農業)	冨田和樹 (教員研修)
56	2月14日 2月15日 2月16日	「造園緑地科長期インターンシップ(3日間)」 株式会社山田造園　代表取締役　山田隆之	C	造園緑地科 (農業)	2L三浦波音・髙　愛華

第４章　課題研究の取組

１　科目「課題研究」について

本校における科目「課題研究」のカリキュラムとしての位置付けについては、生物資源科、環境土木科、食品流通科、造園緑地科、生活科学科の全学科ともに、２年次２単位、３年次２単位の計４単位となっている。「総合的な探究の時間」の代替としてカリキュラムに組み込まれている。本事業にて実施した各事業・研修をベースとし、各学科の学びを生かした研究として今年度も課題研究が実施されている。年度末には、各学科において課題研究発表会を実施し、今年度の研究のまとめとして発表会を実施している。生徒自らが研究を通じてその手法や学びをインプットし、まとめや発表を通じてアウトプットし、他者に説明することで理解力の向上に努めている。この課題研究はプロジェクト学習の手法が取り入れられており、科学的な見方・思考力を働かせ、農業の各分野をはじめとする各学科の専門に関する学習への興味・関心をより一層高めるよう、指導者は工夫しながら教科指導を展開している。学習指導要領によれば、課題研究の目標として「農業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通じて、社会を支え産業の発展を担う職業人として必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す」としている。

（１）体系的・系統的に理解し、相互に関連付けられた技術を身に付けるようにすること。
（２）課題を発見し解決策を探究し、科学的な根拠に基づいて創造的に解決する力を養う。
（３）自ら学び、農業の振興や社会貢献に主体的かつ協働的に取り組む態度を養う。

以上から、課題研究の目標と内容は、本事業として目指す目標と合致しており、如何に探究活動である課題研究を充実させることが、本事業の中心的課題であるかが理解できる。

２　令和４年度課題研究における研究課題名一覧

学科	研究課題名	対象生徒	指導者
生物資源科	生育するための環境と天候に関する研究	３年作物専攻	髙橋寿徳
生物資源科	プレクトランサスモナラベンダーの栽培に関する研究	３年草花専攻	平沢隆志
生物資源科	効率的な豚の増量方法及び餌のコスト削減に関する研究	３年畜産専攻	近江広和
生物資源科	校舎改築後における適正な果樹園の更新に関する研究	３年果樹専攻	森合慎一郎
生物資源科	廃棄野菜の利用加工に関する研究	３年野菜専攻	高橋日向
環境土木科	八郎潟干拓の歴史的経緯と水産資源の研究	２年施工専攻	中嶋将信
環境土木科	雨水を効率的に浸透させる研究	２年設計専攻	冨田和樹
環境土木科	八郎湖のアオコに関する研究～アオコバスターズ～	２年水利専攻	鈴木涼汰
環境土木科	耐火レンガの再利用に関する研究	２年設計専攻	中田耀介
食品流通科	ブラックバスを活用したしょっつる製造に関する研究	３年流通ｺｰｽ	大石一博
食品流通科	米ぬかベーグルに関する研究	３年食化ｺｰｽ	田口健一
食品流通科	摘果リンゴを活用した焼き肉のタレ製造の研究	３年食化ｺｰｽ	山崎隆之
食品流通科	酒粕の二次利用に関する研究	３年流通ｺｰｽ	佐藤旭浩
造園緑地科	地域住民独居老人宅剪定事業と障子張り替えに関する取組	３年造園緑地	宮腰　明
造園緑地科	持続可能な地域づくりに関する研究	３年造園緑地	和泉有紗
造園緑地科	緑化材料の効用の研究	３年造園緑地	渡部玉緒
造園緑地科	校地内サクラの樹勢回復に関する研究～春の景観保全～	３年造園緑地	小野聡悦
生活科学科	繋　～ワタで支えるみんなの笑顔～	２年福祉ｺｰｽ	猿田美樹
生活科学科	県産農産物のドライ加工と商品化探究の取り組みに関する研究	１年35名	佐藤睦子

生育するための環境と天候について

生物資源科３年　専攻６名
生物資源科２年　専攻６名
指導担当　髙橋寿徳　小野総志

１　課題（研究の目的と研究計画）

私たち作物班は米づくりにおける「省力化」「低コスト化」を目標に課題研究に取り組むこととしました。省力化では育苗方法を「床土育苗」から「マット育苗」へ。育苗方法をこれまでの「散水式育苗」から「プール育苗」へ切り替え調査研究することとしました。しかし、収量調査をしていくと育苗から移植期、活着期、分げつ期、登熟期と生育するにつれ昨年度と比較して生育状況の変化に気づきました。

２　研究方法

収量を今年度の調査と昨年度の調査と比較し、なぜ今年度の収量が著しく減少したか、その原因について生育環境と気象状況の変化を比較し詳しく調べてみることにしました。

３　研究内容とその分析

（１）平均１株茎数（穂数）

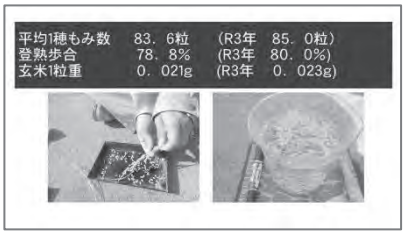
１株の茎数を調査したところ令和３年度の調査では平均で２６．８本に対して令和４年度は２１．４本と１株で５本以上の減となりました。原因として移植後の活着期における低温と降水量、日照時間に大きな差があり最高分げつにおける茎数の減少が考えられます。

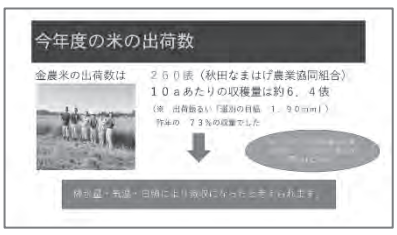
（２）穂ばらみ期・開花期・登熟期の天候

次に、イネの結実に係わる時期の天候不順も大きく影響　したと考えられます。８月中旬の降水量が平年比の３７８％と約４倍、日照時間が平年比の５７％と約半分と極端に少なくなりました。これは、開花、結実、登熟に大きく影響したと考えられます。

４　まとめと考察

１０ａあたり収量をみると令和４年度が６．５俵（３９０ｋｇ）となり昨年度の８．２俵（４９２ｋｇ）の７３％にとどまり、１株茎数、１穂もみ数、登熟歩合、玄米１粒重すべてが昨年度を下回りました。





今年度の活着期の低温、登熟期の降水量・日照不足が大きく影響したと考えられます。ただし、植付時期や圃場の環境によっても収量の差が生じ、今後詳しく調べていく必要があると思います。自然環境の変化に負けない米づくりを目指しこれからも調査研究に励んでいきたいと思います。

プレクトランサスモナラベンダーの栽培

～日長処理による開花調節の基礎実験～

生物資源科３年草花専攻５名
指導担当　教諭　平沢隆志

１　課題（研究の目的と研究計画）

昨年度は、短日植物であるモナラベンダーに長日処理を行い、実際に開花制御ができるかを検証しました。実験からは可能であることがわかりました。また、開花の限界日長が１４時間以下と予想される結果を得ることができました。今年度は、モナラベンダーの限界日長の確定のため再実験を行いました

２　研究方法

実験対象であるモナラベンダーを６月に挿し木を行いました。７月にポット上げ、摘心を行い。８月に4.5 号鉢への鉢上げとわい化処理を行いました。９月に仕上げ鉢である 5 号鉢への鉢上げを行い、同時に長日処理を行うために、電照装置と試験区の設置を行い実験をスタートしました。１０月・１１月と電照時間を調整し、１２月上旬まで実験を行いました。タイマーの時間を実験区ごとに変えて長日処理による開花調節を行います。実験区は、自然日長区、14時間日長区、１５時間日長区、１６時間日長区の４つです。

３　研究内容とその分析

結果は、一番開花率が高かったのは自然日長区で、次に一部開花が確認された１４時間日長区でした。１５時間日長区と１６時間日長区では開花は確認できませんでした。自分たちの目で見ても違いがはっきり分かる結果となりました。

電照栽培実験の様子

自然日長区

14 時間日長区

４　まとめと考察

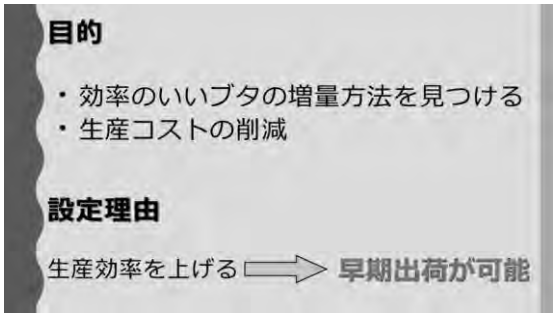
実験結果から、１４時間日長区は、自然日長区と比べても花数が極めて少なく、開花の抑制がされたことから、短日植物であるモナラベンダーの限界日長は１４時間以下と特定されました。秋田県の日長が１４時間以上になる期間を確認すると、５月１０日から８月２０日であり、この期間はモナラベンダーが開花しない期間であることが分かりました。

効率的な豚の増量方法及び餌のコスト削減に関する研究
～「ブタの肉体改造計画」理想の体形を目指した３０日間～

生物資源３年　畜産専攻７名
指導担当　教諭　近江広和

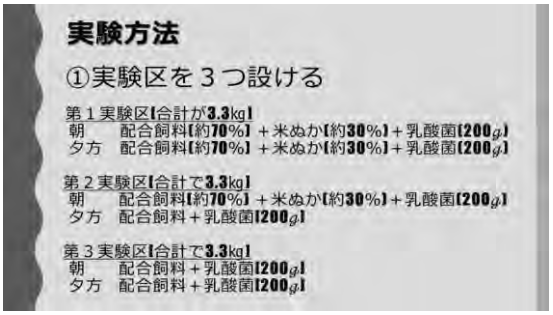
１　課題（研究の目的と研究計画）

この研究の目的は飼育日数を短縮するために効率のいいブタの増量方法を見つけ生産に活かすことです。また、飼料の価格が高騰し生産に占めるエサ代の割合が増えてきている現状にあるためエサ代にかかるコストを削減する方法を模索するという目的もあります。設定理由は生産効率をあげることで早期出荷が可能になると考えたからです。



２　研究方法

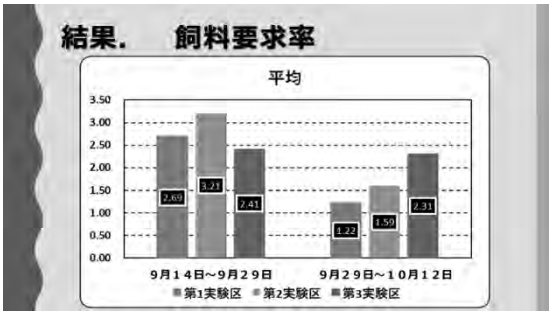
この実験に使用する家畜は、９月時点で生後約４か月のブタを対象とし、期間を９月１２日から１０月１２日までの１か月間を設けました。体重測定は約２週間の間隔で計３回行いました。実験方法は、３つの実験区域に分けて行いました。第一実験区は朝夕の２回、米ぬか（約３０％）と乳酸菌（２００ｇ）を混ぜた配合飼料（グランディールC）を与えました。第二実験区は朝に第一実験区と同じものを与え、夕に配合飼料（グランディールC）のみを与えました。第三実験区は朝夕どちらも配合飼料（グランディールC）のみを与えました。体重測定を３回に分けて行い、増加量と飼料要求率を調べました。

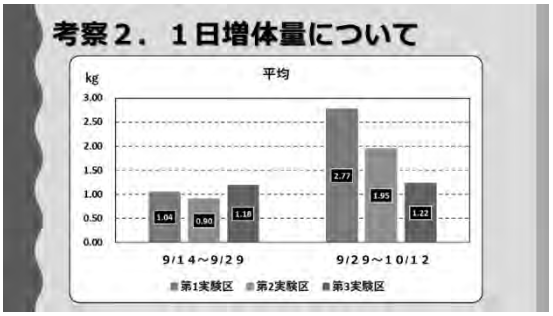


３　研究内容とその分析

各実験区の平均を用いて増体量を調べてみると、第一実験区が２．７７kg、第二実験区が１．９５kg、第三実験区が１．２２kgでした。全ての実験区の平均を比べると第一実験区のブタの増加率が１番高くなりました。

各実験区の平均を用いて飼料要求率を調べてみると、第一実験区が１．２２kg、第二実験区が１．５９kg、第三実験区が２．３１kgでした。全ての実験区の平均を比べると第３実験区のブタの飼料要求率が１番高くなりました。





４　まとめと考察

米ぬかを朝夕２回与える実験区の豚の増加率が１番高かったため、与える回数が多いほうが効率良く増量させられると考えました。

今回の実験で米ぬかを使用して効率よく体重を増やせることがわかりました。今後肉質についても改善し、より理想的な体形を目指して管理していきたいと思います。

校舎改築後の果樹園の設計～4つの果樹園を参考に～

生物資源科３年　果樹専攻７名
指導担当　教諭　森合慎一郎

１　課題（研究の目的と研究計画）

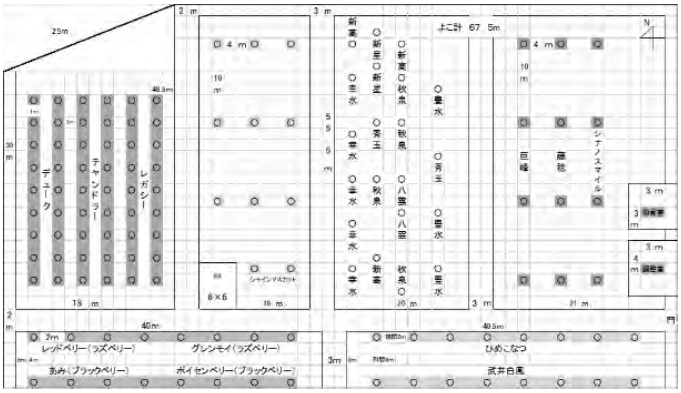
本校では令和 12 年に新校舎が完成予定となっているため校舎改築が進んでいます。現在の本校の果樹園の面積は 114a で、改築時には面積が 50a 程度になる見込みです。その際、果樹園の更新も必要になります。そこで、秋田県内の果樹園ではどのような取り組みを行なっているのかを学び、本校に取り入れたいと考え、果樹園に訪問し調査を行いました。

２　研究方法

大将梨園（男鹿市）、藤原梨園（男鹿市）、宮原果樹園（秋田市）、重郎左衛門農園（大仙市）の４つの果樹園に訪問し、調査項目を作目、仕立て方、果樹園の取り組みの３点に絞り調査を行いました。

３　研究内容とその分析

訪問した４つの果樹園を参考に本校の果樹園の設計図を作成しました。仕立て方では一文字仕立て、品目はブルーベリーなどのベリー類を新たに取り入れました。また、ブドウは高級品種でもあるシャインマスカットを採用しました。



採用したい品種　　ブルーベリー（チャンドラー、デューク、レガシー）

ラズベリー（レッドベリー、グレンモイ）

ブラックベリー（あみ、ポイセンベリー）

モモ（ひめこなつ、武井白鳳）

シャインマスカット、梨（秋泉＊新たに追加）

４　まとめと考察

今後は一文字仕立てのような栽培方法が学校で取り入れることができるのか調査していきます。作業を省力化し、コンパクトでインパクトのある果樹園作りを目指したいです。

廃棄野菜の利用加工
～新たなるキムチ～

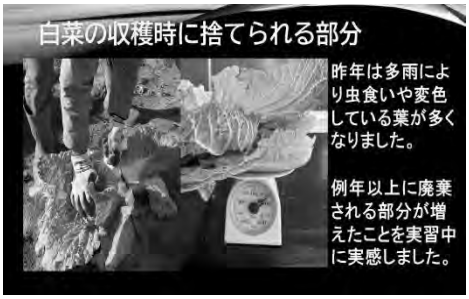
生物資源科３年　野菜専攻８名
指導担当　教諭等　髙橋　日向

１　課題（研究の目的と研究計画）

今回の野菜専攻の課題研究は、1 年生の実習時からハクサイの収穫時に感じていた「もったいない」という気持ちがきっかけではじまった。ハクサイ収穫の際に見た目を良くするため外側のまだ食べられそうな葉を剥ぎ、廃棄する。また、ダイコンも収穫の際に葉の部分を切り落として廃棄した、肥大しすぎたダイコンはまるごと廃棄してしまう。このように市場に出回る前に廃棄処分される野菜は食品ロスにはカウントされず、隠れ食品ロスと呼ばれている。
人口増加、食糧難と騒がれているこの時代に、農業を学んでいる自分たちがまだ食べることのできる食材を廃棄するのはおかしいのではないかと考えた。そこで、野菜の廃棄される部分を利用加工し、SDGs の 2 番飢餓をゼロに、と 12 番のつくる責任つかう責任の実現を図ることを目的に取り組んだ。

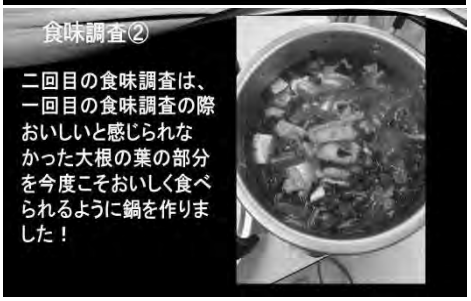
２　研究方法

今回の目的と観点、これらの廃棄野菜の現状から考えた結果、廃棄部分の利用加工から、昨年の研究を踏まえてキムチを作ることにした。
１１月中旬に収穫した野菜の廃棄部と、売り物として販売される可食部を両方キムチにして食味調査を行い比較する。
食味調査をし、可食部と廃棄部の味の違いを感じ、美味しく食べることができない場合、何が問題か、どのような工夫をしたら美味しく食べることができるのかなどを研究して野菜の廃棄部を活用するひとつの手段にする。



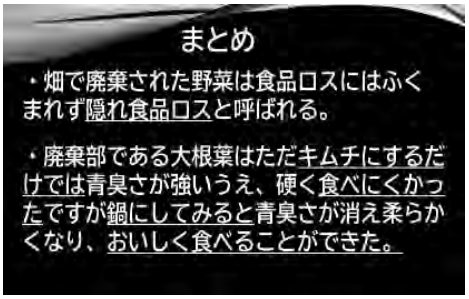
３　研究内容とその分析

ハクサイ１玉あたり１５０ｇ程度の廃棄部分があることが分かった。
ダイコン可食部、ダイコン葉、ハクサイ可食部、ハクサイ廃棄部の４つに分けて調理を進めた。調理から４日後、第一回食味調査を行い、結果は１位から順にハクサイ可食部、ハクサイ廃棄部、ダイコン可食部、ダイコン廃棄部の順になった。ハクサイの可食部と廃棄部は味の大差はなかった。ダイコン廃棄部は、雑草のような青臭さがあり、食感も固く、食べられなかった。この結果をもとに、ダイコン廃棄部を美味しく食べるにはどうしたらよいかと考えた結果、キムチ鍋にして煮込んだところ柔らかくなり、青臭さも消すことができた。



４　まとめと考察

ダイコンの廃棄部にあたる葉は、キムチにするだけでは美味しく食べることはできず、キムチ鍋にして火を通すことによって美味しく食べることができた。実際に廃棄される野菜を使いキムチを作ってみて、普段食べない部分を美味しく食べるには工夫か必要だと分かった。このことから、工夫をすれば普段食べているものと大差がなく美味しく食べられることがよく分かった。また、いつも捨てているものも食べられるのではと考える良いきっかけになった。



八郎潟干拓の歴史的経緯と水産資源の研究

環境土木科２年　干拓研究班　８名
指導担当　教諭　中嶋将信

１　課題（研究の目的と研究計画）

八郎潟の干拓事業が行われ、大潟村が誕生して半世紀以上が経過した。農業土木事業としては世界的にも有名な干拓工事であったが、そこで漁業を営んでいた住民への補償と生活環境の変化、水産資源の供給や水質問題等がどのような変遷があったのかを深く知りたいと思い、調査・研究に取り組んだ。

２　研究方法

① 「八郎潟の魚」「八郎潟はなぜ干拓されたのか」を参考図書として調査。

② 農業土木学会発行の「国営八郎潟干拓事業史」を通読。

③ 大潟村干拓博物館を訪問し、展示物の調査。

④ 農林水産省や秋田県・大潟村・潟上市等の HP を閲覧し、データを収集。

３　研究内容とその分析

① 江戸･明治・大正・昭和の干拓計画の変遷。

② オランダから技術者を招聘し、国家事業として計画･設計･施工。

③ 地元住民への漁業補償や入植農家の募集計画。

④ 水産資源や在来種･外来種の変化。

⑤ 水質汚濁問題や減反政策、食糧自給率の低下。

４　まとめと考察

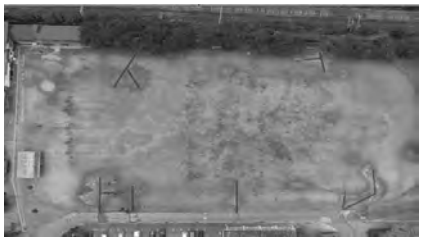
今回の調査・研究は先輩たちが行った八郎湖の水質に関する研究を受けて、干拓の歴史や将来像を知りたいと思い、スタートした。干拓博物館をはじめとする現地調査や参考図書の選定等を行った。八郎潟干拓の歴史や環境問題を含め、継続して調査や研究が必要な分野が多岐にわたり、今年度は問題提起という形での考察となった。来年度も継続して干拓地や残存湖に関する研究活動を行いたい。

雨水を効率的に透過させる研究

環境土木科２年　８名
指導担当　教諭　冨田和樹

１　課題（研究の目的と研究計画）

本校ラグビー場の土壌は、土で雨が続くと数カ所に水たまりが発生し、練習の妨げとなっている。そのため、主に１年生がその水を道路に移動させる作業をするため、貴重な練習時間が短くなってしまっている。そこで現在のラグビー場の現状を把握し、排水性を高めたり、地下への透水性を向上させるために、課題研究の授業で、雨水を効率的に透過させる方法を模索し、貴重な練習時間が奪われないようしたいと考え、研究に取りかかった。

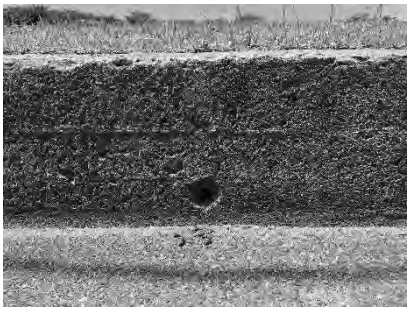


２　研究方法

① 雨天後のラグビー場の水たまりの状況を確認する。
② 効率的に地下へ浸透する方法を模索する。
③ 道路側の小さな穴から排水する方法を模索する。
④ 排水に必要な材料は、できるだけ再利用できるものを使用する。

３　研究内容とその分析

水たまりになりそうな部分を特定し、効率的に排水できる方法を模索する。その手段として、①地下への浸透、②暗渠排水による方法から選択した。①においては、手動アースドリルを使用し、ラグビー場を掘り返すことで、浸透の度合いと土質を確認した。②においては、ラグビー場の駐車場側の壁には５ｃｍ前後の穴があり、そちらを活用し排水することとしたが、木くずや硬い土が詰まっており、取り除くのに時間がかかった。また、ＳＤＧｓの観点から農場に放置されているコンクリート片を砕石として使うために細かく砕いた。



４　まとめと考察

今回の研究は今までにない新しい研究テーマで、設定まで時間を要してしまい、１学期がほぼ活動ができない状況であった。２学期になってから現地調査や資材の調達などを進めてきたが、土中にコルゲート管を埋設し、周囲から水を集めるためにはどうしても砂利が必要で、それを実験実習棟裏の廃材置き場で砕く作業に時間を要してしまい、実際の施工は出来なかった。

ただ、この研究はまだまだ始まったばかりなので後輩達に発表し、今後も継続した研究として引き継いでほしいと思っている。

八郎湖のアオコに関する研究

～アオコバスターズ～

環境土木科２年　水質調査専攻７名
指導担当　臨時講師　鈴木涼汰

１　課題（研究の目的と研究計画）

かつて日本第２の湖、八郎潟が日本の土木技術の粋を集め巨費を投じて行われた干拓事業の結果、その内側に巨大な農地と共に生まれた八郎湖。大規模農業を中心に豊かな農地と豊かな自然環境を育む反面、八郎湖の水質は富栄養化が進行しその象徴ともなるアオコが発生している。八郎湖の水はおもに農業用水や上下水道用水として利用されているため、より良い環境で農業や生活を送ることができるよう八郎湖の水質を改善したいと思い研究を始めた。

２　研究方法

○　水質調査　　①金農水田
　　②八郎湖

３　研究内容とその分析

①　金農水田

水田の水面にアオコのような緑色の物体が浮かんでいることから、調査した。水を採取して観察し、調べところアオコではなく、「アオミドロ」という藻類の植物であった。また、水田内にアオコを「濾過摂食」する能力をもつタニシが住み着いていた。採取して、水槽で飼育したところ水質の改善にはなったが、一緒に飼っていたメダカへの食害などが見られた。

②　八郎湖

八郎湖調整池の水を採取し、水質調査キットを用いて COD(化学的酸素要求量)値を計測した。気温が上がる夏にかけて、COD 値は高くなっていった。原因として水温が上がり、日射量も増えることによってアオコが増殖しやすい環境となったこと。それによって光合成が活発になり、増殖したと考える。写真は７月１９日の八郎湖の水面で、アオコレベルは３であった。また、近くの馬踏川で「アオコキラー」を発見した。水面に浮かぶアオコを吸収し、超音波によりアオコを死滅して循環させるという仕組みになっている。

４　まとめと考察

１年間を通して、アオコ発生を無くす方法を発見することは出来なかった。八郎湖の水質改善のためには、今までとは全く違う視点、観点で水質改善に取り組むことが必要なのではないかと感じた。

耐火レンガの再利用

環境土木科２年　７名
指導担当　臨時講師　中田耀介

１　課題（研究の目的と研究計画）

学校の使用されなくなった耐火レンガの再利用方法を研究することになった。

２　研究方法

耐火レンガについて情報収集
耐火レンガを使用した製作

３　研究内容とその分析

耐火レンガについてレンガと比較して調べた。耐火レンガはレンガに比べ、重さは重くサイズが多きい。また、耐火レンガの修復を兼ねて、一般の家庭でも耐火レンガを製作できるか調べたところ、特殊な機械を用いるため製作は不可能であった。レンガは製作することができることが分かった。

再利用方法を調べたところ、ある地域では、主に余剰在庫や鉄工所、ガラス炉、倉庫などの解体から出た耐火レンガを回収し、「エクステリア用の新しいレンガ」、「レンガチップ」として再利用している。また、「景観レンガ」という、耐火レンガ屑を回収・粉砕したリサイクル現象を配合してできたものにし、これまで産業廃棄物として処理されていた耐火レンガ屑や、都市廃材などを原料にした製品で省資源化に寄与されていることも分かった。

実際に、使われなくなった耐火レンガを私たちで再利用できる方法を考えた結果、「花壇」、「タイル」、「ピザ釜」が出てきた。３つの中で製作が難しいピザ釜を製作することになった。

ピザ釜には、「ドーム型」、「ボックス型」がある。私たちは製作が難しくなく、移動しやすいボックス型を製作することにした。ピザ釜を作製作し、実際にピザが焼けるか実験した。（実験は２回行った）１回目の実験では、２時間前に火入れを行った結果、釜の最大温度は１７０度になり、ピザを焼くのに約１時間かかった。構造の改善が必要と考え、話し合い改良の結果、横から見た空間を「コの字型」ではなく「ヒの字型」にし、下から来る上昇気流を端で滞空し熱を逃がさない構造にした。
2 回目の実験でも２時間前に火入れを行った結果、釜の最大温度は２５０度になり、ピザを焼くのに約３分で焼くことができた。

４　まとめと考察

私たちの中では耐火レンガは再利用されにくいと思い込んでいたが、今回の研究により「エクステリア用の新しいレンガ」や、「レンガチップ」、「景観レンガ」といった製品にすることを知った。また、手軽に再利用する方法で、私たちの身近にある、「花壇」や「タイル」、アウトドア等の「ピザ釜」などにも、製作することができる。耐火レンガをすぐに破棄するのではなく、工夫し再利用することで新しい商品・製品を生み出せることが分かった。再利用について研究することで、環境への配慮やものの大切さを知ることができた。

ブラックバスを活用したしょっつる製造に関する研究
～地域資源の活用と伝統文化の継承について～

食品流通科３年　流通コース選択３名
指導担当　教諭　大石一博

１　課題（研究の目的と研究計画）

近年「特定外来生物」外来生物（海外起源の外来種）であって、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるものについて数多くの問題が提起され、その制限が拡大してきている。

本県においても多くの湖沼で生息している「ブラックバス（オオクチハス)」を活用し、利活用の方法について研究テーマを設定し、秋田の伝統調味料である「しょっつる」を元に、魚醤を製造することができれば、外来種問題の解決ならびに利活用について研究を行った。

２　研究方法

実施計画は下表のとおり設定した。

４月	テーマ設定	８月	熟成観察
５月	諸井醸造の見学	９月	日経高校生 SDGs コンテスト応募･発表
６月	しょっつるの仕込み(練習)	１０月	金農祭での中間発表
７月	塚本技技術士事務所の塚本健一さん しょっつるの歴史と製造の講話 ブラックバス・トビウオの仕込み	１１月	熟成・観察
		１２月	結果のまとめ・考察
		１月	課題研究発表会

① ブラックバスの生息状況の確認
② しょっつるの製造と現状
③ 加工実習
④ 研究についてコンテストに応募

４つの柱を決め、研究に取り組んだ

３　研究内容とその分析

① 秋田県立大学で、ブラックバスの現状を確認した
② 現在、しょっつる製造を手掛けている諸井醸造で、現状と課題について指導を助言をいただいた。
③ 塚本技術士事務所所長の塚本さんから、しょっつるの歴史と製造について講義を受けた。
④ 研究内容について、外部から客観的評価を得るために各種コンテストに応募する。
・日経高校生ＳＤＧｓコンテストで敢闘賞受賞
・毎日農業記録賞で優秀賞を受賞

４　まとめと考察

本研究を通し、地域の課題について生徒自らが掘り起こし、特定外来生物を有効資源として活用できる方向性を見出すとともに、地域の伝統的な食文化である「しょっつる」の継承に、つなげていきたいという生徒の意思も目覚めた。

商品を開発するだけではなく、資源の有効活用や地域の活性化について生徒の目線で提言できたことは大きな財産であり、その成果について外部からも大きな評価を得たことは、本人のみならず後輩たちへの目標とすべき姿を見せてくれた。

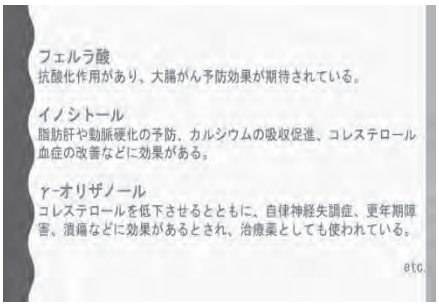
米ぬかベーグルに関する研究

食品流通科３年　食品化学コース米ぬか班６名
指導担当　教諭　田口健一

１　課題（研究の目的と研究計画）

研究目的：米所である秋田県は、精米時に排出される米ぬかの量も多いと考えた。また、米ぬかは栄養価が高いため、食の観点から有効に利用しようと、おいしく手軽に食べられる米ぬかの新商品を開発する。

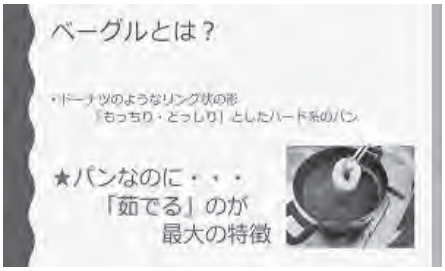
研究計画：①先輩方が研究してきた「米ぬかパン」の研究を継続する。
②昨今の健康志向に考慮した「米ぬかベーグル」のレシピを確立し、新商品への土台作りをする。
③米ぬかベーグルに付加価値をつける工夫をする。



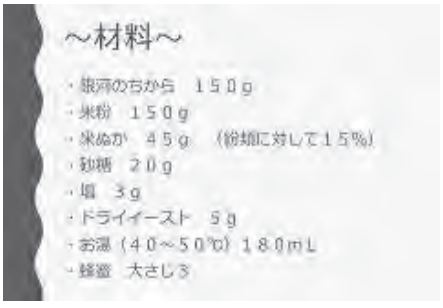
２　研究方法

①米ぬかの栄養価を再確認しながら、継続研究している「米ぬかパン」の商品化に向け、製造技術を確立する。
②「米ぬかパン」から、さらに健康志向に考慮した「米ぬかベーグル」の製造に移行する。
③パンやベーグルの製造技術を高めるため、専門家の意見を参考にする。
④「米ぬかベーグル」に付加価値をつけるため、原料に秋田県産のものを使用する。また、発酵食品の消費量増加の一助になるよう、本校産「みそ」の使用を考える。

３　研究内容とその分析

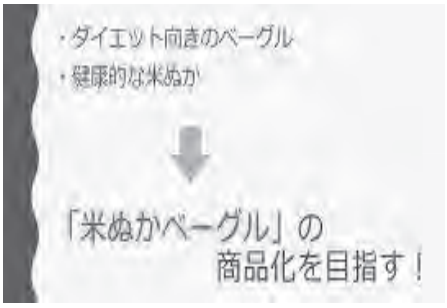


米ぬかパンから米ぬかベーグルに移行した理由は主に２つである。ベーグルは原料に卵・バター・牛乳を使用しないことから、より健康志向に考慮できることが１つめの理由である。また、ベーグルはパンに比べ発酵時間が短いことから、作業時間を短縮できるのが２つめの理由である。
①ベーグルの製造技術の確立。
②原料に「サキホコレの米ぬか」や「銀河のちから」などの秋田県産のものを使用し、付加価値をつける。
③地域のパン屋さんのアドバイスを生かす。
④ベーグルのトッピングとして、本校産のみそを用いた「みそキャラメル」を使用し、本校加工品のアピールをするとともに、発酵食品の消費量増加にもつなげる。



４　まとめと考察

ベーグルに変更したことで、米ぬかの栄養価をより生かすことができるようになった。地域の食材や廃棄食品を有効に利用することで、地域に貢献し地域を盛り上げて行ければと考える。次年度以降も、商品化を目指して生徒と主に研究を継続していきたい。



「摘果リンゴを活用し焼き肉のタレ製造の研究」

食品流通科３年　食品化学コース専攻３名
指導者　教諭　山崎隆之

１　課題（研究の目的と研究計画）

摘果リンゴはいわゆる間引きリンゴのことで、市場に出荷されているリンゴと同じ手間をかけている。摘果した後に廃棄されていることに疑問を感じ、摘果リンゴの活用方法を考えることで、農家の収入アップと、無駄にすることのない経営を行うヒントとなるのではないかと考えテーマを設定した。

２　研究方法

西目高等学校のＯＢである齋藤諒汰さんが営む、由利本荘市西目町にある齋弥果樹園を訪問し、摘果作業を体験し、実際にどれくらいの摘果リンゴが廃棄されているか現地調査を行い、摘果したリンゴを使用した加工品のレシピを考案することとした。

３　研究内容とその分析

昨年度同様のテーマで取り組んでいた先輩が考案した「焼き肉のタレ」を、自分たちのオリジナリティを付け加え、摘果リンゴを有効活用できないかと考えた。

何度か試作品を作り、生徒や先生方に試食をしてもらい、何度も試行錯誤しながら焼き肉のタレ製造に取り組んだ。

摘果リンゴを使用することで、肉自体が柔らかくなり風味が向上することが発見されたが、科学的根拠や成分分析を行っておらず。摘果リンゴの効果について立証することはできなかった。

４　まとめと考察

昨年度からの継続研究であるが、昨年度は摘果リンゴをいただくだけで、実際の作業を体験することはできなかった。しかし、今年は生徒が実際に摘果作業を経験し、時間をかけて摘果したリンゴが廃棄されている事実を知り、自分たちで摘果したリンゴを使用して、摘果リンゴの有効活用について研究を行えた点は大きな収穫であると感じている。次年度以降は、収穫までの期間で３回行われている摘果作業すべてを体験し、廃棄されている摘果リンゴを使用した加工品を製造し、成分分析や科学的根拠を明確にし、一般に販売できるように研究に取り組みたい。この研究を通じて、生産現場で愛情を込めて栽培されているリンゴを無駄なく利用するために、本校生徒がどれくらい真摯に取り組んでいけるか不安であったが、懸命に作業に取り組む姿勢を見ることができ、実際に経験させることが最も効果的な学習に繋がると確信した。

「酒粕の二次利用」

食品流通科３年　流通コース酒粕班２名
指導担当　臨時講師　佐藤旭浩

１　課題（研究の目的と研究計画）

米が多く生産され水量の豊かな秋田県では、日本酒が古くから多く生産されている。その日本酒の製造工程から出る酒粕を有効活用したいと考え研究テーマとした。

２　研究方法

１・２月	テーマ設定	１０月	由利ファーム訪問 山本酒造訪問
４．５月	酒粕の利用方法調べ	１１月	飛良泉本舗訪問
６月	稲とアガベ 飛良泉インタビュー	１２月	刈穂酒造訪問
７～９月	上記まとめ	１月	総まとめ

３　研究内容とその分析

（１）酒粕の利用状況についての調査

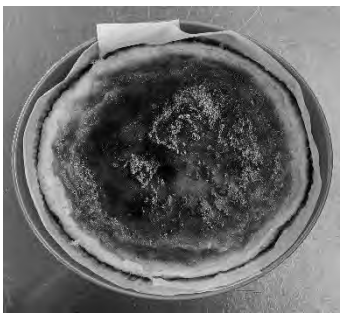
酒粕は、伝統料理など様々な料理に利用されているが実際の消費量少ないのが現状である。

そこで、高校生らしさや多くの年代にも受け入れてもらうことのできる酒粕の新たな調理方法と商品開発を目指すため、県内の酒造会社の利用状況を調査した。

（２）酒粕を利用した試作品製造　「酒粕バスクチーズケーキ」

≪分量≫
- 酒粕　１００ｇ
- 牛乳　３００ｇ
- 砂糖　７０ｇ
- サラダ油　３０ｇ
- 卵、ベビーチーズ　各２個
- ホットケーキミックス　１００ｇ
- ギリシャヨーグルト　６０ｇ

≪先生方の感想≫
- 酒粕感が強い
- 生地が柔らかい
- バランスが良い
- なめらか
- 水分が多い



４　まとめと考察

今回の調査で多くの酒造会社では、酒粕に対して様々な対策を行っていることが分かった。しかし、排出された多くの酒粕が廃棄されている現状も知り、酒粕の消費拡大に向けた取り組みが必要だと感じた。

これらの事から、バスクチーズケーキなど商品開発に向けた試作を行い、様々な感想を頂いた。今後も酒粕の性質を活かした金農の新たな商品開発につなげ、地域の課題解決に取り組んでいきたい。

地域住民独居老人宅剪定事業と障子張り替えに関する取組

造園緑地科３年　課題研究班１４名
指導担当　教　諭　　宮腰　明

１　課題（研究の目的と研究計画）

追分地域の一員として、郷土を愛する心とボランティア精神を身につけ、郷土理解を深めるとともに、集団生活のルールを学び学科内の友情を深めながら、学科間の連携も図る。

このプロジェクトは課題研究の授業の一環として行うもので、金足農業高校が追分地域の一員として地域に恩返しすることができないかと考え、独居老人宅の樹木の剪定や庭整備、また、障子の張り替え作業を行う事で社会貢献を体験する機会とする。

２　研究方法

（１）町内会長に相談し、地域の独居老人宅で、剪定希望の方を調査する。
（２）地元企業の造園技能士を活用し、造園緑地科生徒としての技能を同時に高める。
（３）本校の２・３級造園技能士の資格取得者を活用し、剪定ボランティアに積極的な参加を促す。
（４）生活科学科と連携し、学科の特長を活かした事業を行う。

３　研究・活動内容

【現地調査】
（１）独居老人宅の樹種調査
（２）樹種による作業工程の確認
（３）必要用具と資材の確認
（４）全体計画の日程調整

【障子張り替え】
（１）独居老人宅の障子の確認
（２）必要資材の調査・調達
（３）障子張り替え前後の障子の運搬計画
（４）障子張り替え作業の実施

４　まとめと考察

生徒達から「独居老人宅の剪定作業や、お盆前に障子の張り替え等を行ったらどうか」という声が上がり、造園緑地科で学んだ「剪定技術」や、生活科学科で学んだ「社会福祉意識」を地域に貢献するかたちで発揮したいという生徒達の思いを３年目の事業として行った。造園緑地科の生徒からは「普段の授業やマイスター制度の活用で学んだことが活かせて、地域の方々に喜んで貰えてとても嬉しいし、人の役に立てたという経験はとても貴重です。」という言葉や、生活科学科の生徒は「授業の経験を活かせて、地域の方に喜んで頂けた。この事業を後輩達にも受け継いでいって欲しい。」と感想を述べており、地域貢献（社会貢献）に喜びを感じられる人間に生徒達が成長してくれていることが印象的だった。地元地域の異年齢の方々との関わりあいの中から得られることによるソーシャルスキル（社会性）の向上や、誰かの役に立てたという成就感、誰かから必要とされている満足感でもある「自己有用感」の醸成に繋がる良い経験をさせて頂いて本当に心から感謝をしています。

持続可能な地域づくりに関する研究

造園緑地科３年　課題研究班１４名
指導担当　教諭　和泉有紗

１　課題（研究の目的と研究計画）

庭園管理の際には必ず剪定ごみ（廃材）が発生するが、役割を終えた花や実、不要な枝葉は当然のように捨てられる。私たちは、これら廃材を資源として活用するアップサイクルと考え方を広く伝えていくため環境教育を普及させる必要があるのではないかと考えた。持続可能な農場・学校および地域社会の創出を目指し、環境教育を主体としたイベント開催、さらに本校樹木見本園を整備し、維持・発展させることで、次世代を担う子どもたちの心身発達の場の創出を目指すことにした。

２　研究方法

（１）樹木見本園整備
樹木医による現場実習および見本園の樹種特定・整備を通じ、次の①～③の役割を維持・発展させた。【①学びの場】樹木の性質や役割、管理技術の学習。【②癒しの場】フィトンチッド効果による心身の癒し効果。【③レクリエーションの場】集いや交流エリア。

（２）ワークショップ開催（校地内環境整備の際に発生した廃材を用いたアレンジメント製作）
本来捨てられてしまう廃材（剪定ごみ）を“作品”として生まれ変わらせることでアップサイクルを目指し、材料は自前とした。また、子どもおよび保護者に対し環境教育を行った。廃材樹木の魅力を伝えることで、自然の恩恵に感謝する心と豊かさを見つめ直す気概を育み、子ども・親世代への環境教育の実践ならびに地域社会へ訴えかけるきっかけづくりとした。

３　研究内容とその分析

【樹木見本園整備事業】
（１）樹種調査・樹木調査票作成（樹木医による指導５回）
（２）樹木医による現場実習「緑の診断活動」に同行、調査（Ｒ３実施）
（３）炭やき参加　秋田県立大学生物環境科学科炭やきサークル主催（Ｒ３参加）
（４）樹名板作製・取り付け
【ワークショップ事業】
（１）綿花栽培（Ｒ２秋田県立大学生物生産科学科より種子提供）
（２）環境整備および材料収集・処理
（３）地方裁量型認定こども園あきたこどもの森園児との交流（Ｒ３実施）
（４）ワークショップ準備・実施

４　まとめと考察

昨年度に引き続きワークショップ事業を成功させることができた。環境教育を実践していくため、今年度はまつぼっくりの形を問うクイズを実施した。参加者からは好評をいただき、興味関心を引き出す内容開発ができた。さらに、材料収集や作品製作の際、参加者自ら剪定を行うことで、簡単な管理方法を学びさらに樹木それぞれの特徴に気が付くきっかけとすることができた。五感を使って自然に触れ合うワークショップを実現できたと感じる。今後の構想として、より環境教育を充実させたワークショップの開催、さらに心身を育む場として役割を果たせる樹木見本園の実現を目指したい。また、ＳＤＧｓやアップサイクルを普及させ、自然環境に興味を持ち、自ら進んで自然と触れ合おうとする子どもや保護者を増やしていくことで、持続可能な農場・学校および地域社会の創出に貢献したい。

緑化材料の効用の研究

造園緑地科３年　課題研究班７名
指導担当　臨時講師　渡部玉緒

１　課題（研究の目的と研究計画）

本校は、本県で造園について専門的に学べる唯一の高校である。

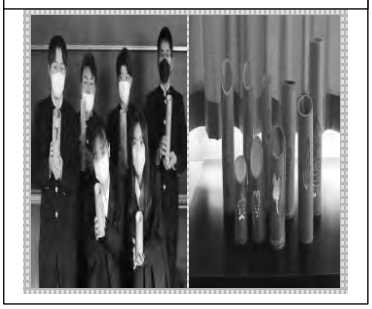
そして、６年後に迎える創立１００周年に向けて、誇れる金農・誇れる母校とするため我々は造園緑地科としての専門的な学びをどのように表現するべきかを大きなテーマとして掲げ、課題研究をスタートさせた。今年度は、専門科目である環境緑化材料で学んだ植物材料・岩石材料・各種材料（木材/竹材/金属/セメント等）の中から植物材料のもつ緑化効果を研究することで、地球温暖化による様々な自然環境の変化に対応していくとするものである。計画は緑化範囲を周辺住民の目にする通用門エリアと、多くの教職員と生徒が目にする実習棟エリアに設定し、地域と共に発展する”おらほの学校”となることを目指した。

２　研究方法

（１）　コンセプトづくり　・・・　そもそも論に立ち返り、なぜ人にとって緑が大切かを考え、緑を①生命維持のための”緑”②精神的豊かさをもたらす”緑”に分けて考えることとした。①を実践するため大根の種まきから収穫までの体験。②の緑の大切さを調べるため全国の国立公園・国定公園・都道府県公園の数や名称を徹底調査。

（２）　ＳＤＧｓ　・・・　ＳＤＧｓの観点から過去に門松で利用した竹を再利用することで、竹材の性質や使用特性を学習した。また、竹材をデザインや装飾品としての観点からを研究・作成した。

３　研究内容とその分析



【コンセプトづくり】

１、通用門エリアの緑化材料は早春に生命の息吹を感じられるよう桜並木の下にスイセンの球根を植栽。

２、実習棟エリアは南からの日差しが強いため、ゴーヤー・タチアオイ・マリーゴールド・サルビアに選定し、播種からの栽培及び植栽。

【ＳＤＧｓ】

１、過去門松で使用し、今後の使用目的のない太竹を装飾品として復活させ、第２の生命を吹き込んだ。

２、本校造園緑地科見本園で採取した落ち葉を発酵させ、緩効性肥料として漉き込むことで生命維持のための緑を育成できた。

４　まとめと考察

ビジネス用語に使われる”ヒト・モノ・カネ”を考えた場合、人口減少で”ヒト”は減り、孫や子供の代でも返せないほどの国債発行で”カネ”は天下の周りものとは言い難い。今身近にある”モノ”をいかに工夫して活用していくかの知恵が我々には必要ではなかろうか。その知恵の獲得に、造園を内包する農業教育は大きな役割を果たせると考える。資源の乏しい日本ではあるが、温暖湿潤な気候に恵まれ循環可能な農耕文化から生まれた日本の農業技術は、激変する食料事情や気候変動といった世界的課題に大きく寄与できる。

農業教育を意義あるものとし、今後は学習で得た知識を実践または発展させる場として課題研究といった科目をより大切にしていきたい。

金足地域 春の景観保全

～　校地内サクラの樹勢回復に関する研究　～

造園緑地科科２年　課題研究班１１名
指導担当　臨時講師　小野聡悦

１　課題（研究の目的と研究計画）

本校の通用門からラグビー場・陸上競技場へとつながる、ソメイヨシノを主とする桜並木は、昭和の時代から毎年春になると、生徒達の登下校風景を彩ってきたと同時に、学校のすぐ横を通る「国道７号線」や「男鹿線」「奥羽本線」の電車からもよく見え、金足地域の春の景観の一つとなっている。しかし近年、このサクラの樹勢が弱まり、危機を迎えている。この危機を本校だけの問題では無いと考え、金足地域の春の景観を保全していこうと、サクラの樹勢回復の研究を始めた。樹勢回復には５～１０年を要するため、今後数年かけて樹勢の回復を図っていく計画である。

２　研究方法

①サクラの病害虫を知る　・樹木医による講習
②サクラの現状を知る　・対象となる樹木の寸法計測
・病害虫による被害状況の把握
・土壌調査
③樹勢回復作業を継続して行う　・テングス病被害枝の切除
・土壌消毒
・土壌改良

３　研究内容とその分析

景観を保全するに当たり、サクラの樹勢衰弱の原因を探るため、樹木医による講習を受講 写真１ 。現状把握のための調査として、研究対象とするサクラ５７本の規格を計測、樹勢衰弱の原因の一つであるテングス病被害の有無を確認し、表にまとめた 表１・２ 。本校のサクラの衰弱原因を「テングス病の拡大」によるところが大きいと分析し、テングス病被害枝のマーキング、切除、処分と、切り口への殺菌剤塗布作業を行った。今年度は継続研究として、テングス病被害枝の除去を中心に進めた 写真２ 。

４　まとめと考察

今年度の活動は計画の３年目ということで、前年度の調査結果から、テングス病被害枝の切除作業を継続して進め、樹勢の維持につとめた。テングス病被害枝の数が非常に多く、細かい箇所まで感染しているため、土壌や害虫の調査も行いたかったが手が回らなかった。今後はバランス良く進めていきたい。

樹勢回復は１～２年で成果が出るものではないため、今後も研究を継続するとともに、可美しき郷金足の景観維持に力を入れていきたい。

写真１

写真２

【被害木調査表】

位置	番号	樹種	形状寸法(単位：m) 樹高(H)	枝張(W)	目通(C)	被害の有無(○×)
通用門	1	ソメイヨシノ	5.20	5.47	0.70	○
	2	ソメイヨシノ	5.05	4.01	0.54	○
	3	ソメイヨシノ	5.00	4.80	0.30	○
	4	ソメイヨシノ	4.30	5.70	0.68	○
	5	ソメイヨシノ	2.30	1.40	0.12	×
	6	ソメイヨシノ	2.50	1.26	0.12	×
	7	ソメイヨシノ	5.60	5.84	0.76	○
	8	ソメイヨシノ	6.00	5.60	0.79	○
	9	ソメイヨシノ	4.00	3.45	0.42	○
	10	ソメイヨシノ	4.30	4.47	0.41	○
	11	ソメイヨシノ	3.50	4.80	0.50	○
	12	ソメイヨシノ	4.20	3.16	0.49	○
相撲場	13	オオシマザクラ	8.00	7.90	1.90	×
	14	ソメイヨシノ	5.50	6.30	3.30	○
	15	ソメイヨシノ	9.50	7.50	1.65	○
ラグビー場	16	ソメイヨシノ	12.00	10.60	2.90	○
	17	ソメイヨシノ	14.50	8.30	2.60	○
	18	ソメイヨシノ	8.00	5.60	2.45	○
	19	ソメイヨシノ	7.50	7.30	2.70	○
	20	ソメイヨシノ	7.50	7.60	2.10	○
	21	ソメイヨシノ	6.00	5.40	2.10	○
	22	ソメイヨシノ	5.50			
	23	ソメイヨシノ	7.50			
	24	ソメイヨシノ	5.50			

表１

【被害木調査カード】　天気（晴）　調査日　2020．5．6（水）

整理番号	樹木名	形状寸法(m) H	W	C	被害の有無(○×)
16	ソメイヨシノ	12.00	10.60	2.90	○

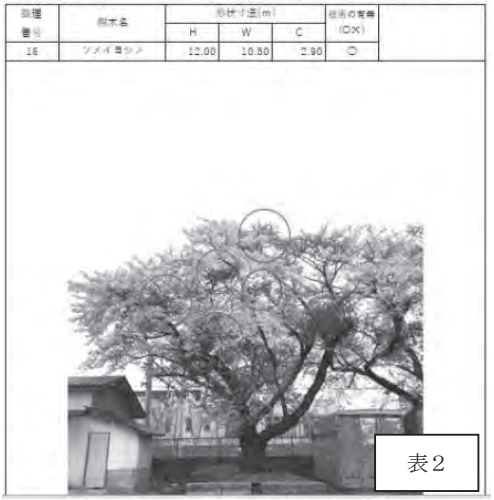


表２

繋
～ワタで支えるみんなの笑顔～

生活科学科３年　こっとんくらぶ７名
指導担当　教諭　猿田美樹

１　課題（研究の目的と研究計画）

栽培したワタを収穫し、その活用方法について探ってきました。多くの人の笑顔を支えるために、ワタの価値を追求することを目的とし、オーガニックコットンを栽培することで環境保全、秋田の土地で綿花栽培することで農地再生を目指しました。さらに、福祉を学ぶなかで、農業と福祉が win-win な関係がもてる「農福連携」の実現やワタを届けることで地域と繋がり、社会貢献できないかと考えました。

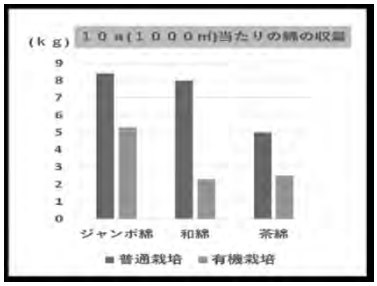
２　研究方法

ワタの栽培は生物資源科の協力を得て、2021 年は農薬を使用した普通栽培との生育状況の比較をしました。どの品種も有機栽培より普通栽培のほうが 1.5～2 倍の収量の差があり、普通栽培より手間がかかりますが、秋田でもオーガニックコットンを栽培できることが分かりました。しかし、ヨーロッパ原産のジャンボ綿は生育期間が長く、冬の収穫になるとコットンボールが傷んでしまうのに対し、和綿・茶綿はアジア原産で秋田の気候に適していることから、今年はより品質のいいコットンボールを収穫するため、和綿と茶綿の有機栽培のみとすることにしました。

さらに、先輩たちが生理用品が買えないウガンダの女性たちに布ナプキンを製作して届けた活動をきっかけに、たくさんの笑顔と繋がるためワタの活用を重点的に取り組むことにしました。

３　研究内容とその分析

ワタの活用の１つ目はワタを布にすることです。全国各地で無農薬栽培した和綿を使ってＴシャツを作ることになり、約２ｋｇの和綿を提供しました。紡績工場で糸にしてもらい、糸から布に、そして肌に優しいＴシャツが仕上がりました。２つ目は、座布団に入れることです。本校 OB で大相撲の押尾川親方が４月に新しい相撲部屋を構えました。同窓会から座布団を送る計画があると知り、その中に金農で育てたワタを入れてもらいました。３つ目は、秋田の人々に金農のワタに触れてもらうことです。八郎潟町社会福祉協議会を通じて、婦人会の方にワタを届け、マスコット作りに使っていただきました。完成した日本赤十字社の「ハートラちゃん」は、一人暮らしの高齢者に渡り、喜んでいただきました。綿花栽培に挑戦したいという声があり、苗木と育て方のリーフレットを添えてプレゼントし、うまく収穫したと報告をいただきました。また、天王みどり学園にも届け、工夫された綿繰りの様子を見せてもらいました。アジサイのブローチ作りにも活用してもらい、男鹿市の雲昌寺で販売されたとのことでした。



４　まとめと考察

婦人会の方、1 人暮らしの高齢者の方々、天王みどり学園の生徒には、金農で育てたワタの、温かくふわふわな手触りを感じてもらえました。また、秋田で綿花栽培できることに興味を持っていただき、少しずつ輪を広げることができました。今後もワタに触れたときに感じる温かさや幸福感を国内外の人たちに伝え、交流学習を継続するほか、地域の人々、高齢者施設、福祉施設と繋がり、農福連携に取り組みます。

県産農産物のドライ加工と商品化探究の取り組み

生活科学科　１年３５名
指導担当　教諭　佐藤睦子

１　課題（研究の目的と研究計画）

改正食品衛生法が、２０２１年６月完全施行された。これまで本県で猶予されてきた漬物製造と販売も許可制となり、猶予期間の２０２４年５月までに新たな衛生基準での施設整備が必要となった。県内の食品加工所ではその改修費用の負担から、今後は漬物製造をやめざるを得ない等の声が聞かれ、本県特産品の生産と伝統的食文化の伝承に危機感を覚える。そこで昨年度から取り組んでいる生薬のドライ加工をヒントに、食品衛生法対象外の「乾燥」加工技術を学び、県産農産物を活用した新たな乾燥食品を考案し、漬物を補う加工品として提案できないかと考え研究に着手した。

２　研究方法

（１）八峰町生薬栽培研修　（担当１０名）～自然乾燥～
県内生薬栽培の魁である八峰町農林振興課の圃場を視察し、気候にあった生薬栽培やその活用、商品化の実際について学ぶ。

（２）ドライ加工研修　（生活科学科１年３５名）～機械乾燥～
金足農高産農産物（梨、ぶどう、じゃがいも、枝豆）のドライ加工技術を専門家に学び、規格外農産物の活用と商品化を探究する。

（３）秋田白神食品（株）視察（担当３名）～燻し（乾燥）～
県内のいぶりがっこ製造企業を視察し、食品衛生法改正をふまえた食品製造の工夫について理解を深め、自らの商品化の考案にいかす。

（４）東洋水産ｽﾏｲﾙ“ﾌｰﾄﾞ”ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ（担当３名）～ﾌﾘｰｽﾞﾄﾞﾗｲ加工～
県特産品や伝統食材を活用したフリーズドライ食品の商品化を目指す。秋田の食文化や特産品を県内外にＰＲするとともに、県産農産物の消費に貢献し新たな加工と食文化を広く提案する。

３　研究内容とその分析

（１）ビニールハウスを使ったカミツレの自然乾燥の様子を見学し、土壌シートや防虫ネット整備は必要であるが、太陽光以外のエネルギー資源を必要としない方法は魅力的であった。ただ初夏～初秋の限られた期間のため、収穫期の合う農産物の加工に限られる点に注意が必要である。

（２）果実は食品乾燥器、ジャガイモはオーブンなど、食材に応じたドライ加工法を学んだ。煮沸などの工程のため販売には許可が必要になるほか乾燥機の衛生管理上、根菜や菌類は適さない。さらに柿やハーブなど食材ごとの乾燥法をまとめ、全校で共有する乾燥機の本校使用ルールを作った。

（３）いぶりがっこの製造方法や伝統的な食品加工技術である「燻し」「塩蔵」について学んだ。さらに食品衛生改正法への対応や制度の変化について考えを伺い、「優先すべきは安心と安全な商品作り」という考え方に触れ生徒たちも感銘をうけた。３０年以上農業一筋の経営者だからこそ聞けた農業経営の厳しさや加工業を立ち上げた経緯、食材への強いこだわりにもの作りの原点を教えられた。

（４）東洋水産主催の料理コンテストに応募し、フリーズドライ食品の商品化を目指した。秋田県代表として臨んだ決勝大会では、いぶりがっこや県産食材の魅力についてプレゼンを行い、複数のマスコミに取り上げられた。結果は準優勝で商品化できなかったが、他校のアイディアが収穫になった。

４　まとめと考察

様々な学びや試行錯誤から各農産物に適したドライ加工方法が見えてきた。農業高校の生活科学科として、その専門科目の学びをどう農業分野にいかし地域に貢献できるのか。今後も継続して探求に努めたい。

第５章　カリキュラム・マネジメント

１　探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け

「農業と環境」「総合実習」「農業情報処理」「家庭総合」「課題研究」「作物」「畜産」「草花」「果樹」「食品製造」「測量」「造園技術」「造園計画」「ファッション造形」「食文化」「地域創生論（令和３年度学校設定科目）」「社会起業家実践（令和４年度学校設定科目）」等の科目において探究的活動の主体を図る。また各学科の相互補完となるような授業展開をすることで、教科・科目横断的な学習の実践へと進化させる。

２　各科目における学習を相互に関連させ教科等横断的な学習とする取組について

（１）取組の概要

１年次農業科目「農業と環境」「総合実習」をベースに、各学科の専門科目を通じてプロジェクト学習法やＰＤＣＡ評価サイクルの手法について基礎的な学習を行い、３年次である今年度も、農業科目「課題研究」、家庭科目「家庭総合」等において地域の課題等を題材とした探究的な学びにつなげ、継続的なプロジェクト研究活動を実施している。また、課題解決に向けた資質・能力の向上、プレゼンテーション能力の向上のため、「農業情報処理」で学んだ技術を活用してデータ等の分析を行い、本事業３年目の最終成果報告である成果研究発表会（12/6）にて発表することで、学びのアウトプットを通じた深い学びの実践を試みている。

（２）学校設定科目「地域創生論」の取組について

今年度も、学校設定科目「地域創生論（２単位）」を社会に開かれた教育課程の実践として、かつ教科等横断的な学習の中心として位置づけ、２年生全学科を対象に開講した。年間を通じて９名の講師による講義・講演を実施した。その中で見出した地域課題について、各学科の専門科目と連動させ地域を題材としたより探究的・課題解決的な学習活動ができる体制づくりを推進した。

【令和４年度　地域創生論　外部講師招聘による授業　年間実績】

No	実施時期	所属・役職　講師名	受講生徒
1	5 月 25 日	第１講　秋田大学教育文化学部地域文化学科　准教授　益満　環	選 31 名/他 87 名
2	6 月 8 日	第２講　秋田県林業研究研修センター　専門員　菅原冬樹	選 31 名/他 92 名
3	6 月 22 日	第３講　秋田県観光文化スポーツ部観光振興課　主事　柴田雄登	選 31 名
4	6 月 28 日	第４講　秋田県立大学生物資源科学部ｱｸﾞﾘﾋﾞｼﾞﾈｽ学科 准教授 酒井 徹	選 31 名/他 19 名
5	8 月 31 日	第５講　加藤建設株式会社　代表取締役社長　村上仁志	選 31 名/他 106 名
6	9 月 28 日	第６講　国際教養大学グローバルスタディズ領域　准教授　名取洋司	選 31 名/他 12 名
7	10 月 12 日	第７講　桃山学院大学ビジネスデザイン学部長　教授　菊地昌弥	選 31 名/他 30 名
8	11 月 2 日	第８講　農業法人安田農園　代表　安田淳一	選 31 名/他 118 名
9	12 月 14 日	第９講　あきた未来創造部次世代･女性活躍支援課　副主幹　青山真紀子	選 31 名

令和４年度「地域創生論」講師一覧（受講の様子）

第１講　益満　環　氏

第２講　菅原冬樹　氏

第３講　柴田雄登

第４講　酒井　徹　氏

第５講　村上仁志　氏

第６講　名取洋司　氏

第７講　菊地昌弥　氏

第８講　安田淳一　氏

第９講 青山真紀子 氏

設置科目の目標：地域の実態を理解するとともに、地域課題は何か、課題解決のための政策はどのようなものかを的確に理解し、他者に説明できることを到達目標とする。

実施月日：Ｂ週水曜日５～６時間目（年間１０講義程度を実施予定）

使用教材（１）ｼﾞｬﾊﾟﾝﾁｬﾚﾝｼﾞｬｰﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ『地方起業の教科書』（あさ出版）

（２）その他（講師が配付するレジュメ等）

（３）学校設定科目「社会起業家実践」の取組について

今年度から、学校設定科目「社会起業家実践（２単位）」を３年生全学科対象の選択科目として開講した。環境問題や地域再生をはじめ、社会的課題を解決するための手段のひとつとして、ソーシャルビジネスの考え方や手法について学習する科目であり、２年次に実施した「地域創生論」にて学んだ地域課題を解決する方策を自ら考え、その考えをプレゼンできる能力を養うことを目標として実施した。

【令和４年度　社会起業家実践　外部講師招聘による授業　年間実績】

No	実施時期	所属・役職　講師名	受講生徒
1	6 月 10 日	ビジネスプランセミナー①日本政策金融公庫東北創業支援センター 本田正人	選 31 名
2	9 月 2 日	ビジネスプランセミナー②日本政策金融公庫東北創業支援センター 本田正人	選 31 名
3	9 月 22 日	ビジネスプランセミナー③日本政策金融公庫東北創業支援センター 本田正人	選 31 名
4	10 月 28 日	地域活性化セミナー　あきた未来創造部地域づくり推進課主任　柿崎亨介他	選 31 名

講師の本田正人　氏

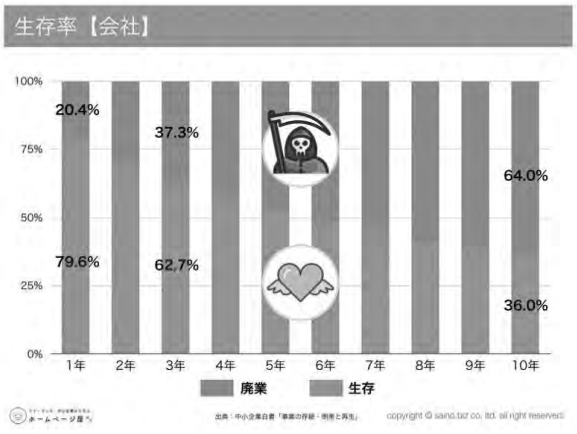
生徒の思考を見守る先生方

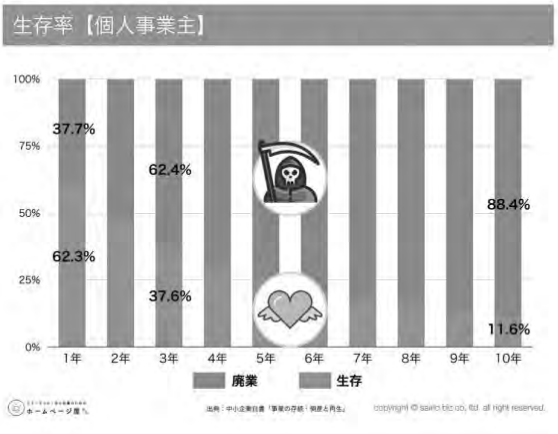
講師に質問する生徒

プランニングする生徒たち

個別指導の様子①

個別指導の様子②





3　地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制について

学校の教育目標ならびに本事業の到達目標達成のために、学校設定科目である「地域創生論」ならびに「社会起業家実践」を核とした教育課程を教科・科目横断的な視点で５学科が連動するかたちで課題研究を深化させていく。そのためにコンソーシアムを引き続き構築し、その地域連携の強化を図るとともに、校内における研究推進委員会を充実させ、評価の改善を図る。

昨年度の目標が「地域課題発見と解決」であり、それを踏まえ今年度は、学校設定科目「社会起業家実践」や「課題研究」など様々な研修や事業を通じて、地域の諸課題に対する解決策を盛り込んだ「地域創造モデル」をプランニングし、地域に提言できることを目標とし研究開発を推進している。コンソーシアムに属する機関がそれぞれの専門性を生かしながら、生徒に対して課題研究等を進める際のフィールドワークの場を提供し、活動の支援を行っている。具体的な実施機関・団体組織として、市町村や大学等の高等教育機関はもとより、林業研究研修センター等の各専門機関や、関連産業、農家・農業法人等と協働しながら事業を展開した。今後もコンソーシアムと協働し、学科間を横断したプロジェクト学習を展開するための研究開発を継続的に進めていきたい。今後も、本事業を契機としたうえで、さらなるカリキュラム開発を加速度的に進め、地域産業を担う人材の育成に努めていきたい。

4　学校全体の研究開発体制について

（1）研究開発推進委員会の設置

学校長を統括とし、教頭２名を統括補佐ならびに渉外、事務長を経理統括、農場長、全５学科主任、教務主任、進路指導主事、農業クラブ顧問を含む 20 名で構成される委員会（研究開発担当とカリキュラム開発担当に分類）を設置し、校内経営企画会議、職員会議、農業部会等の諸会議とリンクさせ研究開発が円滑に推進されるよう組織体制を構築している。

プロフェッショナル型の趣旨に応じた取組については、地域の産業界等との連携・協働による実践的な職業教育を推進し、ＰＤＣＡサイクルによるプロジェクト学習の手法を学習することで研究開発を推進し、様々な研修や事業を通じて、地域課題の発見（抽出）とその解決のための方向性や手段を各自が見いだすことで、創造性や思考力を養っている。次年度もさらにこれらの改善策や地域の在るべき姿を外部へ提言し、実践力を身に付けていくこととする。

（2）研究開発推進委員会開催日時と協議内容

月日	曜日	協議内容
6月 27 日	月	令和４年度（研究開発３年次）の実施計画の概要説明と共通理解
9月 30 日	月	令和５年度学校設定科目の設置案件と運用方法の検討・協議
2月 10 日	金	３年間の成果と課題、今後の自走に向けた取組と協働体制の検討

学校設定科目設置届

学校番号	１５
学 校 名	秋田県立金足農業高等学校
校 長 名	松田　　聡

令和４年度教育課程に次の学校設定科目を設置いたします。

設置科目の名称	「地域創生論」		
教　科　名	農業		
設置する理由	時代に対応すべく、社会に開かれた教育課程を実践するため。また、持続可能な地域社会ならびに地域産業を支える高度な職業人や、地域に定住する人材を育成するため。		
設置科目の目標	地域の実態を理解するとともに、地域課題は何か、課題解決のための政策はどのようなものかを的確に理解し、他者に説明できることを到達目標とする。		
設置科目の内容	行政又は企業等の実務経験者を外部講師として招聘し、地域の実情や課題、将来の地域の展望等について講義を実施し、生徒一人一人の地域課題認識を明確にすることを目的とする。オムニバス授業形式による授業とし、講義時間は６０分程度、質疑による理解の醸成を図る時間を３０分程度とし、講義への理解を深める。最終の授業形式は、外部講師、本校教員、そして受講生徒によるシンポジウムを実施し理解を深める。 なお本講座は地域への公開講座として位置付ける。そのため、講座のパンフレットやシラバスを作成し、地域へ配付する。		
実施学科名	生物資源科・環境土木科 食品流通科・造園緑地科 生活科学科（全５学科）	実　施　学　年	２年（選択科目群）
単　位　数	２単位	実施予定時数	７０時間
使　用　教　材	①中川直洋『地方起業の教科書』あさ出版2020年(副教材) ②中嶋信『集落再生と日本の未来』自治体研究社2010年(副教材) ③西川潤『人間のための経済学』岩波書店2000年（副教材） ④その他（講師が持参するレジュメをその都度配付する）		

令和４年度　科目「地域創生論」年間学習指導計画

秋田県立金足農業高等学校

学期	月	単　　元	配当時間	学　習　内　容	評価の観点及び留意事項
Ⅰ	4 5 6 7	１　ガイダンス ２　地域創生に関する講義 （第１～第６講） ※講義のない週は、関連の先行研究のレビューを行う）	2 4 6 6 6 ２４	ｶﾞｲﾀﾞﾝｽ：ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙとﾛｰｶﾙ 第１講「地域創生論のねらいと諸論説」（仮） ・大学教授等による解説 第２講～第４講 「地方自治体の地方版総合戦略について」（仮） ・県、市町村行政担当者による講義 第５講～第６講義 「地域経済の好循環」（仮） ・大学教授等による講義	・グローバル化する日本の地域社会の実情について理解できる。 ・地域創生の必要性について理解し、他者に説明できる。 ・地方自治における地方総合戦略の意義と、現政策の実行状況を踏まえた課題について理解できる。 ・地域経済の循環システム（全体像）を把握し、地域経済の循環構造を捉えることができる。
Ⅱ	8 9 10 11 12	２　地域創生に関する講義 （第７～第11講） ※講義のない週は、関連の先行研究のレビューを行う） ３　パネルディスカッション （第12講）	4 8 8 8 6 ３４	第７講～第１１講 「地域産業を活かした地域産業の活性化」（仮） ・農業法人関係者 ・ＪＡ、全農関係者 ・土木建設業関係者 ・食品産業関係者 ・造園業関係者 ・家政、生活科学関係者 等々による講義 第１２講～１５講 「地域創生の実現に向けて」外部講師、生徒、地域住民によるパネルディスカッション（公開講座）	・グローバル化する日本の現実を捉え、２１世紀のグローバル社会を、地域の産業という視点から展望することができる。 ・グローバルな動きの中で形成されているローカル（地域政策等）の課題や問題を自ら探ることができる。 ・地方や地域が健全で、安全・安心な暮らしの場として発展していくための地域再生・まちづくりの在り方を理解している。
Ⅲ	1 2 3	４　事例レポートの輪読によるグループディスカッション ５　総括 （住民が地域に求めるもの）	4 6 2 １２	（１）地域活性化に関する事例レポート等の輪読によるディスカッション （２）地域経済分析システム（ＲＥＳＡＳ）やセンサスによるデータ分析 （３）まとめと次年度への展開と、成績評価レポートの提出	・恒常的に地域活性化に関する新聞や雑誌記事、ニュースなどを読み、地域政策に関する自分なりの見解を持つ習慣を身に付けている。 ・地域経済分析システム（ＲＥＳＡＳ）を利用し、データに基づく地域活性化について、提言することができる。

学校設定科目設置届

学校番号	１５
学 校 名	秋田県立金足農業高等学校
校 長 名	松田　　聡

令和４年度教育課程に次の学校設定科目を設置いたします。

設置科目の名称	「社会起業家実践」		
教　科　名	農業		
設置する理由	時代に対応すべく、社会に開かれた教育課程を実践するため。また、持続可能な地域社会ならびに地域産業を支える高度な職業人や、地域に定住する人材を育成するため。		
設置科目の目標	１　社会起業家及び会社経営の仕組みを理解し、説明できる ２　新たな時代の価値創造の担い手としての起業を理解できる。 ３　今後の起業や会社経営のあるべき姿をプレゼンできる。		
設置科目の内容	環境問題や地域再生をはじめ、社会的課題を解決するための手段のひとつとして、ソーシャルビジネス（社会起業家）の考え方や手法について学習する。その内容は、地域が抱える諸課題の解決を主眼とし、まちづくりや六次産業化などに取り組む社会起業家を招聘し具体的事例を学ぶ。また、地域貢献ビジネスの現場を視察するなど、多面的に学ぶ機会を提供する。これらの経験を踏まえ、受講者が具体的なビジネスモデル（プラン）を設計し、実際に県内の企業等へプレゼンテーションを行うことで、社会起業家としての資質、能力を身に付ける。		
実施学科名	生物資源科・環境土木科 食品流通科・造園緑地科 生活科学科（全５学科）	実　施　学　年	３年（選択科目群）
単　位　数	２単位	実施予定時数	６２時間
使　用　教　材	①中川直洋『地方起業の教科書』あさ出版2020年(副教材) ②栗木契編著『ビジョナリーマーケティング』碩学舎2013（副教材） ③西川潤『人間のための経済学』岩波書店2000年（副教材） ④その他（講師が持参するレジュメをその都度配付する）		

令和４年度　科目「社会起業家実践」年間学習指導計画

秋田県立金足農業高等学校

学期	月	単　　元	配当時間	学　習　内　容	評価の観点及び留意事項
Ⅰ	4 5 6 7	1　ガイダンス 2　社会起業家の現状と課題 3　地域コミュニティにおける社会起業の事例	2 4 １８ ２４	・社会起業家実践の進め方の説明 ・社会起業家の定義、地域貢献ビジネスの意義と役割の概観 ・地域資源の有効活用のための農工商連携（六次産業化）の意義と効果、社会背景の変化について ・ゲストスピーカー招聘による社会起業の先進事例に関する講演	・社会変革(農業関連産業の変革)の担い手として、社会の課題を、事業により解決するための意義を理解できる。 ・社会起業家の現状を理解し、地域課題の抽出や、解決のためのアイデアやビジネスプランを自ら考える思考力を養う。
Ⅱ	8 9 10 11 12	4　ビジネスプランの設計 5　フィールドワーク及びゲストスピーカーの招聘 6　プレゼンテーションの作成	２０ 8 6 ３４	(1)高校生ビジネスプラングランプリへの応募（ビジネスプランシートの検討、作成、提出） (2)あきたビジネスプランコンテストへの応募（起業家交流フェス参加） ・社会起業家や、地域貢献ビジネス実践家等の訪問による具体的な事例の実態把握 ・グループごとに整理した内容についてのプレゼンテーション作成	・グループでの対話を通じてビジネスプランを作成していく能力や、対話による思考力の深まりを体得する。 ・秋田県内の社会起業における先進事例の実態を把握できる。 ・社会起業家ビジネスの課題を整理し、主体的に学ぶ姿勢や、これら実社会との関連についてイメージを持つことができる。 ・グループでのプレゼン作成に取り組むことにより、プレゼン作成能力、情報収集と分析力を身に付けることができる。
Ⅲ	1 2 3	7　事業プレゼンテーションのまとめと発表	4 4	・グループ別プレゼンテーション形式での発表	・グループのプランをまとめ、プレゼンする表現力を培う。 ・一連の活動を通じて、社会起業家に必要な資質、能力を身に付けることができる。

第６章　研究成果の検証・評価

１　目標設定シートによる進捗状況

目標設定における目標数値と３年間の達成状況、ならびに数値の変容は以下の通りである（目標設定シートから一部抜粋）。概ね、目標としていた数値を達成することができたと捉えている。本事業に参加した生徒の延べ人数でいえば、１年目が 811 名、２年目が 1,631 名、最終年度である今年度は 2,392 名と初年度に比べ約３倍の生徒数増加が見られている。最終年度にして、全校生徒が本事業の恩恵を享受し取り組むことができた。本事業の目的や主旨、将来像を全職員で認識し、生徒とともに共有し取り組んだことで、目標が達成できたと考えている。

成果目標　設定項目	Ｒ２実績値	Ｒ３実績値	Ｒ４実測値	最終目標値
地域の担い手として地域の抱える課題に関わり行動したい	70%	78%	86%	80%
自分の暮らす地域を外からの視点で考える機会が増えた	63%	73%	79%	80%
将来、自分の住んでいる地域のために役立ちたい	68%	82%	91%	90%
地域に愛情を抱いており現在の生活に幸せや豊かさを感じる	79%	91%	98%	98%
地域の魅力を再発見し、地域(県内)に定住したい	66%	73%	81%	80%
就職希望者の中で県内就職を希望し、就職した生徒の割合	91%	88%	94%	90%
本事業を活用して研修等に参加した生徒の割合	74%	67%	100%	90%
将来、自分の住んでいる地域で働きたい	56%	73%	81%	81%

２　高校魅力化評価システム（1 年次 156 名、2 年次 142 名、3 年次 156 名対象）

本事業採択の 2020 年より３年間、三菱ＵＦＪリサーチ&コンサルティングによる外部委託調査を実施した。この調査からは、高校と地域の学びの「いま」と「変化」を読み取ることができ、かつ継続的な調査により生徒の変容ならびに、本校の「強みと弱み」が明確に診断できるものである。

多くの項目で３年間の変容が見られており、本事業を通じて大きな成長が見られる結果となっている。地域に目を向けて、地域産業を知る、地域の魅力を知る。そして、地域の課題も見えてきた。そのようにしっかりと「社会と地域」を捉えることができるようになれば、またその視点も変わってくると考えている。

分野	領域	質問項目	割合	１年次との差	他地域との差
学習環境	主体性	地域に尊敬している・憧れている大人がいる	78%	＋24p	＋22p
学習活動	主体性	自主的に調べものや取材を行う	83%	＋25p	＋13p
学習環境	社会性	地域の人や課題にじかに触れる機会がある	85%	＋17p	＋28p
自己認識	主体性	目標を設定し確実に行動することができる。	83%	＋16p	＋20p
自己認識	社会性	地域の担い手として政策決定に関わりたい	69%	＋24p	＋35p
自己認識	社会性	私が関わる事で社会を変えられるかもしれない	74%	＋42p	＋18p
自己認識	社会性	地域の課題と世界での課題は関連している	85%	＋27p	＋12p
自己認識	社会性	地域文化や暮らしを自らの手で未来に伝えたい	80%	＋30p	＋20p
行動実績	主体性	授業で興味のある内容について自主的に調べた	78%	＋41p	＋15p
行動実績	探究性	授業でなぜそうなるかについて考え調べた	83%	＋34p	＋11p
総合認識	満足度	この学校に入学して良かった。	97%	＋2p	＋10p

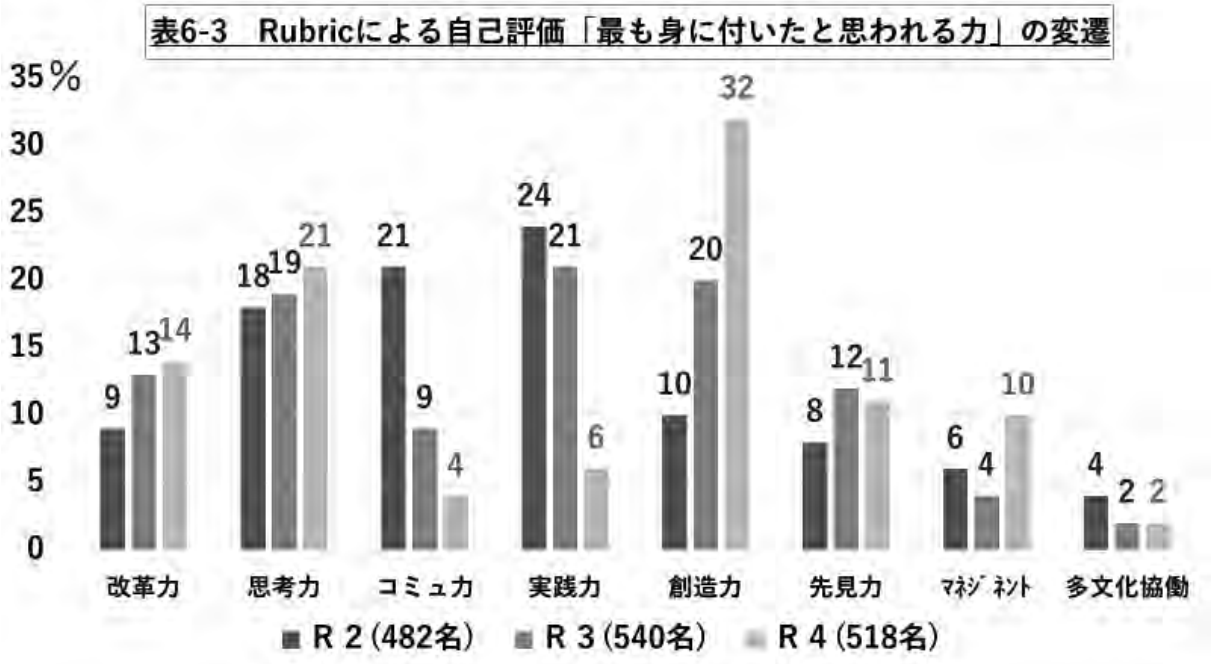
3　金農 Value Rubric（ルーブリック）による評価とその分析

本事業にて身に付けさせたい８つの資質・能力（①改革する力、②思考力、③人間関係構築力、④実践力、⑤創造力・将来設計力、⑥先見力、⑦マネジメント力、⑧多文化協働力）について、評価基準（表６－１）を定め、ルーブリックによる自己評価を実施した。評価の尺度として、S（Capstone）５点、A（Milestone）４点、B（Milestone）３点、C（Benchmark）２点、D（Unachieved）１点とし、各資質・能力の合計平均値を算出し初年度と比較した結果、全ての項目で初年度を上回る結果となった（表６－２①②）。特に「改革力」や「創造力」が身に付いたと認識する生徒が増加したことは、この事業の根幹に関わる部分として注視していきたい。

表６－２①金農 Value Rubric による各資質・能力の平均値（全学科３年生・156 名）

資質・能力	改革力	思考力	関係構築	実践力	創造力	先見力	ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ	文化協働
R2 平均値	2.9	3.3	3.8	3.0	3.1	3.2	3.2	2.9
R3 平均値	3.3	3.6	3.8	3.3	3.5	3.5	3.3	3.2
R4 平均値	3.5	3.7	4.3	3.9	3.7	3.7	3.8	3.7
増減	＋0.6	＋0.4	＋0.5	＋0.9	＋0.6	＋0.5	＋0.6	＋0.8

また、事業終了後に実施している振り返りシートから、「この３年間を通じてどの力が最も身に付いたか」という自己評価において、①創造力（32%）、②思考力（21%）、③改革力（14%）という結果であった（表６－３、アンケート総数 518 名）。学校設定科目「地域創生論」ならびに「社会起業家実践」といった未来志向的な学習内容に加え、本事業による現場見学や出前授業などによる地域学習を積み重ねることで、将来の地域を考える力や思考力、地域を変えたいと思うような気持ちに変化していく様子が見て取れる結果だと示唆される。



4　金農総幸福量ＧＫＨ（Gross Kanano Happiness）指標開発に向けて

本事業における生徒の変容を計るオリジナルの指標を考案し、主として心の豊かさや幸福感の尺度を測定する取組として、「金農総幸福量ＧＫＨ（Gross Kanano Happiness）」を初年度から取り入れ、様々な角度からその指標を評価してきた。

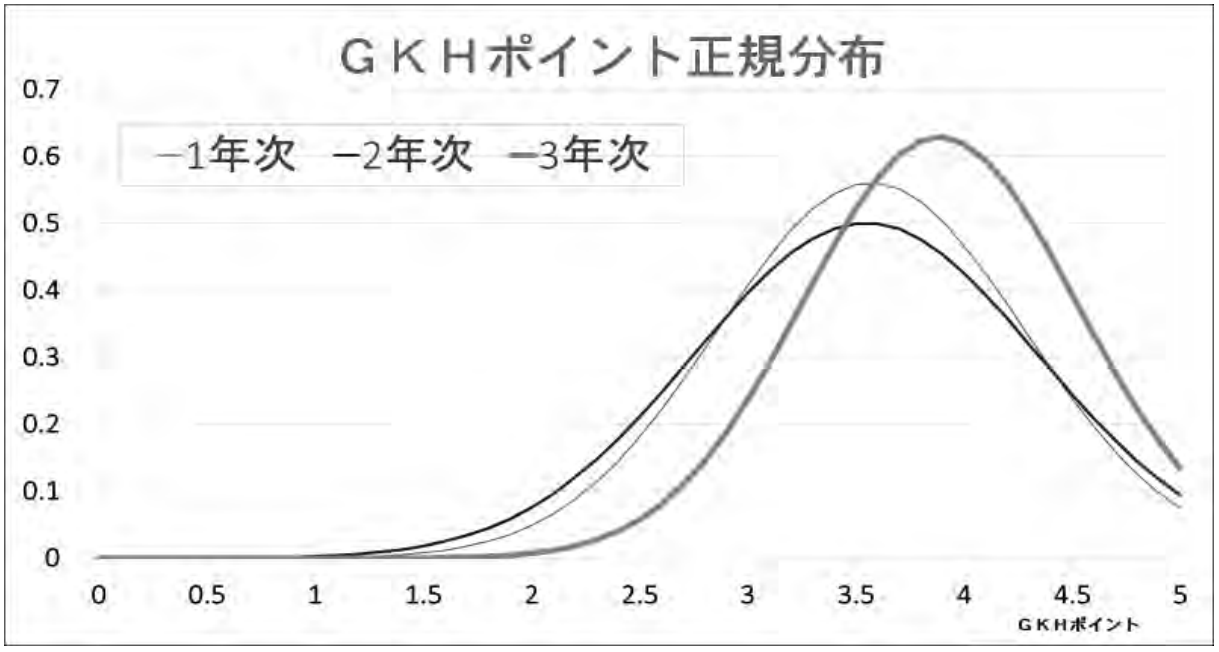
本指標は、「心理的な幸福」「自然環境」「健康・福祉・生活」「教育」「地域・産業・文化」「時間の使い方」「コミュニティの活力」「良い統治」「安心・安全」の９分野を、生活上の「生きがいの柱」とし、それぞれの分野から合計 50 項目の関連する質問を構成したもので(表６－４)、回答の尺度は①感じる(思う)５ポイント、②やや感じる(やや思う)３ポイント、③あまり感じない(あまり思わない)、１ポイント、④感じない(思わない)０ポイントとし、その合計の平均値をＧＫＨとして算出し、初年度からの経年変化を見た(表６－５)。評価としては、3.5 ポイント平均を「幸福感や豊かさを感じている基準」とした場合、全ての学科において幸福度が見られる結果となった。なお、経年変化では差異は見られなかった。

表６－５　ＧＫＨ指標一覧（1 年次 172 名、2 年次 160 名、3 年次 156 名より経年比較）

学科	生物資源科	環境土木科	食品流通科	造園緑地科	生活科学科	全学科平均
1 年 Average	3.56	3.88	3.46	3.41	3.54	3.57
2 年 Average	3.62	3.88	3.28	3.55	3.48	3.56
3 年 Average	3.94	4.29	3.70	3.70	3.80	3.88
増減	＋0.38	＋0.41	＋0.24	＋0.29	＋0.26	＋0.31

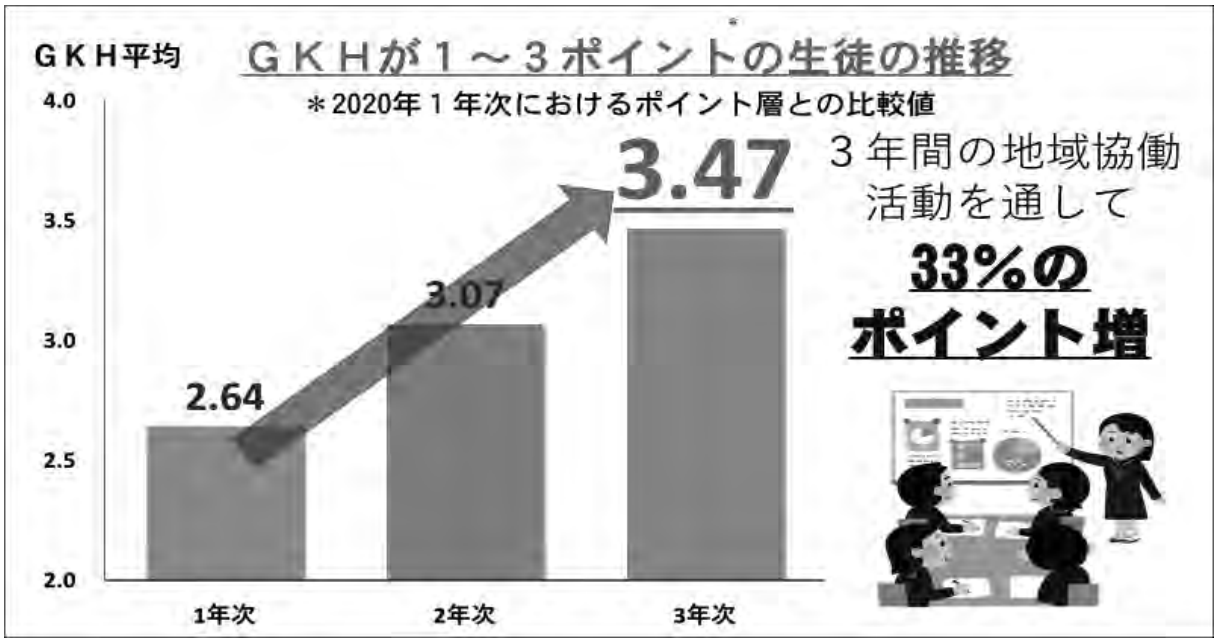
ＧＫＨのポイント評価について、正規分布のとおり２年次では個人と向き合う悩みなどの大切な時間もあり、１年次よりＧＫＨポイントの散らばりが見られたが、見最終学年で、成長につなげる重要なプロセスの集大成として評価(平均 3.9)できた結果となった。活動の中で協働的に友人と資質を高めあったことが見て取れる。

正規分布の分散値としては、前年比平均＋0.34 と上昇し、標準偏差－0.16 と分布の散らばりが小さくなったことが明らかになった。



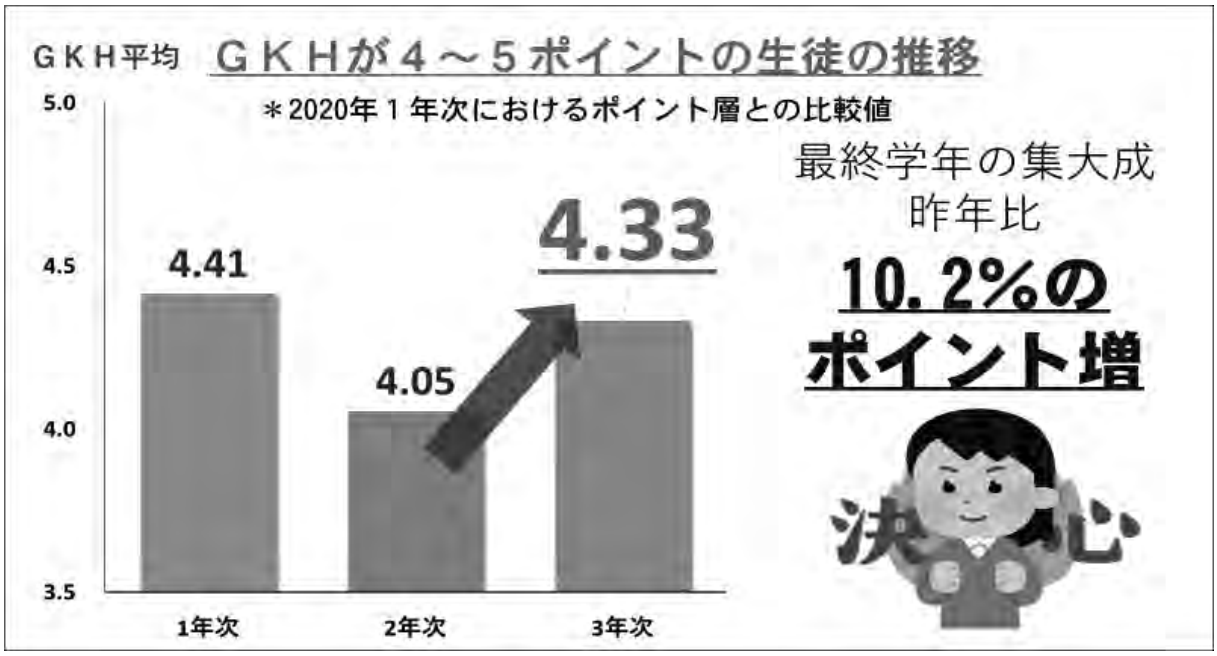
【1年次のＧＫＨポイントの平均値が１～３ポイント層の変容について】

最終学年の３年間で＋33%となった。地域協働の活動を通して、受動的学習から能動的学習ができたという自己評価として見て取れる。秋田の抱える問題は山積みではあるが、この秋田で生き抜こうとする姿勢は評価できる。金農での粘り強い体験を得て、卒業後社会で幸福を感じていくと推察できる。



【1年次のＧＫＨポイントの平均値が４～５ポイント層の変容について】

前年比＋10.2%となり、２年次で悩み苦しんだ時間を経たものの、最終学年で振り戻し自己評価を高めたと示唆される。地域との関わり、人を通した交流で心を揺さぶられた生徒が多かったと思われる。秋田県は高齢社会であるが、逆に一番に高齢社会を抜けられる県にもなり得る。ＧＫＨの視点から、他者との比較の幸福ではなく、自分のものさしでの幸福感や豊かさなど新しい価値観が高まり、地域との協働を大切に生き抜く覚悟ができたと推察できる。



5　定性評価　－生徒が何を学び、何を感じ取ったかー（振り返りシートから抜粋）

【令和３年度学校設定科目受講生より】
・自分が定住したい秋田のことをよく知り、何が必要とされているのか、その中で自分は何ができるのかについて考えたい。
・秋田の課題が見つかったので、改善策を考えたい。秋田に住む女性のネットワークを構築し、コミュニティを形成したい。働きやすい秋田を創造したい。
・ＡＩ、人工知能等の情報化社会の進展により社会の利便性が向上する反面、人の価値や人の優しさや温かさといった心が失われそうな将来こそ人間関係が重要。
・失敗を恐れず挑戦したい。学ぶことは挑戦し続けることだと思う。少子高齢が進む秋田で自分が社会を変えられるのであれば挑戦したい。
・ずっと住んでいるから見えないものがある。幼い頃から親しんでいるから気づけない魅力がある。この授業を通じて改めて考えさせられた。
・小さな幸せを見つけながら生活することで、心の面からもポジティブな自分になっていきたい。
・その地域にしかない魅力を子どもの目線から見つつ、地域活性化と教育を一緒に実施していくことは今の日本に必要な事。
・２０年後の日本や秋田がどうなって､何が必要とされているのかをしっかり見極め、また第三者に聞いたりして自分にあっているのか､自分のやりたいことを考えながらしっかり選択していきたい。
・秋田の定住したい地域の実情を知り「今何が必要とされているのか、その中で自分は何ができるのか、何になれるのか」というポイントを視野に入れ、この授業に臨みたいと同時に、今からできることを少しずつやっていきたい。
・島根大学の中村先生のお話でもあったように、教育の基本は学校を廃校にしないでいかに地域に残すか、地域と密接な関わりを持たせるかが重要。「どうせ秋田は何もない」ではなく、その何もないところに着目し、大切さを見いだす人もいる。
・地域のために柔軟な発想で行動をおこし、発信するという一連の行動を通じて革命を起こしたい
・価値観は人それぞれ違うので、それを幸せに感じるか否かは分からないけど、自分は地方のほうが幸せに生きるための環境が整っていると感じている。
・少子高齢が進んでいる秋田に外部の人が住みたいと思ってもらえるような商品を開発したい。また、愛や幸せいっぱいの地域をつくるために、地域の人たちとのコミュニケーションや結を大切にしていきたい。
・若者の最先端である私たち高校生が、自由で新しい発想力や創造力が求められているということを知り、地域創生論を受ける意味を再確認することができた。
・秋田や地域にもまだまだ知らない魅力があり、それを知らないまま過ごすことで風化させるようなことは絶対あってはならない。そのためには、まずは地域への関心を高め､地域を知る｡地域と密接な関わりを持つことで見える景色が変わってくる。
・課題がたくさんあるほうが地域の強みになると思う。秋田にはたくさん課題はあるが、その課題が明確であることで改善点が探りやすいとも言えるのではないか。
・普段当たり前のようにある日常が自分次第では当たり前でなくなるという危機感を感じている。それだけ、少子高齢は危機的状況にあることを知った。

・大丈夫だよと背中を押してくれる人や友人、大人がいれば前を向いて進むことができる。これから先、自分を信じて失敗を恐れず前を向いていこうと思った。

【令和４年度学校設定科目受講生より】
・何よりも現状を理解することが大切だと理解した。いま何が課題で、どうやって解決すべきかをしっかり考える思考力が必要だと感じた。
・人口減少への危機感を自覚した。秋田県や自分の住んでいる地域を見る視点が大きく変わった。私たち高校生にできることは何かを考える契機となった。
・今まで秋田の将来がどうなるか考えたことがなかったが、自分の住んでいる秋田がなくなる。財政破綻の状況は避けたいので普段から意識していきたい。
・秋田の強気と弱みを知ることで、これから何を実践していけば秋田の将来を設計してゆけるのかを自分なりに考えることができた。
・秋田は今後どうしていくべきなのかを考え、自分はどうすれば秋田に貢献できるのかについてしっかり考えたい。自立という言葉を地域に当てはめた場合、課題も多いが、これからはそのように地域が自立していく時代になるのではないかと思う。
・今は利便性が良い時代で住みやすいと思っていたが、それは自分が良い部分だけを見ていただけで、視野を広げれば環境問題や資源の枯渇など、負の側面もかなりあることを知った。その中で自分は何ができ、どう時代に対応していくべきか真剣に考えるべきである。
・目標の実現のために努力することや、実現後もさらに良いものを求める向上心や実践力がこれから求められる時代ではないだろうか。
・解決すべき課題に直面したとき、その目的をしっかりと理解し、そのためにはどうするのかを考え、先を見抜くことができる大人になりたい。
・地域の強みを理解し、新たな価値を見つける力である先見性を身につけたい。

ふりがな	あきたけんりつかなあしのうぎょうこうとうがっこう	指定期間	2020～2022
学校名	秋田県立金足農業高等学校		

地域との協働による高等学校教育改革推進事業　目標設定シート

1．本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

		2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値（ 年度）
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 現状を分析し、地域の課題を発見して、解決に向けて意欲的に取り組むことができる生徒の割合						単位：％
	本事業対象生徒：		目標値	65	75	85	85（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**72**	**77**	**81**	**81**
	目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の学習活動」に係わる主な指標における成果目標						
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 地域の担い手として、地域の抱える問題や課題に積極的に関わり、行動したい生徒の割合						単位：％
	本事業対象生徒：		目標値	70	75	80	80（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**70**	**78**	**86**	**86**
	目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の行動実績」に係わる主な指標における成果目標						
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会が増えた生徒の割合						単位：％
	本事業対象生徒：		目標値	60	70	80	80（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**63**	**73**	**79**	**79**
	目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「地域の学習環境」に係わる主な指標における成果目標						
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 将来、自分の住んでいる地域のために役立ちたいという気持ちをもっている生徒の割合						単位：％
	本事業対象生徒：		目標値	80	80	90	90（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**68**	**82**	**91**	**91**
	目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の能力認識」に係わる主な指標における成果目標						
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 将来、自分の住んでいる地域で働きたいと思う生徒の割合						単位：％
	本事業対象生徒：		目標値	80	70	80	80（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**56**	**73**	**81**	**81**
	目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の能力認識」に係わる主な指標における成果目標						
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 難しいことや分からないことでも、失敗を恐れず挑戦している、挑戦しようとしている生徒の割合						単位：％
	本事業対象生徒：		目標値	60	70	80	80（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**87**	**88**	**93**	**93**
	目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の能力認識」に係わる主な指標における成果目標						
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 地域に愛情を抱いており、現在の生活に幸せや豊かさを感じている生徒の割合						単位：％
	本事業対象生徒：		目標値	80	85	90	90（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**79**	**91**	**98**	**98**
	目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の満足度」に係わる主な指標における成果目標						
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 地域の新たな魅力を再発見し、地域（県内）に定住したいと思う生徒の割合						単位：％
	本事業対象生徒：		目標値	80	70	80	80（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**66**	**73**	**81**	**81**
	目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の能力認識」に係わる主な指標における成果目標						

b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 就職希望者の中で、県内就職を希望し、就職した生徒の割合						単位：%
	本事業対象生徒：		目標値	85	90	95	95（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**91**	**88**	**94**	**94**
	目標設定の考え方：令和元年度金足農業高校中期ビジョンの数値達成目標における成果目標						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 就職希望者の中で、県内における各学科（農業等）に関係する関連産業（公務員含む）へ就職した生徒の割合						単位：%
	本事業対象生徒：		目標値	40	45	50	50（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**55**	**33**	**54**	**54**
	目標設定の考え方：令和元年度金足農業高校中期ビジョンの数値達成目標における成果目標						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 就職希望者の中で、県内外における技術系公務員になる生徒数（県・市町村等における農業関連技術職）						単位：人
	本事業対象生徒：		目標値	10	12	15	15（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**15**	**16**	**16**	**16**
	目標設定の考え方：令和元年度金足農業高校中期ビジョンの数値達成目標における成果目標						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 進学希望者の中で、県内における各学科に関係する大学等へ進学した生徒の割合						単位：%
	本事業対象生徒：		目標値	12	15	18	18（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**22**	**20**	**21**	**21**
	目標設定の考え方：令和元年度金足農業高校中期ビジョンの数値達成目標における成果目標						
c	（その他本構想における取組の達成目標） 一人３つ以上の各種検定・資格を取得した生徒の割合（専門的資格や普通教科に関わる資格の両方を含む）						単位：%
	本事業対象生徒：		目標値	90	75	85	85（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**59**	**70**	**54**	**54**
	目標設定の考え方：令和元年度金足農業高校中期ビジョンの数値達成目標における成果目標						
c	（その他本構想における取組の達成目標） 農業クラブ全国大会優秀賞３部門以上						単位：部門
	本事業対象生徒：		目標値	1	2	3	3（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**0(未実施)**	**2**	**3**	**3**
	目標設定の考え方：令和元年度金足農業高校中期ビジョンの数値達成目標における成果目標						
c	（その他本構想における取組の達成目標） 地域協働事業を活用して研修等に参加した生徒の割合						単位：%
	本事業対象生徒：		目標値	70	80	90	90（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**74**	**67**	**100**	**100**
	目標設定の考え方：アンケートよる調査（本事業への積極的な関わりを通じて、地域との協働意識を測定する）						
c	（その他本構想における取組の達成目標） 本事業における研究内容や取組について評価できるとの認識をもつ外部の割合						単位：%
	本事業対象生徒：		目標値	70	80	90	90（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**92**	**96**	**100**	**100**
	目標設定の考え方：アンケートよる調査（本事業と関わりをもつ研修受入企業等、地域住民からの評価を測定する）						
c	（その他本構想における取組の達成目標） 本事業における研究内容や取組は、地域の活性化に繋がるとの認識をもつ外部の割合						単位：%
	本事業対象生徒：		目標値	70	80	90	90（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：		実際値	**89**	**92**	**94**	**94**
	目標設定の考え方：アンケートよる調査（本事業と関わりをもつ研修受入企業等、地域住民からの評価を測定する）						

２．地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)
a	（地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 大学や研究機関、企業、農業法人等と共同研究もしくは連携し学習を実施した事業所数					単位：箇所
	10	10	**20(目標15)**	**20(目標18)**	**31(目標20)**	20（令和4年度）
	目標設定の考え方：関係機関等と連携し、高度な技術や学習を深化させることで、本事業の成果を検証する。					
a	（地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 長期インターンシップ（県内外含む、７日間以上の研修をいう）に参加した生徒数					単位：人
	6	5	**18(目標8)**	**13(目標10)**	**7 (目標15)**	15（令和4年度）
	目標設定の考え方：関係機関等と連携し、高度な技術や学習を深化させることで、本事業の成果を検証する。					
a	（地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 本事業において、外部から講師を招聘し、講演や講義を実施した回数					単位：回
			20(目標20)	**16(目標20)**	**23(目標20)**	20（令和4年度）
	目標設定の考え方：関係機関等と連携し、高度な技術や学習を深化させることで、本事業の成果を検証する。					
b	（普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 県内で生徒および教員が、様々な各種研修会や成果発表会等において成果を発表した回数					単位：回
	2	2	**3(目標５)**	**6 (目標8)**	**10(目標10)**	10（令和4年度）
	目標設定の考え方：本事業における研究成果の発信並びに情報の提供を通じて、外部の意見を次年度へ取り入れる。					
b	（普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 成果報告書を配付した冊数					単位：冊
			170(目標170)	**170（目標170）**	**170（目標170）**	170(令和4年度)
	目標設定の考え方：本事業における研究成果の発信並びに情報の提供を通じて、外部の意見を次年度へ取り入れる。					
c	（その他本構想における取組の具体的指標） 本事業において、教員自らが最先端技術や見識を深めるため、自主的に研修を計画し教員研修に参加した割合					単位：％
			90(目標70)	**66(目標80)**	**83(目標90)**	90（令和4年度）
	目標設定の考え方：教員が本事業への意義を理解し、積極的に研修に参加したかについて成果を検証する。					

３．地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)
a	（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） ＯＢや地域住民など、身近に全力で応援してくれる大人がいると思う生徒の割合					単位：％
		75	**93(目標80)**	**90（目標85）**	**96(目標90)**	90（令和4年度）
	目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の学習状況」に係わる主な指標における成果目標					
a	（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 地域と協働して活動した回数（地域に出て活動並びに事業を行った年間の回数）					単位：回(延べ)
	20	20	**20(目標20)**	**22(目標25)**	**30(目標30)**	30（令和4年度）
	目標設定の考え方：地域での協働活動の実態を測定する。					

＜調査の概要について＞

１．生徒を対象とした調査について

	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
全校生徒数（人）	518	516	520	517	525
本事業対象生徒数			520	517	525
本事業対象外生徒数					

表6－1　金農　VALUE　Rubric　評価基準

8つの力	S（秀） Capstone5	A（優） Milestone4	B（良） Milestone3	C（可） Benchmark2	D（不可） Unachieved1	評価
改革する力 Change maker 地域を「変える力」を育む	現状を変えたいという改革のための具体的な自分なりの手段や方法を持っており、他者に対し論理的に説明することができる	現状を変えたいという改革のための具体的な自分なりの手段や方法を持っている	「頑張ったら自分が変えることができるのではないか」という自分の可能性（自己肯定感）を信じている	身の回りの問題点や課題について危機感を持っており、自分でできることがあるならチャレンジしたいと思っている	身の回りの問題点や課題について危機感を持っておらず、現状のままで良いと思っている	
思考力 Thinking power 『何故？』を考え思考する	感じた疑問や課題の解決方法や手段について、自分の意見や手順を論理的に展開し、さらにその考えを、他人に説明することができる。	感じた疑問や課題に対して、解決する方法や手段について、自分の意見や手順を論理的に展開できる。	感じた疑問や課題に対して、解決する方法や手段を考えることができる	日常で疑問や課題といった「何故」を感じることができる	日常で疑問や課題といった「何故」を感じることがない	
人間関係構築力 Relationship building ability 他者を理解し、共感する	他者の考えや意見を尊重するとともに、自分の言動にも責任を持ちながら、好ましい人間関係を構築することができる。	他者とのコミュニケーションをとることができ、他者の考えや意見を聞き、理解し共感を得ることができる。	他者とのコミュニケーションをとることができ、他者の考えや意見を聞くことができる。	他者とのコミュニケーションをとることができる。	他者とのコミュニケーションをとることができない	
実践力 Practical ability 自他の考えに基づき実践する	目的や目標に対して適切な計画を立て実践・評価している。さらに他人の意見を取り入れながら、周囲を巻き込んで行動できる	目的や目標を設定しており、具体的な計画を立ててそれを実践し、さらに目標達成度合いを適切に評価している。	目的や目標を設定しており、具体的な計画を立ててそれを実践している	目的や目標を設定しているが、具体的な計画がなく、実践できていない	目的や目標がなく、場当たり的な行動をしている	
創造力・将来設計力 Creativity 課題解決の方法を模索する	現状と課題を把握し、より目的にあった具体的な手段を踏まえ、将来のあるべき姿を創造し、他者へ提案することができる	現状の把握と課題を理解しており、改善する方法や手段などより目的に合った具体的な手段を他者へ提案することができる	現状の把握と課題を理解しており、改善する方法や手段はないか考えることができる	現状の把握ができており、与えられた課題を正しく理解できている	現状の把握ができておらず、与えられた課題を正しく理解できない	
先見力 Foresight 未来（結果）を考え予測する	物事や行動の結果について、過去と現在の因果関係を理解し、本質を見出したうえで、未来の姿を予測（見通せる）できる	物事や行動の結果について、過去の経験と現在の状況との因果関係を理解し、本質を見出している	物事や行動の結果について、過去の経験と現在の状況を踏まえて考えることができる	物事や行動の結果を、考える習慣が身についている	物事や行動の結果を、考える習慣がない	
マネジメント力 Management 新しい仕組を自ら計画立案する	状況を整理し、問題点や課題点を分析し、新しい仕組や方向性について自ら計画・立案し、他人に伝えるこいとができる	状況を整理し、問題点や課題を他人に伝えることができる	観察した現状から、問題点や課題を考えようとすることができる	今置かれている現状や立場を客観的に観察することができる	今置かれている現状や立場を客観的に観察することができない	
多文化協働力 Multicultural Collaboration 多文化を理解し協働する	異なる文化、価値観を持っている人々とコミュニケーションをとることにより、多文化・異文化理解を図っている	地域の文化のみならず、多様な国や地域などの異なる文化への興味関心を持っている	地域の文化や伝統に興味関心を持っており、自ら進んで地域の文化的活動に参加している	地域の文化や伝統に興味関心を持っている	地域の文化や伝統に興味関心がない	

S：5点　A：4点　B：3点　C：2点　D：1点

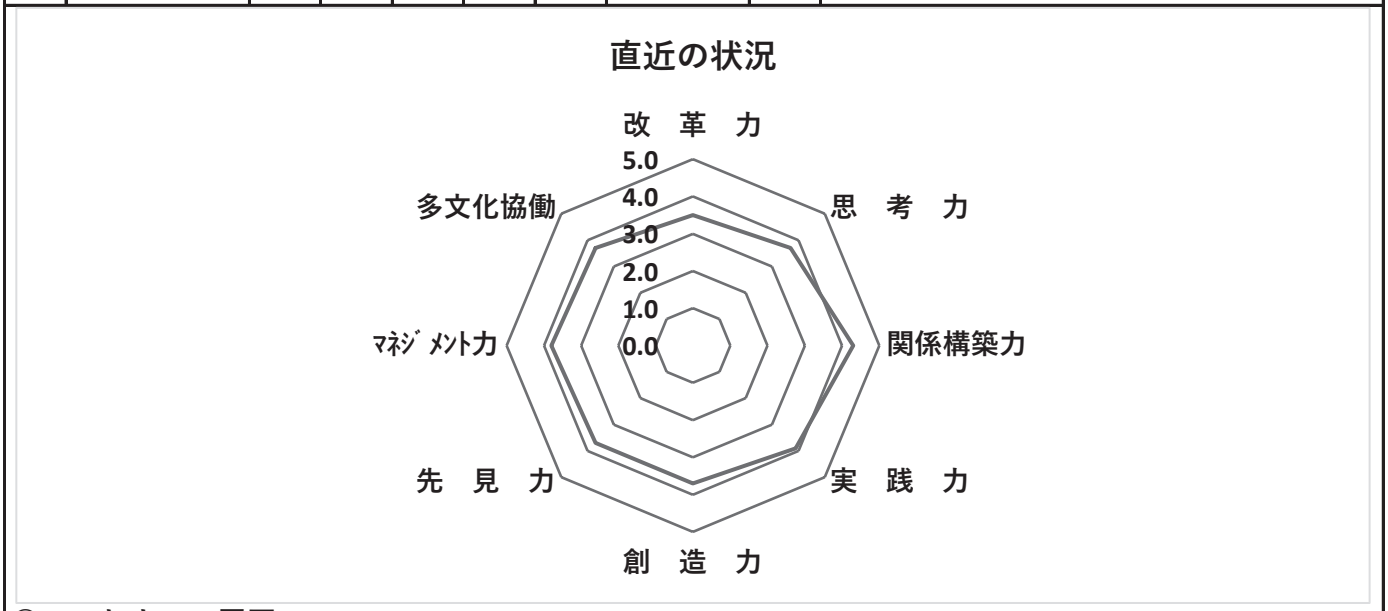
（　　）科（　　）年　No（　　）　氏名（　　）　　／40点

表６－２②　金農ValueRublic自己評価平均値

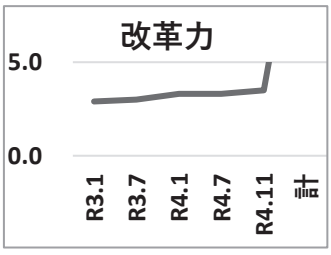
３年　全学科　Average

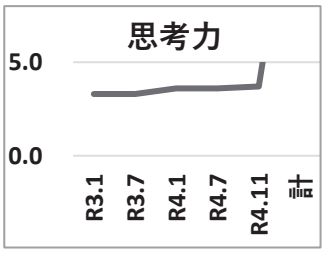
◎　自己評価表

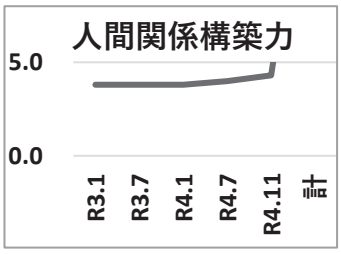
身に付けさせたい力		R3.1	R3.7	R4.1	R4.7	R4.11	計	最高値	３年間の変容
1	改　革　力	2.9	3.0	3.3	3.3	3.5	16.0	3.5	0.6ポイントの上昇
2	思　考　力	3.3	3.3	3.6	3.6	3.7	17.5	3.7	0.4ポイントの上昇
3	関係構築力	3.8	3.8	3.8	4.0	4.3	19.7	4.3	0.5ポイントの上昇
4	実　践　力	3.0	3.1	3.3	3.4	3.9	16.7	3.9	0.9ポイントの上昇
5	創　造　力	3.1	3.2	3.5	3.4	3.7	16.9	3.7	0.6ポイントの上昇
6	先　見　力	3.2	3.2	3.5	3.4	3.7	17	3.7	0.5ポイントの上昇
7	ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ力	3.2	3.2	3.3	3.3	3.8	16.8	3.8	0.6ポイントの上昇
8	多文化協働	2.9	3.0	3.2	3.2	3.7	16	3.7	0.8ポイントの上昇

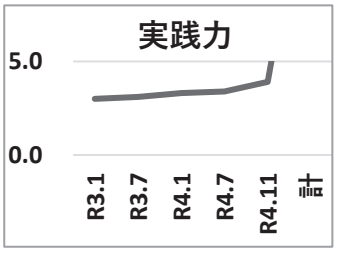


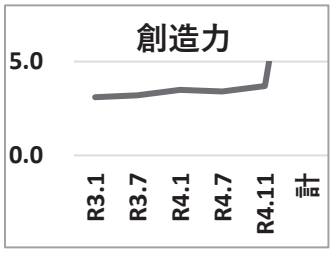
◎　これまでの履歴

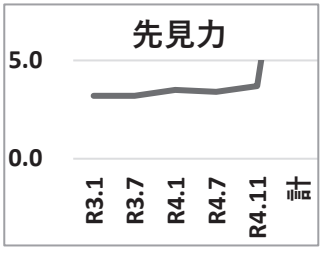


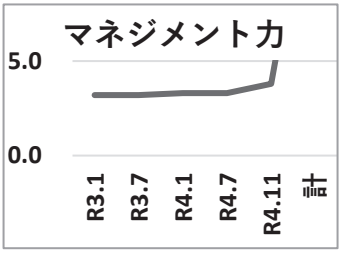












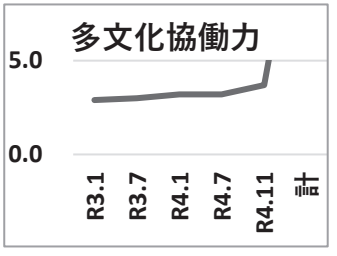


表6－4　R4年度　金農版GKH（Gross Kanano Happiness金農総幸福量）指標	
心理的な幸福	1　あなたは、いまの生活に「幸せ」や「豊かさ」を感じていますか
	2　一日の大半を「穏やかな気持ち」で過ごせてると感じていますか
	3　一日の大半を「思いやりの気持ち」を持って過ごせていると感じていますか
	4　友人や家族などを含めて、他者の幸せや喜びを、自分の幸せや喜びとして感じていますか
自然環境	5　お住まいの地域の町並み（景観や緑）は良いと感じますか
	6　秋田県のシンボル木、もしくはお住まいの市町村のシンボル木を知っていますか
	7　秋田県のシンボル花、もしくはお住まいの市町村のシンボル花を知っていますか
	8　あなたは節電やゴミの減量など環境に配慮した生活をしていると感じますか
健康福祉生活	9　体を動かしたり運動をしたりすることができていると感じていますか
	10　毎日3食を摂るなど、健康的な食生活を送れていると感じていますか
	11　孤立感や孤独感を感じることなく生活ができていると思いますか
	12　心が安らぐ時間を持つことができていると感じていますか
	13　お住まいの地域に、安心して通うことができる医療機関が充実していると感じますか
	14　インフルエンザやコロナなどのウイルスがどのように人へ感染するか知っていますか
	15　心身共に健康な生活を送れていると感じていますか
教育	16　あなたはいま満足のいく教育を受けていると感じていますか
	17　難しいことや分からないことでも、失敗を恐れず挑戦しよう・挑戦したいと思っていますか
	18　あなたは農業（各学科の学び）に興味や関心を持って授業を受けていると感じていますか
	19　この地域に農業高校は必要だと感じていますか
	20　秋田県に学びたい学部や分野のある高等教育機関（大学・短大等）があると感じていますか
地域産業文化	21　お住まいの地域にある農業や、企業（関連産業）は「元気で活力がある」と感じていますか
	22　お住まいの地域は、地域外から人が訪れたくなる「魅力のあるまち」だと感じていますか
	23　お住まいの地域文化や伝統、特色に「愛着や誇り」を感じていますか
	24　お住まいの地域に「頼れる大人」がいると感じていますか
	25　社会や地域のルール・規律を守ることは重要だと感じていますか
	26　OBや地域住民など、身近に全力で応援してくれる大人がいると感じていますか
	27　自ら地域の課題を発見して、解決に向け意欲的に取り組みたいと感じていますか
	28　自分が関わることで「社会や、地域を変えられるかもしれない」と感じていますか
	29　自ら地域の問題や課題に積極的に関わり、行動したいと思いますか
	30　この1年で、自分の暮らす地域を外からの視点で考える機会が増えたと思いますか。
	31　将来、自分の住んでいる地域のために役立ち、地域のために貢献したいと思いますか
	32　地域にある伝統や技能、文化を引き継ぎ、後世へ残すことは大切だと思いますか
	33　この1年間、地域で実施された文化活動、ボランティアや、募金活動等に参加しましたか
	34　高校もしくは大学卒業後に、農業または関連産業に従事（就職）したいと思いますか
	35　地域の新たな魅力を再発見し、地域（秋田県内）に定住したいと思っていますか
時間の使い方	36　あなたの一日の学習時間（学校での学習時間は6時間未満とみなす）は何時間ですか
	37　あなたの一日の睡眠時間は何時間ですか
	38　休日は勉強や部活動、友人との交流、地域活動等で有効に過ごせていると感じますか
コミュニティの活力	39　あなたの住んでいる地域は、隣人同士のコミュニティ、助け合いができていると感じますか
	40　あなたの友人はあなたにとって何でも話せる安らぎの存在だと感じていますか
	41　あなたの家族はあなたにとって何でも話せる安らぎの存在だと感じていますか
	42　あなたが困っているとき、あなたを助けてくれる存在がいると感じていますか
良い統治	43　あなたは中央省庁（日本政府や日本の政治）をどの程度信頼していますか
	44　あなたは秋田県行政をどの程度信頼していますか
	45　あなたは学校（先生）をどの程度信頼していますか
	46　あなたはメディア（マスコミ）をどの程度信頼していますか
安心・安全	47　お住まいの地域で、犯罪の不安を感じることなく生活が送れていると感じていますか
	48　お住まいの地域で、交通事故の危険性を感じることなく生活が送れていると感じますか
	49　災害時に近隣の人と助け合う関係性がつくられていると感じていますか
	50　あなたの地域は、犯罪や事故、災害等を総合的にみて安心・安全な地域だと感じていますか

設問尺度	A（5ポイント）	B（3ポイント）	C（1ポイント）	D（0ポイント）	肯定的割合
1	感じる(74%)	やや感じる(24%)	あまり感じない(2%)	感じない(0%)	98%
2	感じる(70%)	やや感じる(26%)	あまり感じない(4%)	感じない(0%)	96%
3	感じる(67%)	やや感じる(31%)	あまり感じない(2%)	感じない(0%)	98%
4	感じる(76%)	やや感じる(23%)	あまり感じない(0%)	感じない(1%)	99%
5	感じる(68%)	やや感じる(27%)	あまり感じない(5%)	感じない(0%)	95%
6	知っている(66%)			知らない(34%)	66%
7	知っている(52%)			知らない(48%)	52%
8	感じる(37%)	やや感じる(42%)	あまり感じない(19%)	感じない(2%)	79%
9	感じる(61%)	やや感じる(27%)	あまり感じない(9%)	感じない(3%)	88%
10	感じる(75%)	やや感じる(17%)	あまり感じない(6%)	感じない(2%)	92%
11	思う(73%)	やや思う(21%)	あまり思わない(4%)	思わない(2%)	94%
12	感じる(74%)	やや感じる(23%)	あまり感じない(2%)	感じない(1%)	97%
13	感じる(76%)	やや感じる(18%)	あまり感じない(3%)	感じない(3%)	94%
14	知っている(81%)	やや知っている(15%)	あまり知らない(4%)	知らない(0%)	96%
15	感じる(66%)	やや感じる(29%)	あまり感じない(4%)	感じない(1%)	95%
16	感じる(74%)	やや感じる(22%)	あまり感じない(3%)	感じない(1%)	96%
17	思う(56%)	やや思う(37%)	あまり思わない(6%)	思わない(1%)	93%
18	感じる(57%)	やや感じる(36%)	あまり感じない(6%)	感じない(1%)	93%
19	感じる(87%)	やや感じる(13%)	あまり感じない(0%)	感じない(0%)	100%
20	感じる(38%)	やや感じる(31%)	あまり感じない(20%)	感じない(11%)	69%
21	感じる(46%)	やや感じる(45%)	あまり感じない(7%)	感じない(2%)	91%
22	感じる(40%)	やや感じる(37%)	あまり感じない(20%)	感じない(3%)	77%
23	感じる(56%)	やや感じる(37%)	あまり感じない(6%)	感じない(1%)	93%
24	感じる(64%)	やや感じる(30%)	あまり感じない(6%)	感じない(0%)	94%
25	感じる(85%)	やや感じる(14%)	あまり感じない(1%)	感じない(0%)	99%
26	感じる(69%)	やや感じる(27%)	あまり感じない(3%)	感じない(1%)	96%
27	感じる(44%)	やや感じる(42%)	あまり感じない(11%)	感じない(3%)	86%
28	感じる(36%)	やや感じる(34%)	あまり感じない(22%)	感じない(8%)	70%
29	思う(39%)	やや思う(43%)	あまり思わない(15%)	思わない(3%)	82%
30	思う(49%)	やや思う(32%)	あまり思わない(15%)	思わない(4%)	81%
31	思う(60%)	やや思う(32%)	あまり思わない(5%)	思わない(3%)	92%
32	思う(75%)	やや思う(23%)	あまり思わない(2%)	思わない(0%)	98%
33	ある(52%)			ない(48%)	52%
34	思う(36%)	やや思う(19%)	あまり思わない(20%)	思わない(25%)	55%
35	思う(54%)	やや思う(29%)	あまり思わない(11%)	思わない(6%)	83%
36	8時間以上(6%)	7時間以上8時間未満(9%)	6時間以上7時間未満(33%)	6時間未満(52%)	48%
37	8時間以上(15%)	7時間以上8時間未満(25%)	6時間以上7時間未満(40%)	6時間未満(20%)	80%
38	感じる(74%)	やや感じる(19%)	あまり感じない(4%)	感じない(3%)	93%
39	感じる(61%)	やや感じる(24%)	あまり感じない(12%)	感じない(3%)	85%
40	感じる(78%)	やや感じる(20%)	あまり感じない(1%)	感じない(1%)	98%
41	感じる(76%)	やや感じる(20%)	あまり感じない(3%)	感じない(1%)	96%
42	感じる(82%)	やや感じる(16%)	あまり感じない(1%)	感じない(1%)	98%
43	信頼している(28%)	ややしている(44%)	あまりしていない(23%)	信頼していない(5%)	72%
44	信頼している(25%)	ややしている(54%)	あまりしていない(18%)	信頼していない(4%)	79%
45	信頼している(47%)	ややしている(46%)	あまりしていない(4%)	信頼していない(3%)	93%
46	信頼している(16%)	ややしている(51%)	あまりしていない(28%)	信頼していない(5%)	67%
47	感じる(67%)	やや感じる(30%)	あまり感じない(3%)	感じない(0%)	97%
48	感じる(61%)	やや感じる(33%)	あまり感じない(5%)	感じない(1%)	94%
49	感じる(59%)	やや感じる(25%)	あまり感じない(14%)	感じない(2%)	84%
50	感じる(63%)	やや感じる(33%)	あまり感じない(1%)	感じない(3%)	96%

3年（　　）科（　）番　氏名（　　）

Portfolio of sustainable education and community

高校魅力化評価システム　組織診断ポートフォリオ

高校名	秋田県立金足農業高等学校										
年度	2022年度										
回答者数	生徒・学生	156（内訳）	1年生	0	2年生	0	3年生	156	4年生	0	5年生	0
	（昨年度）	142（内訳）	1年生	0	2年生	142	3年生	0	4年生	0	5年生	0
	大人	33（内訳）	教職員	31	（昨年度）		大人	11	（内訳）教職員	10		

【 MEMO】

教育目標、育てたい生徒像など

How to read　結果の読み取り方

このポートフォリオでは、以下の5 側面、4 領域、3 軸により、高校と地域の学びの「 いま」と「 変化」を読み取ることができます。

5 つの側面を　➡ 各校・地域の状態を、「 ①学習活動」「 ②学習環境」「 ③生徒の自己能力認識」「 ④生徒の行動実績」「 ⑤ウェルビーイング」の5 つから 把握しています。
4 つの領域から　➡ 各設問を「 主体性」「 協働性」「 探究性」「 社会性」の4 つの資質・能力に関する領域に分類しています。
3 つの軸で　➡ 上記のデータを「 時間軸（ 前年度からの伸び）」「 学年軸（ 学年による違い）」「 地域軸（ 他地域との比較）」の3 つの軸で整理しています。

結果に出てくる数字や言葉は次の意味を表しています。

【 割合（ %）】　➡ 各項目で「 4 . あてはまる」「 3 . どちらかといえばあてはまる」という 肯定的回答をした割合
【 平均】　➡「 あてはまらない＝1 」～「 あてはまる＝4 」の回答の平均値
【 他地域】　➡ 同じ 機会に調査を実施した他校の回答の平均値
【 回答上昇者の割合】　➡（ 個人IDで紐づけを行い、複数回調査を実施した場合に表示）前年と 比べて、各領域の回答平均値が上がった回答者の、全回答者に占める割合

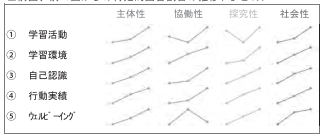
Summary　総括表

■今回の結果（ まとめ）

	主体性	協働性	探究性	社会性
① 学習活動	3	4	3	3
② 学習環境	4	4	4	4
③ 自己認識	4	4	4	4
④ 行動実績	4	4	4	2
⑤ ウェルビーイング	4	4	4	4

※肯定的回答割合が50%未満=1,50~65%=2,65%~80%=3,80%以上=4

■前回、前々回からの肯定的回答割合の推移（ まとめ）



※左から 前々回、前回、今回。非受検回もグラフに表示されるため読み取り 注意。

■強み・ 伸びしろ

	強み：肯定的回答割合が最も 高い項目		伸びしろ：肯定的回答割合が最も 低い項目	
①	学習活動	86.5%	グループで協力しながら学習や調べものを 行う	64.7%
②	学習環境	96.8%	自分が何かに挑戦しようと 思ったとき、周りは 手を 差し 伸べてくれる	77.6%
③	自己認識	97.4%	相手の意見を 丁寧に聞くことができる	67.3%
④	行動実績	87.2%	授業で分からないことを、自分から 質問したり、分かる人に聞いた	55.1%
⑤	ｳｪﾙﾋﾞｰｲﾝｸﾞ	97.4%	自分の将来に向けて大切だと 思うことを実行している	67.9%

■総合的な生徒の満足度

	満足度
生活全般の満足度（ 0~10で6以上）	88.5%
前回、前々回からの推移	
高校に対する満足度	96.8%
前回、前々回からの推移	
この学校を 中学生におすすめできる	94.2%

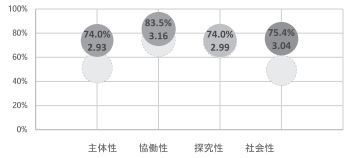
■総合的な大人の満足度

	満足度
この地域を将来暮らす 場所として おすすめできる	84.8%
この学校に関わってよかった	100.0%
この学校を 中学生におすすめできる	93.9%

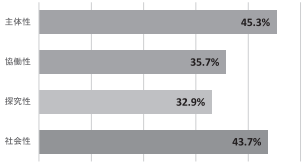
※非受検回もグラフに表示されるため読み取り 注意。

①学習活動（ 明示的なカリキュラム）

■今回の結果



■前回調査時からの変化（ 回答上昇者の割合）

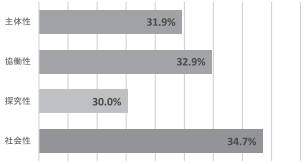


※上段の数値（ %：縦軸）が肯定的回答割合、下段の数値が平均値

②学習環境（ 学びの土壌：非明示的なカリキュラム）

■今回の結果

■前回調査時からの変化（ 回答上昇者の割合）

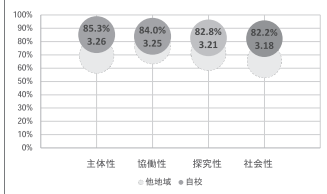


【 学習活動】【 学習環境】読み取り・ 検討の視点

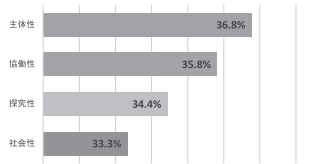
- 自校の強みや課題、それを 増進／克服するための、協働のあり 方は？
- 普段から 意識して取り 組んでいる活動の機会や環境づくりは？その成果は出ていそうか？
- 協働を 支えるコーディネート 機能として、どのような 役割が必要か？

③自己認識（ 資質・ 能力の主観的認識）

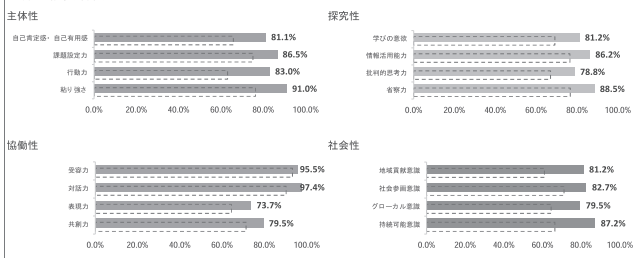
■今回の結果



■前回調査時からの変化（ 回答上昇者の割合）



■今回の結果（ 詳細）



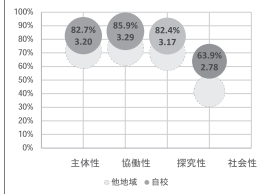
※点線は他地域における 肯定的回答割合

【 生徒の自己認識】読み取り・ 検討の視点

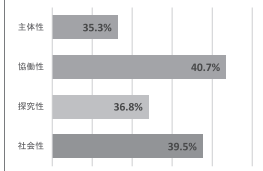
- 普段から 意識している、育てたい生徒像や、身につけさせたい力に関する指標の結果は？
- 前回からの変化は？その要因として、何が考えられそうか？（ 学習活動、学習環境と 関連付けて）
- 今後、意識して伸ばしていきたいと考える 力は？そのために必要な「 次の一手」は？

④行動実績（ 資質・ 能力の発揮）

■今回の結果



■前回調査時からの変化（ 回答上昇者の割合）

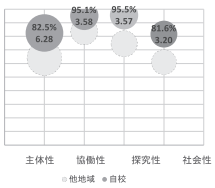


【 生徒の行動実績】読み取り・ 検討の視点

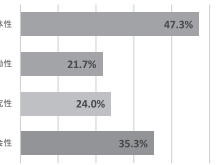
- 生徒に期待する具体的な行動は？
  生徒の自己認識との 関連は？
- 具体的な行動を 促すような、学習活動や
  学習環境づくりはできているか？

⑤ウェルビーイング

■今回の結果



■前回調査時からの変化（ 回答上昇者の割合）

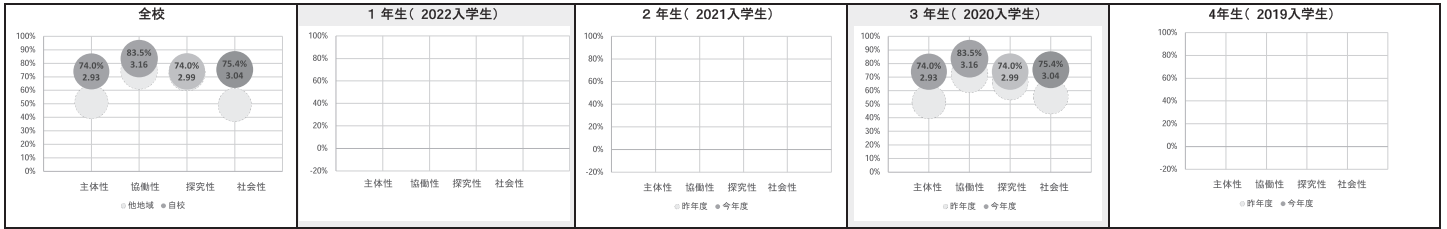


【 ウェルビーイング】読み取り・ 検討の視点

- 学習環境や大人のあり 方との関係は？
  生徒の資質能力との 関連は？
- ウェルビーイングの観点を 学校目標に
  どう 位置づけていくか？

Details 詳細結果

① 学習活動（ 明示的なカリキュラム）

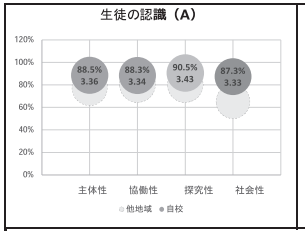


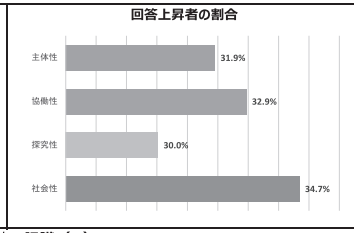
● 10pt以上の増加 ● 0~10ptの増加 ● 減少

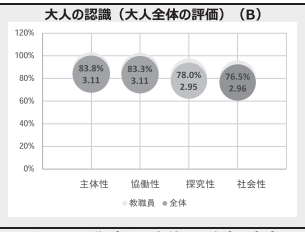
	全校				1 年生（2022入学生）			2 年生（2021入学生）			3 年生（2020入学生）			4年生（2019入学生）			
	全体		昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年次との差	学年	3年次との差	2年次との差	1年次との差
	割合(%)		差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合（ %）	差(pt)	割合(%)	割合（ %）	差(pt)	差(pt)	割合（ %）	差(pt)	割合(%)	割合(%)
主体性に関わる学習活動	74.0%		22.28	22.69	-	-	-	-	-	-	74.0%	22.28	28.06	-	-	-	-
5 自主的に調べものや取材を行う	83.3%		17.84	12.57	-	-	-	-	-	-	83.3%	17.84	25.29	-	-	-	-
6 学校外のいろいろな人に話を聞きに行く	64.7%		26.72	32.81	-	-	-	-	-	-	64.7%	26.72	30.84	-	-	-	-
協働性に関わる学習活動	83.5%		11.48	9.10	-	-	-	-	-	-	83.5%	11.48	7.11	-	-	-	-
7 グループで協力しながら学習や調べものを行う	86.5%		8.37	3.55	-	-	-	-	-	-	86.5%	8.37	0.33	-	-	-	-
8 活動、学習内容について生徒同士で話し合う	86.5%		2.03	-1.94	-	-	-	-	-	-	86.5%	2.03	-4.84	-	-	-	-
9 活動、学習内容について大人（ 教員や地域の大人）と話し合う	77.6%		24.04	25.70	-	-	-	-	-	-	77.6%	24.04	25.84	-	-	-	-
探究性に関わる学習活動	74.0%		7.67	0.94	-	-	-	-	-	-	74.0%	7.67	1.77	-	-	-	-
10 自分の考えを文章や図表にまとめる	67.3%		7.45	-3.26	-	-	-	-	-	-	67.3%	7.45	4.66	-	-	-	-
11 話し合った内容をまとめる	84.6%		9.26	4.71	-	-	-	-	-	-	84.6%	9.26	-1.02	-	-	-	-
12 活動、学習のまとめを発表する	71.2%		8.48	0.93	-	-	-	-	-	-	71.2%	8.48	3.34	-	-	-	-
13 生徒同士で活動、学習の振り返りを行う	73.1%		5.47	1.37	-	-	-	-	-	-	73.1%	5.47	0.09	-	-	-	-
社会性に関わる学習活動	75.4%		19.79	26.29	-	-	-	-	-	-	75.4%	19.79	26.77	-	-	-	-
14 地域の魅力や資源について考える	79.5%		23.85	34.87	-	-	-	-	-	-	79.5%	23.85	23.74	-	-	-	-
15 地域の課題の解決方法について考える	77.6%		22.63	29.49	-	-	-	-	-	-	77.6%	22.63	25.27	-	-	-	-
16 日本や世界の課題の解決方法について考える	69.2%		12.89	14.51	-	-	-	-	-	-	69.2%	12.89	31.30	-	-	-	-

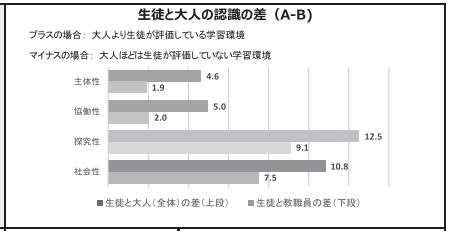
※3年生、4年生の「回答上昇者率」は「上昇率」シートで確認いただけます

② 学習環境（学びの土壌：非明示的なカリキュラム）









● 10pt以上の増加 ● 0~10ptの増加 ● 減少

	生徒の認識（A）									大人の認識（大人全体の評価）（B）				生徒と大人の認識の差（A-B）		
	全体	昨年度との差	他地域との差	全体	学年別					全体	昨年度との差	うち教職員	昨年度との差	生徒と大人（全体）	生徒と教職員	
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	回答上昇者	1年生	2年生	3年生	4年生		割合(%)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	差(pt)	大人質問項目
主体性に関わる学習環境	88.5%	5.58	10.98	31.9%	-	-	88.5%	-		83.8%	3.03	86.6%	7.87	4.6pt	1.9pt	
20 失敗してもよいという安全・安心な雰囲気がある	91.0%	12.15	13.70	34.9%	-	-	91.0%	-		75.8%	-6.06	77.4%	-2.58	15.3pt	13.6pt	5 失敗を恐れずに挑戦することができている
21 挑戦する人に対して、応援する雰囲気がある	93.6%	2.04	2.82	31.0%	-	-	93.6%	-		93.9%	3.03	96.8%	6.77	-0.3pt	-3.2pt	13 挑戦する人に対して、応援することができている
33 目標や当事者意識を持って挑戦している人がいる	91.0%	0.88	9.20	31.8%	-	-	91.0%	-		84.8%	3.03	87.1%	7.10	6.2pt	3.9pt	6 目標や当事者意識を持って挑戦することができている
34 地域に、尊敬している・憧れている大人がいる	77.6%	5.73	22.24	34.9%	-	-	77.6%	-		-	-	-	-	-	-	-
30 人の挑戦に関わらせてもらえる機会がある	82.1%	8.81	18.72	31.0%	-	-	82.1%	-		60.6%	-12.12	64.5%	-5.48	21.4pt	17.5pt	7 自身の挑戦に、周囲を巻き込もうとしている
26 自分が何かに挑戦しようと思ったとき、周りは手を差し伸べてくれる	96.8%	3.84	7.42	27.9%	-	-	96.8%	-		90.9%	27.27	93.5%	33.55	5.9pt	3.2pt	14 誰かが何かに挑戦しようと思ったとき、手を差し伸べている
35 周りの大人は、自分に関わることについて自分で決めることを尊重してくれる	93.6%	-	6.97	-	-	-	93.6%	-		97.0%	-	100.0%	-	-3.4pt	-6.4pt	22 子どもの自己決定を尊重できている
36 生徒の意見が学校での意思決定に反映される雰囲気がある	82.1%	-	6.78	-	-	-	82.1%	-		-	-	-	-	-	-	-
協働性に関わる学習環境	88.3%	4.15	8.00	32.9%	-	-	88.3%	-		83.3%	6.06	86.3%	11.29	5.0pt	2.0pt	
22 人と違うことが尊重される雰囲気がある	87.8%	8.24	7.24	28.7%	-	-	87.8%	-		81.8%	9.09	83.9%	13.87	6.0pt	3.9pt	8 人と違うこと、異なった意見を尊重している
23 ありのままの自分が尊重される雰囲気がある	91.7%	7.86	8.55	38.0%	-	-	91.7%	-		81.8%	-9.09	87.1%	-2.90	9.8pt	4.6pt	9 ありのままの個人を尊重している
27 自分と異なる立場や役割を持つ人との関わりがある	88.5%	-3.09	4.51	30.2%	-	-	88.5%	-		84.8%	12.12	87.1%	17.10	3.6pt	1.4pt	15 自分と異なる立場や役割を持つ人と交流している
28 立場や役割を超えて協働する機会がある	85.3%	3.57	11.68	34.9%	-	-	85.3%	-		84.8%	12.12	87.1%	17.10	0.4pt	-1.8pt	16 立場や役割を超えて協働している
探究性に関わる学習環境	90.5%	4.45	10.26	30.0%	-	-	90.5%	-		78.0%	12.12	81.5%	18.95	12.5pt	9.1pt	
17 本音を気兼ねなく発言できる雰囲気がある	90.4%	11.51	7.77	34.1%	-	-	90.4%	-		75.8%	21.21	77.4%	27.42	14.6pt	13.0pt	10 本音を気兼ねなく発言できる
18 将来のことや実現したいことを話し合える大人がいる	95.5%	5.37	16.76	28.7%	-	-	95.5%	-		72.7%	9.09	74.2%	14.19	22.8pt	21.3pt	11 地域に、将来のことや実現したいことを話し合える人がいる
24 周りの大人は、じっくりと話を聞き、考える手助けをしてくれる	92.3%	0.05	6.41	25.6%	-	-	92.3%	-		87.9%	6.06	93.5%	13.55	4.4pt	-1.2pt	17 生徒に対してじっくりと話を聞き、考える手助けができている
31 お互いに問いかけあう機会がある	84.0%	0.88	10.12	31.8%	-	-	84.0%	-		75.8%	12.12	80.6%	20.65	8.2pt	3.3pt	18 お互いに問いかけあう機会がある
社会性に関わる学習環境	87.3%	6.71	22.13	34.7%	-	-	87.3%	-		76.5%	-7.58	79.8%	-2.66	10.8pt	7.5pt	
19 地域から大切にされている雰囲気を感じる	95.5%	8.19	19.81	28.7%	-	-	95.5%	-		75.8%	-15.15	80.6%	-9.35	19.8pt	14.9pt	21 地域で生徒を育てるという意識を持っている
25 興味を持ったことに対してすぐに橋渡しをしてくれる大人がいる	90.4%	7.29	16.50	38.0%	-	-	90.4%	-		87.9%	-12.12	90.3%	-9.68	2.5pt	0.1pt	19 生徒の関心に合わせて、機会を提供できている
29 地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	84.6%	5.74	28.29	37.2%	-	-	84.6%	-		66.7%	-6.06	71.0%	0.97	17.9pt	13.6pt	20 地域の人や課題などにじかに触れる機会を持てている
32 自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会がある	78.8%	5.61	23.93	34.9%	-	-	78.8%	-		75.8%	3.03	77.4%	7.42	3.1pt	1.4pt	12 自分の暮らす地域を外からの視点で考える機会を持てている

③ 生徒の自己認識（ 資質・ 能力の主観的認識）

● 10pt以上の増加 ● 0~10ptの増加 ● 減少

	全校			1 年生（2022入学生）			2 年生（2021入学生）			3 年生（2020入学生）			4年生（2019入学生）			
	全体	昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1 年次との差	回答上昇者	学年	2 年次との差	1年次との差	学年	3年次との差	2年次との差	1年次との差
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合（ %）	差(pt)	割合(%)	割合（ %）	差(pt)	差(pt)	割合（ %）	差(pt)	差(pt)	差(pt)
主体性に関わる自己認識	85.3%	9.90	15.93	-	-	-	-	-	-	85.3%	9.90	16.62	-	-	-	-
【自己肯定感・自己有用感】	81.1%	11.37	15.30	-	-	-	-	-	-	81.1%	11.37	19.02	-	-	-	-
51 自分にはよいところがあると思う	88.5%	8.88	12.16	-	-	-	-	-	-	88.5%	8.88	10.30	-	-	-	-
52 私は、自分自身に満足している	73.7%	13.86	18.44	-	-	-	-	-	-	73.7%	13.86	27.74	-	-	-	-
【課題設定力】	86.5%	9.78	11.49	-	-	-	-	-	-	86.5%	9.78	18.72	-	-	-	-
39 現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる	86.5%	9.78	11.49	-	-	-	-	-	-	86.5%	9.78	18.72	-	-	-	-
【行動力】	83.0%	11.53	19.95	-	-	-	-	-	-	83.0%	11.53	18.65	-	-	-	-
40 目標を設定し、確実に行動することができる	82.7%	12.27	20.28	-	-	-	-	-	-	82.7%	12.27	16.03	-	-	-	-
53 自分で計画を立てて活動することができる	83.3%	10.80	19.63	-	-	-	-	-	-	83.3%	10.80	21.26	-	-	-	-
【粘り強さ】	91.0%	6.87	14.75	-	-	-	-	-	-	91.0%	6.87	11.14	-	-	-	-
37 うまくいか分からないことにも意欲的に取り組む	90.4%	4.47	11.14	-	-	-	-	-	-	90.4%	4.47	8.78	-	-	-	-
47 忍耐強く物事に取り組むことができる	91.7%	9.27	18.35	-	-	-	-	-	-	91.7%	9.27	13.51	-	-	-	-
協働性に関わる自己認識	84.0%	9.33	7.28	-	-	-	-	-	-	84.0%	9.33	10.99	-	-	-	-
【受容力】	95.5%	1.85	2.28	-	-	-	-	-	-	95.5%	1.85	2.98	-	-	-	-
43 自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	95.5%	1.85	2.28	-	-	-	-	-	-	95.5%	1.85	2.98	-	-	-	-
【対話力】	97.4%	5.89	7.21	-	-	-	-	-	-	97.4%	5.89	7.21	-	-	-	-
42 相手の意見を丁寧に聞くことができる	97.4%	5.89	7.21	-	-	-	-	-	-	97.4%	5.89	7.21	-	-	-	-
【表現力】	73.7%	17.03	9.37	-	-	-	-	-	-	73.7%	17.03	17.40	-	-	-	-
49 自分の考えをはっきり相手に伝えることができる	80.1%	16.75	9.98	-	-	-	-	-	-	80.1%	16.75	12.31	-	-	-	-
50 友達の前で自分の意見を発表することは得意だ	67.3%	17.31	8.76	-	-	-	-	-	-	67.3%	17.31	22.48	-	-	-	-
【共創力】	79.5%	4.84	8.19	-	-	-	-	-	-	79.5%	4.84	9.95	-	-	-	-
44 共同作業だと、自分の力が発揮できる	79.5%	4.84	8.19	-	-	-	-	-	-	79.5%	4.84	9.95	-	-	-	-
探究性に関わる自己認識	82.8%	9.00	11.39	-	-	-	-	-	-	82.8%	9.00	17.20	-	-	-	-
【学びの意欲】	81.2%	8.43	12.04	-	-	-	-	-	-	81.2%	8.43	14.53	-	-	-	-
38 家や塾で、誰かに言われなくても自分から勉強する	75.6%	6.63	2.91	-	-	-	-	-	-	75.6%	6.63	7.25	-	-	-	-
61 地域を対象とした課題探究学習に熱心に取り組んでいる	75.0%	16.55	22.02	-	-	-	-	-	-	75.0%	16.55	27.87	-	-	-	-
67 学習を通じて、自分がしたいことが増えている	92.9%	2.10	11.18	-	-	-	-	-	-	92.9%	2.10	8.47	-	-	-	-
【情報活用能力】	86.2%	6.64	9.71	-	-	-	-	-	-	86.2%	6.64	15.82	-	-	-	-
45 情報を、勉強したことと関連づけて理解できる	89.1%	6.71	5.91	-	-	-	-	-	-	89.1%	6.71	13.24	-	-	-	-
46 勉強したものを実際に応用してみる	83.3%	6.57	13.50	-	-	-	-	-	-	83.3%	6.57	18.39	-	-	-	-
【批判的思考力】	78.8%	12.77	11.88	-	-	-	-	-	-	78.8%	12.77	29.71	-	-	-	-
41 複雑な問題を順序立てて考えることが得意だ	70.5%	12.77	17.31	-	-	-	-	-	-	70.5%	12.77	29.71	-	-	-	-
54 一つ二つの立場だけでなく、できるだけ多くの立場から考えようとする	87.2%	-	6.46	-	-	-	-	-	-	87.2%	-	-	-	-	-	-
【省察力】	88.5%	11.70	11.81	-	-	-	-	-	-	88.5%	11.70	15.47	-	-	-	-
48 自分を客観的に理解することができる	88.5%	11.70	11.81	-	-	-	-	-	-	88.5%	11.70	15.47	-	-	-	-
社会性に関わる自己認識	82.2%	9.11	16.55	-	-	-	-	-	-	82.2%	9.11	24.86	-	-	-	-
【地域貢献意識】	81.2%	11.24	20.23	-	-	-	-	-	-	81.2%	11.24	27.56	-	-	-	-
65 将来の国や地域の担い手として、積極的に政策決定に関わりたい	68.6%	10.84	18.08	-	-	-	-	-	-	68.6%	10.84	34.68	-	-	-	-
56 地域をよりよくするため、地域の問題に関わりたい	84.0%	13.55	19.43	-	-	-	-	-	-	84.0%	13.55	25.35	-	-	-	-
58 将来、自分の住んでいる地域に役に立ちたい	91.0%	9.34	23.18	-	-	-	-	-	-	91.0%	9.34	22.63	-	-	-	-
【社会参画意識】	82.7%	9.92	11.57	-	-	-	-	-	-	82.7%	9.92	27.90	-	-	-	-
57 私が関わることで、社会状況が変えられるかもしれない	73.7%	14.56	17.95	-	-	-	-	-	-	73.7%	14.56	42.11	-	-	-	-
62 地域や社会での問題やできごとに関心がある	85.9%	9.14	13.03	-	-	-	-	-	-	85.9%	9.14	20.95	-	-	-	-
55 18歳選挙権を取得したら、選挙に行くと思う	88.5%	6.07	3.73	-	-	-	-	-	-	88.5%	6.07	20.65	-	-	-	-
【グローカル意識】	79.5%	7.19	15.02	-	-	-	-	-	-	79.5%	7.19	19.91	-	-	-	-
59 地域の課題と世界での課題は関連していると思う	84.6%	5.04	12.47	-	-	-	-	-	-	84.6%	5.04	27.14	-	-	-	-
64 将来、見知らぬ土地でチャレンジしてみたい	72.4%	8.35	-0.92	-	-	-	-	-	-	72.4%	8.35	7.49	-	-	-	-
63 将来、自分のいま住んでいる地域で働きたいと思う	81.4%	8.17	33.50	-	-	-	-	-	-	81.4%	8.17	25.09	-	-	-	-
【持続可能意識】	87.2%	7.60	20.77	-	-	-	-	-	-	87.2%	7.60	23.67	-	-	-	-
60 地域文化や暮らしを、自らの手で未来に伝えたい	79.5%	6.95	20.34	-	-	-	-	-	-	79.5%	6.95	29.49	-	-	-	-
68 自分の将来について明るい希望を持っている	94.9%	8.25	21.21	-	-	-	-	-	-	94.9%	8.25	17.86	-	-	-	-

④ 生徒の行動実績（ 資質・ 能力の発揮）

● 10pt以上の増加 ● 0～10ptの増加 ● 減少

	全校			1 年生（2022入学生）			2 年生（2021入学生）			3 年生（2020入学生）			4年生（2019入学生）			
	全体	昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年次との差	学年	3年次との差	2年次との差	1年次との差
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	割合(%)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	差(pt)
主体性に関わる行動	82.7%	11.21	11.08	-	-	-	-	-	-	82.7%	11.21	28.09	-	-	-	-
71 授業で分からないことを、自分から質問したり、分かる人に聞いた	87.2%	10.42	7.55	-	-	-	-	-	-	87.2%	10.42	14.77	-	-	-	-
74 授業で興味・関心を持った内容について、自主的に調べ物を行った	78.2%	12.01	14.61	-	-	-	-	-	-	78.2%	12.01	41.42	-	-	-	-
協働性に関わる行動	85.9%	13.71	12.12	-	-	-	-	-	-	85.9%	13.71	16.93	-	-	-	-
72 自分の考えについて、様々な人に意見やアドバイスを求めた	86.5%	16.82	13.82	-	-	-	-	-	-	86.5%	16.82	18.15	-	-	-	-
73 友人などから、意見やアドバイスを求められた	85.3%	10.61	10.42	-	-	-	-	-	-	85.3%	10.61	15.72	-	-	-	-
探究性に関わる行動	82.4%	12.65	12.33	-	-	-	-	-	-	82.4%	12.65	30.36	-	-	-	-
75 授業で「なぜそうなるのか」と疑問を持って、考えたり調べたりした	83.3%	12.21	10.73	-	-	-	-	-	-	83.3%	12.21	34.48	-	-	-	-
76 公式やきまりを習う時、その根拠を自分で考えたり調べたりした	81.4%	13.10	13.93	-	-	-	-	-	-	81.4%	13.10	26.24	-	-	-	-
社会性に関わる行動	63.9%	15.06	22.19	-	-	-	-	-	-	63.9%	15.06	29.02	-	-	-	-
69 いま住んでいる地域の行事に参加した	55.1%	20.62	20.19	-	-	-	-	-	-	55.1%	20.62	34.44	-	-	-	-
70 地域社会などでボランティア活動に参加した	55.8%	21.97	25.39	-	-	-	-	-	-	55.8%	21.97	36.23	-	-	-	-
77 先生、保護者以外の地域の大人と、なにげない会話を交わした	80.8%	2.60	20.99	-	-	-	-	-	-	80.8%	2.60	16.40	-	-	-	-

⑤ 学習・ その他

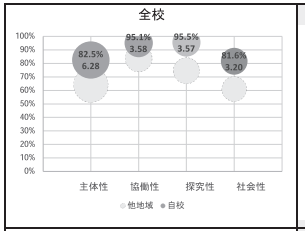
	全校			1 年生（2022入学生）			2 年生（2021入学生）			3 年生（2020入学生）			4年生（2019入学生）			
	全体	昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年次との差	学年	3年次との差	2年次との差	1年次との差
	時間(分)	差(分)	差(分)	時間(分)	差(分)	差(分)	時間(分)	差(分)	割合(%)	時間(分)	差(分)	差(分)	時間(分)	差(分)	差(分)	差(分)
91 平均的な学習時間【平日】	75.29	-	-38.50	-	-	-	-	-	-	75.29	-	-	-	-	-	-
92 平均的な学習時間【休日】	111.15	-	-89.35	-	-	-	-	-	-	111.15	-	-	-	-	-	-

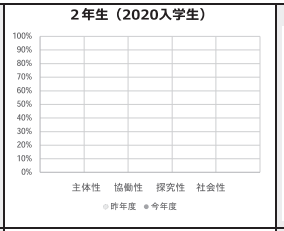
	全校			1 年生（2022入学生）			2 年生（2021入学生）			3 年生（2020入学生）			4年生（2019入学生）			
	全体	昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年次との差	学年	3年次との差	2年次との差	1年次との差
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	割合(%)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	差(pt)
90 この学校を中学生におすすめできる	94.2%	-	13.60	-	-	-	-	-	-	94.2%	-	-	-	-	-	-
78 国際社会の課題解決に貢献したい	75.0%	15.85	12.31	-	-	-	-	-	-	75.0%	15.85	-	-	-	-	-
79 まだ世の中にない新しい技術やサービスを生み出してみたい	73.7%	19.49	13.01	-	-	-	-	-	-	73.7%	19.49	-	-	-	-	-
80 客観的な証拠に基づき考え、判断する科学的視点から課題解決にあたることができる	68.6%	17.18	12.49	-	-	-	-	-	-	68.6%	17.18	-	-	-	-	-

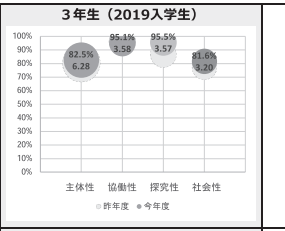
⑥ 大人向け調査

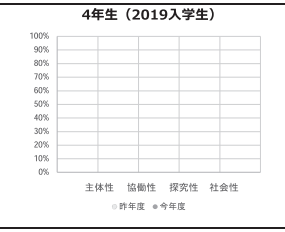
	大人向け調査（ 全回答平均）			大人向け調査(教職員のみ)		
	全体	昨年度との差	他地域との差	全体	昨年度との差	他地域との差
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)
25 この学校を中学生におすすめできる	93.9%	-	6.41	96.8%	-	10.07
26 この学校に関わってよかったと思う	100.0%	-	8.65	100.0%	-	9.32
27 この地域を、将来暮らす場所としておすすめできる	84.8%	-	6.61	87.1%	-	10.54
28 【教職員のみ】地域・社会との協働を通して、授業の質の向上につながっている	90.3%	-	23.46	90.3%	-	23.46
29 【教職員のみ】地域・社会との協働を通して、自身の資質・能力の向上につながっている	83.9%	-	10.02	83.9%	-	10.02
30 【教職員のみ】地域・社会との協働を通して、学習意欲が高まった生徒がいる	93.5%	-	20.33	93.5%	-	20.33
31 【教職員のみ】地域・社会との協働を通して、業務負担感の軽減につながっている	19.4%	-	2.04	19.4%	-	2.04

⑦ 生徒のウェルビーイング









10pt以上の増加　0~10ptの増加　減少

	全校			1 年生（2021入学生）			2 年生（2020入学生）			3 年生（2019入学生）			4年生（2019入学生）			
	全体	昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年次との差	学年	3年次との差	2年次との差	1年次との差
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	割合(%)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	差(pt)
主体性に関わるウェルビーイング	82.5%	8.18	18.52	-	-	-	-	-	-	82.5%	8.18	9.73	-	-	-	-
81 今の生活全般に対する満足度（0~10で評価：6以上の割合）	88.5%	8.18	17.86	-	-	-	-	-	-	88.5%	8.18	9.73	-	-	-	-
82 普段のあなたの幸福度（0~10で評価：6以上の割合）	84.6%	-	14.11	-	-	-	-	-	-	84.6%	-	-	-	-	-	-
83 現在の日常生活に不安や心配事がない	74.4%	-	23.60	-	-	-	-	-	-	74.4%	-	-	-	-	-	-
協働性に関わるウェルビーイング	95.1%	0.32	11.42	-	-	-	-	-	-	95.1%	0.32	1.97	-	-	-	-
66 この学校に入ってよかったと思う	96.8%	0.32	9.62	-	-	-	-	-	-	96.8%	0.32	1.97	-	-	-	-
84 学校の一員だと感じている	96.2%	-	11.00	-	-	-	-	-	-	96.2%	-	-	-	-	-	-
85 大切な人を幸せにしたり、楽しませたりしていると思う	92.3%	-	13.63	-	-	-	-	-	-	92.3%	-	-	-	-	-	-
探究性に関わるウェルビーイング	95.5%	8.25	20.98	-	-	-	-	-	-	95.5%	8.25	17.86	-	-	-	-
68 【再掲】自分の将来について明るい希望を持っている	94.9%	8.25	21.21	-	-	-	-	-	-	94.9%	8.25	17.86	-	-	-	-
86 自分の将来についての見通し（将来こういう風でありたい）を持っている	94.2%	-	18.21	-	-	-	-	-	-	94.2%	-	-	-	-	-	-
87 自分の将来に向けて大切だと思うことを実行している	97.4%	-	23.52	-	-	-	-	-	-	97.4%	-	-	-	-	-	-
社会性に関わるウェルビーイング	81.6%	8.14	20.57	-	-	-	-	-	-	81.6%	8.14	26.06	-	-	-	-
58 【再掲】将来、自分の住んでいる地域に役に立ちたい	91.0%	9.34	23.18	-	-	-	-	-	-	91.0%	9.34	22.63	-	-	-	-
60 【再掲】地域文化や暮らしを、自らの手で未来に伝えたい	79.5%	6.95	20.34	-	-	-	-	-	-	79.5%	6.95	29.49	-	-	-	-
88 この地域を、将来暮らす場所としておすすめできる	87.8%	-	17.57	-	-	-	-	-	-	87.8%	-	-	-	-	-	-
89 日本の将来は明るいと思う	67.9%	-	21.18	-	-	-	-	-	-	67.9%	-	-	-	-	-	-

第７章　次年度以降の課題及び改善点

～事業終了後の自走に向けて～

１　到達目標から見る最終年度の成果

今年度の到達目標は、「地域創造実践と提言」である。本事業１年目と２年目については、学校設定科目「地域創生論」や、関連産業における現場視察、出前授業等を通じて、地域の課題を把握し、探究活動である課題研究を通じてその改善方法を探ることができた。さらに各科における課題研究も充実した内容となっており、探究的な活動を深めることができた。

今年度はその改善策を踏まえ、学校設定科目「社会起業家実践」において地域活性化策や地域ならではの創造プランを作成し、地域に提言することで本事業のモデル構築を図っている。社会起業家実践とは、環境問題や地域再生をはじめ、社会的課題を解決するための手段のひとつとして、ソーシャルビジネスの考え方や手法について学習する科目である。この学びを通じて、地域そのものの在り方や、地域の未来について考えるだけでなく、地域政策にも積極的に参画するような姿勢や態度の育成に努めることができた。

２　本事業に対する各科の取組状況の是正

本事業に参加した生徒の延べ人数でいえば、１年目が 811 名、２年目が 1,631 名（前年比 201%）、そして最終年目が 2,392 名（初年比 294%）と約３倍以上の生徒が本事業に参画したことになり、極めて大きな成果だと考えている。一方で、昨年度の課題でもあった特定の学科やクラス、課題研究という少人数での取組が多く見られたことで、各学科間での取組状況に差が見られている点について改善することができなかった。本事業は今年度で終了するものの、この事業で得た人的ネットワークやスキルを活かし、各学科間における連携をさらに密にすることで情報共有を図りたい。

３　校内組織体制の強化と地域協働の情報発信による広報活動の推進

広報活動に関しては、今年度も約 65%の教員が「本事業の取組が十分にＰＲできていない」と認識している結果となった。最終年度も可能な限り学校ＨＰの更新回数の増加やＳＮＳの活用等含め、情報発信などを強化し県内外をはじめ、地域住民への周知を図る努力に努めたものの、その発信力不足については反省すべき点が見られている。

【地域との協働による高等学校教育改革推進事業　成果報告発表一覧】

日　時	事　業　名	発表者
9 月 28 日	第 11 回高校生ビジネスプラン・グランプリへの応募	選 B 起業家実践専攻
10 月 12 日	「地域創生論」第７講での由利本荘市活性化ﾌﾟﾗﾝ提言	選 B 起業家実践専攻
10 月 15 日	全国産業教育フェア地域協働プロ型発表会(青森市)	生物資源科 3 年 2 名
11 月 1 日	農業農村工学会東北支部大会ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ発表(仙台市)	環境土木科 3 年 2 名
11 月 18 日	秋田県農林水産ﾌｫｰﾗﾑ高校生ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ発表(秋田市)	生活科学科 3 年 5 名
12 月 6 日	地域協働３年間の研究成果発表会（本校）	本校全校生徒 493 名
1 月 17 日	地域協働全国サミット発表（Zoom オンライン）	主担当　照内之尋
2 月 2 日	学校評議委員会報告（本校）	主担当　照内之尋
2 月 2 日	秋田県教育研究発表会口頭発表（秋田市）	主担当　照内之尋
3 月 17 日	地域協働成果検証事業発表会（Zoom オンライン）	主担当　照内之尋

４　指導と評価の一体化と金農総幸福量（ＧＫＨ）指標の確立

今年度の各種評価では、本事業を通じて受動的学習から能動的かつ積極的な行動に変容するような結果となった。本事業終了後も評価の手法として、高校魅力化システムの活用、本校独自のルーブリックに加え、金農総幸福量（ＧＫＨ）指標を策定し、これらの有機的相互関係を一体化させたシステムの構築については、引き続き外部からの指導助言をいただきながら、評価方法の確立ならびに運用を継続し大局的な評価指標となるよう努めたい。

５　新型コロナ対応について

今年度も新型コロナウイルス感染症の影響により実施できない事業が多く発生している。今後も、生徒の安全・安心を最優先に、オンラインを活用したセミナーで代替するなど、本事業の効果を高める工夫をしたい。

６　事業終了後の自走を見据えた取組について

（１）コンソーシアム構築の成果と課題

成果としては、個と個のつながりではなく「組織と組織」の連携が可能になったことが大きな成果として挙げられる。コンソーシアムにより両者の知識・技術・手法・思考の共有化、意思疎通が図られ、事業実施までの流れがスムーズに行えるようになった。一方課題としては、担当者との連絡調整や意思決定に時間を要する点に加え、学校からの投げかけ（一方通行）のみになりやすい点も危惧される。しかしながらコンソーシアムを構築する意義や成果の方が圧倒的な意味合いを持つため、今後も引き続き維持するとともに、秋田県立大学との連携協力協定も継続する方向で話が進んでいる。

（2）カリキュラム・マネジメント

地域の実情や実態を捉えた地域連携型カリキュラムへの改善と、本校が目指すべき姿「グランドデザイン」を整備する。カリキュラムは常に変動している「生き物」であるという観点から、常にカリキュラム改革を意識したカリキュラム・マネジメントを実施することで学校改善に努めていきたい。

また、関係機関ならびに外部有識者、講演者等のアーカイブ化による連携・協働体制を強化する。その際の留意点として、人事異動による協働体制機能の低下防止の観点から、校内の協働体制の維持と分掌の設置を検討していく。

（3）予算措置について

本事業の終了とともに事業予算がなくなるものの、厚生労働省の建設業若年者理解・定着促進事業（通称つなぐ化事業）、秋田県の予算を見れば農業教育高度化事業（農林水産部）や森づくり県民提案事業（農林水産部）、持続可能な地域づくり事業（高校教育課）など多くの予算措置を可能とする事業が存在しており、それらの有効活用を行うことで予算の確保は可能と考えている。また、中央省庁等の企画競争・関係事業等を視野に入れた最先端の流れを把握する高いアンテナを保持しながら、教育界の潮流を把握していきたい。

（4）高校魅力化コーディネーターやカリキュラム等専門家の配置と活用

本事業では、コーディネーターとして秋田県農業公社の職員、カリキュラム開発専門家として秋田県農業研修センターの職員をそれぞれ非常勤で配置し事業の運営を実施してきた。次年度以降その予算はなくなるものの、コンソーシアム同様、人的ネットワークと信頼関係の構築ができたことから、お互いの補完関係として今後も協力を得ながら進めていきたい。

（5）科目「課題研究」における教科横断的な学びの推進ならびに学校間連携

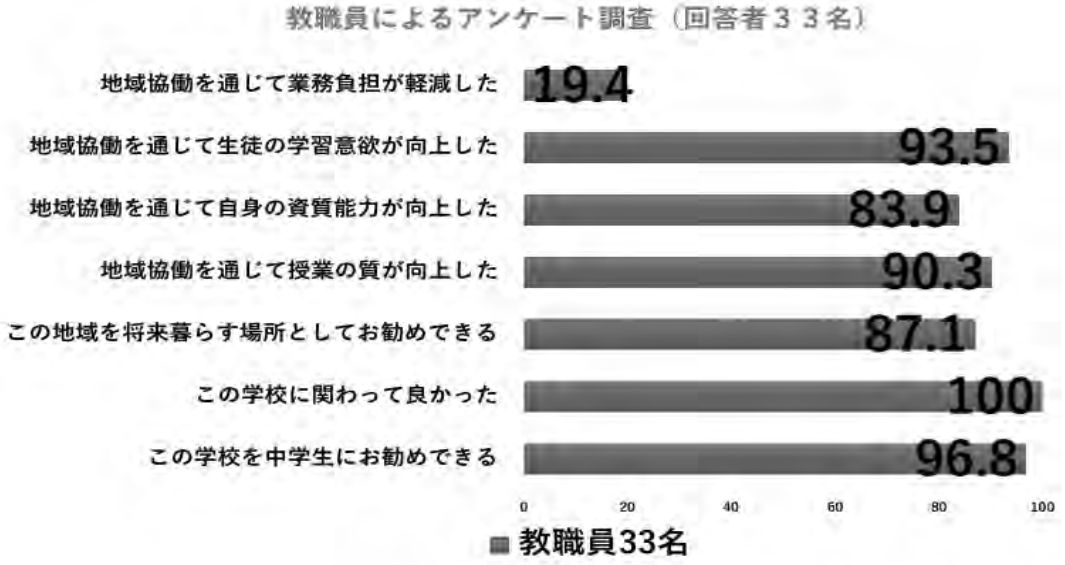
「これからの高等学校教育について」（文部科学省初等中等教育局参事官高等学校担当令和２年 11 月 25 日）において、各高等学校の特色化・魅力化～各学科に共通して取り組むべき方策～として①スクールミッションの再定義、②スクールポリシーの策定、③地域社会や高等教育機関等の関係機関との連携・協議、④中山間地域や離島等の高等学校における多様な教育資源の活用、以上の４点が示されている。あらためて本校の中長期的な将来像を模索することが肝要であり、地域化・少子化に伴う学科再編を視野に入れた各学科における教科・科目横断的な課題研究の推進と、本校研究開発モデルの県内農業高校への波及ならびに学校間連携の推進が求められる。

7　本事業のまとめと考察

生徒の変容として、地域に対する価値観の変化、郷土愛の醸成・再確認、地域産業への理解（知る）、そして自己肯定感や存在意義の向上が確実に見られている。目標設定シートにも記載しているが、「就職希望者の中で県内就職を希望し、就職した生徒の割合」が 94%、「就職希望者の中で県内における各学科に関係する関連産業（公務員含む）へ就職した生徒の割合」が 54%であり、進路関係の項目においてその大半が３年間の目標を達成することができている。すなわち、本事業を通じて生徒の目標とする進路実現にも大きな貢献をしていることは明白である。地域産業を知ることは、地域の定住し地域を支える人材として不可欠な要素であり、進路指導においても極めて有意な取組であることが立証された。

一方で教員の変容としては、生徒の変容と同様に、地域に対する価値観の変化が見られるようになり、地域とともに学ぶ姿勢に加え、あらためて足下に教材があることを再確認することができた。また、教職員アンケートにも見るように、本事業を通じて「授業の質が向上した」「自身の資質能力が向上した」という回答を得ている。反面、「業務負担が軽減した」という割合は少なく、ワークライフバランスの観点で改善が必要だと思われる結果となった。しかしながら、ＧＫＨの評価・分析から明らかになったように、生徒の幸福感や充実度、豊かさはかなり高い次元で感じることができていることが分かった。人間にとっての「豊かさ」を物質的な豊かさから、全人間的なそれへと転換させて捉えようとする社会科学の流れが少しずつ現れてきているように感じている。

以上から、本事業の効果として地域と協働しながら地域を分厚く支える人材の育成という視点において極めて有意義な事業であったと考えている。



【関係資料】

（１）　第１回運営指導委員会議事録

（２）　第２回運営指導委員会議事録

（３）　秋田魁新報記事

令和４年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」
第１回運営指導委員会（議事録）

【日　時】令和4年6月２７日（月）１０：３０～１２：００
【会　場】秋田県立金足農業高等学校　会議室
【日　程】１０：３０～１０：３５　運営指導員委嘱　　校長　松田　聡
１０：３５　　開会のことば　　教頭　藤原　淳
１０：３５～１０：４５　出席者の紹介　　教頭　高田屋　馨
１０：４５～１０：５０　管理機関あいさつ　高校教育課長　佐藤　進
１０：５０～１０：５５　実施校あいさつ　　校長　松田　聡
１０：５５～１１：０５　運営指導委員長の選任及び運営指導委員長あいさつ
１１：０５～１１：１５　生徒によるプロジェクト研究発表
１１：１５～１１：３０　令和３年度の事業内容ならびに評価　教諭　照内　之尋
１１：３０～１１：４０　各学科からの取組状況について
１１：４０～１２：１０　質疑応答及び意見交換、運営指導委員による指導助言
１２：１０～１２：１５　諸連絡等
１２：１５　　閉会のことば　　教頭　藤原　淳

管理機関あいさつ　高校教育課長（佐藤　進）

皆さんおはようございます。只今ご紹介にありました高校教育課佐藤です。令和４年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」第１回運営指導委員会の開催にあたり、県教育委員会を代表いたしまして、御挨拶申し上げます。運営指導委員の皆様方におかれましては、大変お忙しい中、当委員会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。また、日頃から本県高等学校教育の振興・発展に、格別の御理解と御協力を賜っておりますことに、心から感謝申し上げます。さて、金足農業高校は、令和２年度から当事業の指定を受け、産学官連携により、本県にとっての最重要課題である人口減少に対応しつつ、農業関連産業を変革することのできる人材育成に向けた教育課程の開発を行っております。２年目である昨年度は、初年度の「地域理解」に続き「地域の課題発見・解決」を到達目標としておりました。学校設定科目「地域創生論」や関連産業における現場視察を通して、地域の課題を把握し、各学科の課題研究を通じてその改善方法を探ることができたものととらえております。事業の最終年度である今年度は、「地域創造の実践」を到達目標としております。新たに開設した学校設定科目「社会起業家実践」は、地域の人々や社会と協働的な関係を構築するための手段を体験型の授業で学び、地域づくりを行う態度や意欲を育成することを目標としております。また、各学科の課題研究では、地域活性化策を実際に地域に提言することを目指し、実践的な活動の充実を図ります。一方で、昨年度の「高校魅力化評価システム」による評価では、金足農業高校生が抱える課題として、自分の考えを相手に伝える表現力が十分に育っていないことが挙げられました。こうしたことから、課題の克服を含め、事業の総仕上げの年度として充実したプログラムの実施が求められております。委員の皆様方には、本日の委員会において、専門的見地から忌憚のない御意見、御提言をお願いいたします。また、会議以外の様々な場面でお力添えをいただくことになりますが、何とぞよろしく御支援のほどをお願いし、挨拶といたします。本日は、よろしくお願いいたします。

実施校あいさつ　校長あいさつ（松田　聡）

本日はお忙しい中、運営指導委員の皆様方、そして伊東金一様、そして秋田県教育委員会の皆様にお越しいただき、ありがとうございます。また、本事業については、これまでたくさんのご助言・ご指導いただきまして、本当に感謝申し上げます。さて本事業は、今年度で３年目の最終年ということになります。昨年度は、運営指導委員会は５月の第１回だけの開催となりましたが、その際の運営委員の皆様方からのご指導・ご助言を生かしてこれまで取り組んで参りました。昨年度は、事業・研修合わせて４６の事業を実施しました。その中で１１回の「地域創生論」講義を実施しました。この「地域創生論」を通して、生徒たちの学びにどのように結び

ついたのか、あるいは将来という観点で地元秋田を見ることができるようになったのか、というような生徒の変容ぶり、これを検証することが大切だと思っています。事業の２年目が終了して作成した令和３年度の報告書があるのですが、そこに生徒の感想が載っておりますので、一部紹介したいと思います。３名ほど紹介します。１人目ですが、「秋田の課題が見つかったので、改善策を考えたい。秋田に住む女性のネットワークを構築し、コミュニティを形成したい。働きやすい秋田を創造したい」おそらく女子生徒だと思われます。２人目は「２０年後の日本や秋田がどうなって、何が必要とされているのかをしっかりと見極め、自分なりにやりたいことを選択していきたい」。３人目は「若者の最先端である私たち高校生が自由で新しい発想力や創造力が求められているいま、地域創生論を受ける意味を再確認できた」ということです。いずれもこの事業を通して、秋田の将来のことを視野に入れた生き方を考える、そういったきっかけとなっているようであります。秋田県教育委員会の方でも、時代や社会の変化、本県の抱える課題等に積極的に対応するために「秋田県高等学校総合整備計画後期計画」を策定しています。その中の１つの柱に、こういうものがあります。地域と学校がともに地域の将来を考え、連携・協働して取り組む教育活動の推進という項目があり、その概要として、生徒一人ひとりがふるさと秋田を支え、秋田に貢献しようとする意識を高め、地域の課題を解決に取り組むことができる力を育成することが大切である。また、将来を担う若者を地域全体で育成するという観点から、地域と連携・協働した教育活動をこれまで以上に重視する必要があるとあります。本校でもこの事業を通じて、秋田県の人材育成方針を踏まえ、将来の秋田をけん引できる人材を育成したいと思っております。この事業を体験した生徒が卒業して、５年後、１０年後、２０年後どのような意識でいるのか、果たして起業した生徒はいるのか、見てみたいなと思っているところであります。最後になりますが、今年度は最終年度となります。事業に関する取り組みをより一層充実させていきたいと考えております。運営委員の皆様から多くのご意見を頂戴いただければと思います。また、本日は非常に蒸し暑くて、エアコンが実は壊れておりますので、適宜飲み物をお飲みになっても結構だと思いますので、よろしくお願いいたします。それでは、短い時間ではありますが、本日はどうかよろしくお願いいたします。

運営指導委員長挨拶（岡田　秀二）

皆さんこんにちは。委員長に選任されました。どうぞよろしくお願いいたします。特に挨拶ということではないのですが、課長さんと校長先生のお話を伺って、大変強く感じたことがございます。それは、ご存知のように文科省は数年前から新しい時代の高等教育の在り方・検討要するにワーキングチームを作って、既に多くの報告を発表しております。そういう報告を見ると、背景としては実は我が国の高校生の学習意欲が非常に低下しているということと、もう１つ、１８歳は大人であるということが、法律的にも新しくなっているわけですけれども、その高校生の社会性、すなわち社会に対する関心が大変低いということが根底にあって、新しい時代ということに高校教育はどうしたら良いのか、強い問題意識として持っております。もう１つは、お話のように、地域が疲弊しているということと、人口減少が大変激しいということが背景としてあるのですけれども、我々が直接関わる背景としては、先程言った点と只今課長さんあるいは校長先生のお話を伺いますと、この事業で金足の生徒さんたちは、大変大きな成果を得てきているなということを強く今思っております。この事業の成果と皆さんの取り組みの成果ということになろうかと思いますが、この先もまだ金足のあるいは秋田県農業の根底を担う専門教育がということではなくて、我が国全体にとっても大きな影響を与えうる可能性が高いなと思って期待をしております。どうぞ、皆さんが再度このような場を設けて繰り返し確認をいただくことが大事だと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

質疑応答及び意見交換、運営指導委員による指導助言

運営指導委員（齋藤　了）：

地域で働きたいというような、そういう考えの人が十数パーセントアップしているという実態を見てですね、秋田は何もないよというのがだいたい一般的に言われる言葉ではありますが、今までもその秋田の魅力に気づいて、発見してくれて、「地域創生論」の成果じゃないかなと思います。意識が少しずつ変わってきたというのは非常に良い成果ではないかと思います。これから、それをどのような形で意識として見えてきたということは、まずスタート段階に立ったということですので、これからそれをいかにして、どのような形で秋田の定住、あるいは秋田の役に立つ、秋田の貢献に結び付けていくのかというあたりを具体的にイメージして、それを実践に移していくというのが、大事になっていくだろうと思います。ただ、そうするとどういう形で役に立つのか、どういう職業に就くのか、こういう順番付けでなっていくのでしょうけれども、そういう理想的な順番でいくことはなかなか難しいと思います。ま

ず、今コロナ禍の中で秋田に貢献したいという県内就職希望者もかなり増えていますけれども、私ここに来る前に、いろいろ中学生を対象に企業ガイダンスとかをやっていました。そしたら、高校生でも中学生でも小さい子から秋田の魅力なり秋田の企業の良いところなりを紹介したいということでやっていました。そういうことをやっていると秋田の企業にもピカッと光る企業がたくさんある。ただ、それを知らない。何年やって、どうやって役に立って、力をどんなふうに付けるかという順番でいくのも大事なのでしょうけれども、そういう企業の実際のところを見ていただいて、いわゆる地域実践のところに入るのかもしれませんが、どういう形になれば役に立てるのかなというところから入って、秋田のために何が役に立つのかというところを再発見する場にもなるかもしれませんので、企業の方々をご紹介するよりも、都会と比べて秋田の企業、あるいは秋田の実践者の方々の考え方、そういうところに触れる機会をより多く作っていただいて、これからどういうふうな形で生きていこうかというのを具体的にイメージできるようなプログラム、キャリア教育として定着していくのではないかと感じます。ですから、そういう意識が芽生えてきた、増えてきたというのが非常に重要な成果だったと思いますので、そこから一歩具体的に実践していくためにはどうしていくかという方向がまた一つ、色々な手法で考えていただければ良いかなというふうに感じたところであります。私、社長会議というもので、県内の色々な分野の社長さん方を集めて情報交換をすると、社長さん方はすごく人材不足で困っています。そういう困っている中で、うちの会社はこういうものを頑張っている、ＰＲする機会を作ってほしいという社長さん方もいっぱいいます。そういうところの人方に実際に来てもらって話をしてもらったりするような機会を作っていただければ、マッチングを含めて良い機会になるのではないかというふうに感じます。

運営指導委員（藤村　幸司朗）：

まずお話の中で農林政策課の高度化事業のお話をいただきました。これは国の事業でございまして、様々な農業法人等、現場の方のですね、農業高校の生徒さんたちにお聞きいただけるような取り組みのきっかけづくりという面で農水省の方の事業でございますけれども、大変良いきっかけになっているなというふうに思いましたし、現場で特にスマート農業の関係、先程のＧＰＳの話だとか色々あります。現場の方に、今そういった最先端の農業機械等が入ってきています。特に最近その圃場の中で、コンバインがどこの部分が、収量が少ないかというものに位置情報を落とし込んでですね、翌年の田植えの施肥の段階でそれを収量の少ないところに多く落とすとかですね、そういったような試験も現場で実は始まっていまして、それを試験研究が後押しいているような事業を通じて、ですからこういった事業を通じて、我々もその、ぜひ農業の最先端の部分を高校生の皆さんに見ていただけるきっかけになったら良いなと思っています。この後も続けて、この事業は３年間で終わるということでしょうけれども、高度化事業についてはまだまだ続いていきますので、そういったものを上手く使ってですね、ぜひ県の方との連携をこの後も継続して続けていきたいなというふうに強く感じたところでございました。それからあの、この資料でＧＫＨ指数が１年次から下がったというデータがちょっとありましたけれども、あの、この見方として単純に下がってだめというよりはですね、現場のことを１年の時はただ知っただけで、もしかすると２年になってさらに深く掘り下げて分析をする力が付いて、そういった面からなかなか簡単にはいかない、難しいというようなところで、ちょっとポイントが下がっているというような見方ももしかしたらできるのではないかなとも思いましたので、完全に下がってその残念というような評価ではなくて、もう少し掘り下げてみても面白いなと思って見させていただきました。それから、齋藤理事長からもお話しありましたけれども、地域の担い手として政策決定に関わりたいとかですね、私が関わることで社会を変えられるかもしれないというこのパーセントの伸びっていうのは、素晴らしいものだと思っておりまして、こういうふうに感じられるっていうことが、まずすごくその学習評価としては高かったというふうに見られると思います。こういった取り組みにおいて、普通高校ではどういう展開ができるのかなと、私も今ちょっと話を聞きながら、難しいなとも思いながら、まずはできるところからということで、例えば農業系の学校さんに同じような取り組みを広げていくとか、そういったところから徐々に始められていくことで、金農の成果が県内に波及していくことをすごく期待したいなというふうに思いました。以上です。

運営指導委員（藤　晋一）：

非常に色々な取り組みをされていることを評価させていただきます。うちの県立大学も活用していただいて、色々事業だとか実習をやっていただいていることは、私たちにとってもすごく良い地域貢献になっていると思いますので、引き続き私たち大学の協力あるいは学生も取り込んだような形で何かやっていただけると、非常に面白くなっていくのかなと、特にＯＢはたくさんいますので、そういった方を取り込んだ事業転換というのを考えていただければなというふうに思います。それから、こういうプロジェクトで一

番問題なのは、３年間ですから、「３年間で終わります」ということではないと思いますので、この３年間終わった後のところから、どう取り組んでいくかっていうのを今から良く考えていただければと思います。当然、秋田県立大学の場合はそれに対して協力をさせていただくと思います。また協定も結んでいますので、そういったことを考えていただきたいなと思っています。それから、普通科高校の場合は、やっぱり大学受験に向けてっていう勉強の取り組み方というのがあって、あまりこう自分たちもそうだったけど面白くないというか、受験勉強のための３年間というイメージがあると思うが、やっぱりこういう実業高校の場合はそこで学んでいくことで少しずつその仕事に就くため、あるいはさらにはもっと良いのは、その後進学する率が高くなってくれば、農学部だとか林業関係だとかそういったところにも進んでいく生徒さんが増えるというのも１つの考え方だと思っています。そういったことにも役に立てば金農に行けばこんな面白いこと勉強ができて、その後こういう地域にも役に立てるし、大学に行く学生さんも多いというところにシフトしていくと、魅力ある高校づくりができるのではないか。金農の多くは非農家の生徒さんがすごく多いというふうに伺っているので、そういった中で農業に対する、自分は農家ではないけれども、農業に対する意欲、これから農業法人が増えてくると農業法人で働くっていう、農家ではないけど農業法人で働くっていうシステムがだんだん出来つつあるので、その中に生徒さんを上手く巻き込んでいくというのが１つかなと思っています。そういったところがなんか、１年生のところにも、２年生になった時にも調査をするとモチベーションが上がってきて、それがグラフに見えてきていかなというふうに感じました。生徒の評価にしても、１年次のＧＫＨが１から３ポイント層の生徒が上がったのはやはり、実業高校ならではのもの何だろうなと。中学校で学んで成績で金農に入ったけども、その成績でもそんなにイメージが高くなかった子でも、実業的な実践的な教育を受けることによって、たぶん上がったと思います。そういった子を引っ張り上げるっていうのもすごく大事なことだと思うので、そのあたりのことも考えながら最後の１年やっていただければと思いました。

運営指導員（椎川　浩）：

地域を支えようとする意識が高いこと、非常に心強いと思いました。それでですね、やはり継続するためには、誰かから評価を受けると、秋田の消費者から評価を受けることで、より目的意識が育つのではないかというふうに思います。先程食品流通の方と生活科学の発表で、この後の展開と課題というのがありましたが、例えば一例でいうと、地元の生協さんと組んでですね、生協の組合員は消費者ですので、やはり消費者に近い所で活動を展開してみるのも１つあるのかなというふうに思います。そういうことで、先程のレガシーの継続にも繋がっていくのかなと思います。発信の場も必要だということですが、うちの中央会の仕事ですけども、種苗交換会も毎年１１月・１２月にございますので、その辺もご活用いただければというふうに思いますので、どうかよろしくお願いします。以上です。

運営指導委員（細川　和仁）：

先生方もたくさんおっしゃっていただいたので、繰り返しになる部分もありますが、私もやっぱり高校魅力化評価の結果のところすごいなと思っていまして、地域の担い手として政策決定に関わりたいとか、私が関わることで社会を変えられるかもしれないとか可能性に対するこのポジティブな意識がえげつない伸びをしているなという気がいたしました。これってやっぱり、開発されたカリキュラムの内容が関わっているというふうに思います。それは生徒さんにとって、面白いとか楽しいとかっていうことだけじゃない、刺激的なというか、こう考えさせられるというか、表現悪いですけど煽るっていうのでしょか。もっとかかってこい、みたいなそういう部分があるのではないかなと推測しています。そういった開発されたカリキュラムの内容が高校生の皆さんの意識を変えているということを感じるということと、それから自分の考えをはっきり相手に伝えられるというのは、藤先生方からおっしゃっていただいた通りで、そのまま私も同じで、下がったとは言えないのかなと、まあ逆にいうと、これが例えば７１とかになっても上がったとは言えないのかなというような感覚を持ちます。それよりも、数値の評価にも出さないといけないので、すごく重要なところであるのと同時に、先程各科の先生の説明をしていただいた中での自分の言葉で心に響くような表現で語ることができる生徒さんが出てきているというようなところ、すごく重要だと思っています。つまり、何が言いたいかというと、先生方が指導する中での手応えというか、生徒がこういうふうに変わってきた、書くことがこんなふうに変わってきた、言うことがこんなふうに変化してきたっていう、その捕まえたものがすごく重要だと思うので、そういったものをぜひ蓄積していただきたいなと思います。逆に言うと、数値ではこうやって上がっているけど、いやいや自分が指導している感覚ではそこまででもないよな、やっぱり課題は大きいよなっていうとこ

ろもすごく重要だと思うので、そうした先生方の目というか、そうしたものもぜひ評価にばんばん放り込んでいただければというふうに感じました。以上です。

実施校　研究開発主任（照内　之尋）

私の方から、それぞれの先生方から色々なご助言、コメント等いただきましたので、それに関しまして、私なりに解釈した部分でお話しさせていただきたいと思います。まず、農業公社の齋藤理事長さんのお話しですけれども、実は私は３年生の担任をしておりますが、実は今のこの時期、３年生となると具体的に就職するのか、進学するのかという具体的なところがでてくるのですが、去年まで、県内就職しますと言っていた生徒が、実は「地域創生論」を通じたことによって、地域づくりに関する大学あるいは学科で勉強したい、そういうふうな生徒もいましたし、２年近く地域の様々な関連産業の現場を視察する中で、県外に行こうと思っていたけど、県内の会社に就職したいなとか、あるいは県内にこういった会社があることを知らなかったので、ぜひ地域に就職したいという子もクラスに何人か出ていますので、そういう意味では、進路指導に関しても一定の効果は、この事業の成果というのは出てきているのかなということが１点です。

それと、今年の１月に秋田の魁新聞が調査した「若者のミカタ」という報告がありまして、それを見ると、秋田県内の１０もしくは２０代の若者のアンケート結果として、若者が求めるキーワードは何ですかというところで、やはり賃金、給料、企業そういった視点を挙げていました。働く場を重視しているというところですので、もちろん大切なことではあると思いますが、齋藤理事長さんの方からもお話しありましたが、岡田学長の言葉を少し借りるとすれば、少しでも地域に目を向けて、しっかりと社会と地域を捉えることができるようになれば、またその視点も変わってくると、地域の仕事の魅力を改めて知るとそれに伴って、充実感や地域への魅力が出てくると考えております。それから、藤先生の方からご指摘ありました、この事業の大きな課題が、この後終わった後どうするかというところが非常に重要なポイントです。この事業が採択された時点で３年後予算がなくなるということは分かっていますので、お金があるからできる、お金ができないからできないという議論ではなく、予算が無い状態でもこの事業をどうやって上手くやっていくかということが、運営を直接担当する私としては、すごく大きな課題を突き付けられているなというふうに思っています。先程から何回も話題になっていますが、例えば農林水産部さんの方であれば高度化事業の予算あるいは高校教育課であれば、宮腰先生からもお話しありましたが、ものづくり支援事業とか、そういった秋田県の方でも様々な事業がございますし、また国の方でも、それこそ意欲と実行力があるところにはお金を出すよということで様々な事業がありますので、そういったものを受けて、アンテナを高くしながらやっていければと考えております。また、細川先生の方からも以前個別にご指導いただきましたが、まず可能な限り無理のない自走のシステムを作り上げていく必要があるのかなというふうに考えております。この事業がこれから地域を支える生徒たちのためにあると思っていますので、再三になりますけれども、この今年度の３月で終わって、はいじゃあこれでこの事業は終わりですということにならないように、上手くやっていかなければいけないということと、それに伴う校内の先生方のシステムというか、先生方の異動等もありますので、特定の先生が異動なった時にこの事業がストップするとか、そういうことにならないように、組織化、体制づくりもしっかりやっていかなければならないということで、ぜひ引き続き色々ご指導いただければと思います。

運営指導委員（齋藤　了）：

ちょっと良いですか。生徒の方々が重視する賃金だとか企業だとかっていうキーワードってお話ししていらっしゃいましたけども、それは分かります。実際そういう気持ちだろうなと思います。例えば賃金のことだけ話をすれば、最近秋田県もＩＣＴ関係の会社ですとかが秋田に進出してきて、ほとんど給料が都会並みっていうところもあります。で、大抵はそうなればこちらの方に住んで、マイホームを建ててですね、可処分所得がかえって増えるわけですから、そういう方たちもいますし、それに給料が少し安くても、相対的に安くても、首都圏の企業と遜色ないので、そこで良いよという人もいます。そういう、キーワードを捉えて、キーワードで秋田の企業がこういうところが勝っている、良い所があるというところを理解してもらえるような、そういう機会を地元の会社社長さんとかからお話を聞きます。そういう機会を設けていただければ、具体的な秋田に残るイメージがつくと考えます。イメージがついた段階で、大学で県外に行っても良いのです。行って、でもそのことが、金農で学んだそういうことがまだ頭に残っていて、じゃあ帰るときは秋田に戻ってからやろうかと、そういう結び付てくれれば良い。まず在学中にキャリア形成として、その自分たちが重視する企業性だとか、重視するキーワードに沿って、秋田の企業っていうのはこういうところがあるというのをしっかりと見付けさせ

てもらえるような、そういう教育カリキュラムがあったら良いかなと思います。

運営指導委員長挨拶（岡田　秀二）

指導員の先生方から大変良い意見がたくさん出ているのですが、ちょっと違う角度で私なりの評価みたいなものをしてみたいと思います。この事業が始まって、第１回目の会議をやった時に私は大変心配をしました。それは、つくりだというかその方、あるいは教育委員会の方と学校の具体的に生徒と関わる先生方とプロジェクトリーダーのちょっとその意識の乖離が大きいなということで、大変心配でした。２年経ちましたが、今日の話を伺うと、大変素晴らしい進展を遂げているというのが私の喜びでございます。それは、各学科の先生方からの話です。生徒の様々な経験とか、姿勢、そして具体的な活動内容を先生方自信がものすごくこの大きな評価をし、自らの努力の成長といえるような、そういう発言内容で、大変素晴らしいなと思いました。学校はやはり、生徒が主体になる。事業とかプログラムとか、あるいはある種の論理が、専攻がなく、生徒とともに歩んで行くっていう。これが、学校組織の非常に重要ところだなっていうことを大変強く感じます。で、この件については、実はこの研究開発のリーダーである照内先生は、生徒の内発的な発展が醸成されていくことを期待したいと、以前触れていました。そのことが実は大変良く出たなということで、大きな効果を与えています。先生方はいずれも客観的な視点から見ている、その位置に立っての話で、これはこれで非常に重要だと思っています。いますが、ここはもう一段階乗り越えることが十分可能だと思って、お話を伺いました。その調査の１つとして、照内先生は大変この実践力・創造の数値を大きく評価していて、これはこの通りだと思います。思いますが、一方でこの評価の具体的な内容はやはり、生徒の個人がどのように自分を評価するかということで、ところが、この事業そのものが持っているっていう意味というのは、単に学習能力を鍛えるそのことだけではなくて、地域における高校としての役割をこれからは全面的に発揮していかなければなりませんという、そういうことを事業としては課題化していますし、目標として持っています。照内先生がおっしゃった、まさに生徒が個人として自分このように成長できたよということを言っているんですが、内発的な発展と次の段階はそれを社会化していくということにやっぱりあるので、その具体的な項目は、文化・協働力、そして社会全体を見る先見力、そして人間構築・関係構築力、そしてもう１つは、改革力は個人の自らの改革力と同時にそれを社会化した段階の社会にとっての改革、それへとアプライしていかなければならないと、こういうことを考えると、今言った項目は依然として点数低いんですけど、可能性は次は上手くって、課題はここにあるっていうことを、実はこの表はですね、良く示してくれているなというふうに思っています。その点は、先程指導の先生方から色んな角度で教えていただいています。ですから、事業が終わって次なる課題はまさに高校が高校として閉じるのではなくて、地域に開くと同時に地域との協働の中で地域における役割を上手にやはり発表していくその側面だなと。ここに関わって、実は高校の先生方全員が金農としてまさにここで具体化していけるそういう展望が得られたという、このように強く感じます。大変素晴らしい成果を挙げたと思いますし、課題をますます明確になっているなというふうに思います。もう１つ注文を付けるとしたら、これは金農や農業高校だけの課題ではなくて、コンソーシアム全体としてやっていくべきことだということで、この先はコンソーシアムとしてのそのところの課題を具体的にやっていきたいところものだというふうに思います。以上です。

実施校あいさつ　校長あいさつ（松田　聡）

本日はどうもありがとうございました。うちの職員の環境土木科の中嶋の話を聞きながら感じたのですが、林業の植林体験をしたと、さらに産業用水についても学んだと、そういうことを考えますと、林業はわかる、産業用水もわかる。点と点あったものが、体験することで線になったと思います。そうすることで、社会の仕組みとかメカニズムを深く理解することができた。こういった体験を、まだまだ続けていきたいなと、できれば良いなと思っておりました。委員の皆様方から色んな意見あったのですが、一人ひとり触れますと、齋藤理事長のお話しで、秋田の企業に光るものがあるということなのですが、高校教育課では、ふるさと企業紹介事業というのをやっております。これあの、秋田県の高等学校に就職支援員という方が何名か配置されておりまして、その先生方が就職する生徒のいる学校に出向いて、映像を見せながら秋田の企業を紹介するというのがあります。本校にも就職支援員がおりますので、これからそういった事業とタイアップができれば幅が広がるかなと、一層魅力ある企業を紹介できればなと思っております。あと最後に、岡田委員長からはですね、最初は不安であったけれども、科の先生たちの話を聞いてちょっと安心したというお話がありました。ありがとうございます。これからは最後の１年となりますので、全職員を巻き込んで、そしてまた、そうすることで事業が終わってからもその雰囲気がずっと続くのかなと思っておりますので、全職員を巻き込んで取り組んでいきたいなと思っております。

令和４年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」
第２回運営指導委員会（議事録）

【日　時】令和４年１２月６日（火）１３：００～１４：３０
【会　場】秋田県立金足農業高等学校　会議室
【日　程】１３：００　　開会のことば　　教頭　藤原　淳
１３：００～１３：０５　出席者の紹介　　教頭　高田屋　馨
１３：０５～１３：１０　管理機関あいさつ　高校教育課長　佐藤　進
１３：１０～１３：１５　実施校あいさつ　　校長　松田　聡
１３：１５～１３：２０　運営指導委員長あいさつ　富士大学学長　岡田　秀二
１３：２０～１３：３５　３年間の成果報告　研究開発主任　照内　之尋
１３：３５～１３：４５　各学科からの報告　各学科主任
１３：４５～１４：２５　質疑応答及び意見交換、運営指導委員による指導助言
１４：２５～１４：３０　諸連絡等
１４：３０　　閉会のことば　　教頭　藤原　淳

管理機関あいさつ　高校教育課長（佐藤　進）

令和４年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」第２回運営指導委員会の開催にあたり、県教育委員会を代表いたしまして、御挨拶申し上げます。運営指導委員の皆様方におかれましては、大変お忙しい中、御出席いただきまして、誠にありがとうございます。また、日頃から本県高等学校教育の振興・発展に、格別の御理解と御協力を賜っておりますことに、心から感謝申し上げます。さて、金足農業高校は、令和２年度から当事業の指定を受け、今年度最終年度を迎えました。事業の総仕上げとして「地域創造の実践」を到達目標に、学校設定科目「社会起業家実践」では、地域の人々や社会と協働的な関係を構築するための手段を学ぶ体験型授業を実施し、各学科の課題研究では、地域活性化策を実際に地域に提言することを目指し、実践的な活動の充実を図ってまいりました。その成果として、この事業に関わった生徒達には、「自分が社会を変えられるのであれば、挑戦したい」といった地域の担い手としての意識の高まりが見られたと学校から報告を受けております。また、３年間を振り返れば、指定初年度がちょうど新型コロナウイルス感染症の影響による全国一斉の臨時休校と重なり、その後もコロナ禍によって計画通りに事業が進展しない時期もございましたが、コンソーシアムを構成する各機関の多大なる御協力と金足農業高校の先生方のこの事業にかける熱意により、事業の全体目標である「本県にとっての最重要課題である人口減少に対応しつつ、農業関連産業を変革することのできる人材育成に向けた教育課程の開発」について、一定の成果があったものと捉えております。しかし、全てがうまくいったということではなく、改善を要する点もございます。金足農業高校における指定事業としては、今年度が一つの区切りとなりますが、地域との協働による教育活動の充実は、今後も本県高等学校教育にとって重要であることに変わりはございません。委員の皆様方におかれましては、本日の委員会において、金足農業高校の成果をいかに他校に普及させるか等も含めて、専門的見地から忌憚のない御意見、御提言をお願いいたします。本日は、よろしくお願いいたします。

実施校あいさつ　校長あいさつ（松田　聡）

本日はお忙しい中、運営指導委員の皆様方そして県教育委員会の皆様方にお越しいただきありがとうございます。また、本事業についてこれまでたくさんのご指導、ご助言いただきましたことに感謝申し上げます。さて、本事業は今年度で最終年を迎えております。この事業が始まる前は、私は教頭でおりましたけれども、教室や実習棟あるいは学校農場といった、いわゆる学校の敷地内という限られた空間・環境で学び、そしてクラスですね、外部講師を招いての講習会、あるいはこちらから出向いての現場見学・研修などある程度行ってきました。ただ、この事業に取り組んでからは、これまで以上に多様な経験を持つ方々の講演を受けたり、現場に出たりする機会が格段に増えました。その結果、書物や本校教師からの話・情報のみならず、いわゆる「本物」を見たり体験したりする機会が増えました。このように学校では学べないことを生徒たちは目を輝かせて学んでいます。学校にも様々な教育資源や教材

があるといえばあるのですが、教育で重要なのは何といっても人的資源だろうと思います。様々な経験を持つ人と出会って、話を聞いて、本物を見て、生徒が後の職業選択に生かし、どうしたらより豊かな人生を歩めるのかということを考える良いきっかけとなりました。さらに本事業を通じて、生徒の意識が変わっていく、いわゆる生徒の変容が見られたということも大きな特徴かと思います。具体的には、後ほど担当から説明があると思います。今後は本事業が終了して全て終わりということではなくて、本事業の遺産・財産を引き継ぎ、学校として独自で何ができるのか、そういうことを考えていく必要があります。本日の協議会での皆様方からのご指導、ご助言をいただき、これまでの実施から得られた効果を生かす形で、学校で自走できるように取り組んで参りたいと思います。色々なお知恵を拝借することになりますけれども、本日はどうかよろしくお願いいたします。

運営指導委員長あいさつ（岡田　秀二）

運営指導委員長としての挨拶ということでいただきましたけれども、この会議での発言もそうですし、むしろ運営指導の先生方に申し訳ないのですが、我々運営指導に指名をいただいて大変ありがたく思っていますが、むしろ、生徒からあるいは金農の皆さんから勉強することが大変多かったというふうに思っています。それは今、校長先生がおっしゃったように、我々どうしても政治の世界も政策をつくる官僚も、それから県のご指導される皆さんも、あるいは大学の教員もそうですけど、動もすると抽象度の高いところに辿り着きながら、いわば批判的なところを整理するというのが学問であったり、その立場から教えることが大事なんだみたいな、そういうことが、これまでの我が国のいわば教育制度の在り様だったと思います。

しかし、校長先生おっしゃるように生徒も変わる、社会も変わる、地域も変わってといった変わることが前提ということになりますと、最も最先端は、その変わっていることを常に意識しながらそこで工夫をしているという、そこが一番だと思います。運営指導委員としては、そういう中で整理をしながら、我々としてはこういう整理ができていますというね、そういう意味では、現場と高校と生徒と我々指導員が集まっている皆さんのそこでのコミュニケーションと、それぞれが抱えたり問題意識として持っていること、あるいはこれを乗り越えないといけないねという合意ができたことを一緒になってあたっていくという、この姿勢が全ての分野、全てのテーマに関わって重要だと思っています。そのような意味では、運営指導委員長だからどうっていう、そういう意識は全くなく、今日勉強したことを大学に帰ってどうやって生かそうか、そういう発想で常におりますので、運営委員の立場というよりは、ある整理をするそういう角度から見たらこう思いますというような、そういう議論を率直にしていくことがこういう会議を設けていただいた、これがたぶん最大の意義だと思いますので、遠慮なく意見をぶつけていただいて、議論の末、１つでも何かやっぱり合意できるなということを得てみたいなとこのように思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

質疑応答及び意見交換、運営指導委員による指導助言

運営指導委員（細川　和仁）：

たくさん申し上げたいことはあるのですが、１つは今岡田先生がおっしゃっていただいたように、小中高の学習指導要領でいうところの総合的な学習の時間、探究の時間で考えると、探究的な学びというところでは、金農の取り組みというのはすごく意義が大きいのではないかと感じています。それは、生徒さん個人の中の探究の学びだけではなくて、それがカリキュラムになって、そしてこういうのが大事だということが先生たちに共有されて、１つの金農メンタリティというか、そういうのが価値として芽生えつつあるような感じが伺えて、それがすごく素敵だなというふうに感じました。それが組織文化として根付いていくということになると、照内先生がおっしゃっていただいたような、校務分掌として組織の協働体制としてどう形にするかというところがその表れになるのかなと思いますので、そこが鍵だろうなというふうに思います。

運営指導委員（藤　晋一）：

午前中の発表も非常に楽しく拝見しました。先程照内先生のグラフでもありましたが、ほとんど最後の方で非農家出身の割合がすごく高いという中で、この事業というのがやはり、昔であれば農業高校というのは農家の子どもさんが来るということで、親から農業というものを学ぶことができたと思うのですが、今だと実際に学ぶことのチャンスがないという中で、こういう創生論だとか、実際に農家の方々と付き合うことによって、そこで農業というものの実際を知ることができたり、新しいドローンだとかＩＣＴだとか、

そういうことを学んだりだとか、実際に普段スーパーに行っても気が付かないような農産物の廃棄だとか、そういうのに着目して、それぞれの学科の中でそういうことができたことが非常に実践的なこととしてすごく大きいのだろうなと。それが生徒さんの成長に繋がったのだろうなと思っています。先生方の中でどれぐらいモチベーションが上がったとか、色々なグラフがありましたが、先生方でさえ改革力とか創造力とかその辺のところという話をしていましたけれども、実際に大学生を見ていますと、この頃本当に思考力とか実践力とか、そういうところが落ちてきているという印象を私たちは受けている中で、ここが上がっているだけで僕はすごく十分なんじゃないか。コンピューターゲームをいじったりして生活している子が非常に多い中で、自分で色々なことを考えて、実践していく能力がついたというのは、他の高校の生徒さんに比べれば、かなり良いことだと僕は感じています。その表れが、実際には私たちの大学では、３年前から総合型選抜をやっている中で、プレゼンテーションをやっていただいているのですが、あまり詳しくは言えないのですが、金農生の能力というのはものすごく高いです。特にプレゼン能力がすごく高いですし、それに対する回答、自分たちが何をやってきたという回答力が、普通高校含め他校に比べて、それが高い。これだけこのような事業をやってきた中で、そこに自分たちが自ら関わって、実践的にやっているので、頭で覚えているというよりは、体で覚えているっていうことが、すごく良いことだと感じています。また、話は変わりますが、事業の開始当初、横断的なこともやってくださいと言ったのが、この最後の年にかなり実践的にやられているのがすごく素晴らしいと思っているところです。特に今後、生徒さんたちが、高校のゴールとしてはどんなところに就職したか、専門性を生かしたところに進学あるいは就職したか、起業できればもっと素晴らしいが、そういったところの追跡調査なんかも課題が終わってからも続けていただければと思っております。大学に行った子たちはその後どこかに就職するので、そのあたりの追跡調査とか、あるいは就職後も数年でやめてしまう子もいるので、そのあたりも追跡調査ができれば、今後の発展に繋がるのかなと思っています。それから、先程照内先生の中でもありましたけれども、転勤していくので、ぜひ転勤したところで他の高校にいったところでこの金足農業で学んだ先生方の地域をその高校で展開していただければ。今オール金農ですけれども、オール秋田の方向で、高い教育力を。小中の教育力が高い県ですから、単純に進学力ということではなくて、実践的な生徒さんを世に出すかということだと思いますので、ぜひこれからも頑張っていただければと思います。最後に、予算がなくなるという話でしたけれども、県立大学とは協定を結んでいますので、ぜひお気軽にお声がけいただければと思いますし、できれば希望としては、今までは先生が講師といて来るということでしたけれども、学生との交流というのもぜひ、今後考えていただければ嬉しいかなと思います。３年間非常に楽しく見させていただきました。最終の取りまとめも楽しみにしております。

運営指導委員（藤村　幸司朗）：

全体を通しての感想としましては、農林業の次世代人材の育成、この点に関しては、現場で実際に農業をやられたり、林業に携わったりということも含めて、それから進学した後で指導者としての活躍というのも期待できるということで、私共としては本当に感謝申し上げたいと思います。県としても力を入れているものが、まさにこの次世代人材をどうやって育てていこうかというところが一番の課題でありますので、それを実践していただいて、そういった意向調査なども踏まえて、きちんとこの後のところまでフォローしていけるというところも考えると非常に有難い、貴重な取り組みだなというふうに感想を持ちました。いくつかこの表の中からお話ししたいのですが、ＧＫＨが４から５ポイントの層が一旦下がったというところで、最終年度には期待通り上がって、もとに復活したというところがですね、やはり意識の高さからくるところがかなり多いというふうに捉えさせていただきました。それから、先生が身に付いた力と身に付けてほしい力の比較をしている面については、少し欲張りになっている気がします。マネジメント力などというものはですね、なかなか高校の段階からマネジメント力がつくかといわれると、私共も今苦労しているような状態でございますので、大変期待度が高い分ですね、そういったところが数値として出たのかなというふうに捉えさせていただきました。あと、予算面のお話しでございます。農業教育高度化事業につきましては、来年度予算につきましても、現在予算要求の最中でございまして、なんとか増額できる方向で頑張って財政と折衝中でございますので、今回もスマート農業の連携のお話もしていただきましたので、そういった学業だけではなくて、実際の最先端の現場もまた見ていただいてというところで、初めて学んだものが実際の自分の感覚として身に付くというといいますか、理論だけではないものが身に付いてくるのだろうというふうに思いますので、こういった予算獲得についても、県を挙げてなんとか応援していくという体制をとっていきたいと思っておりますので、ご報告がてら、頑張る決意表明ですね。以上でございます。

運営指導委員（齋藤　了）：

私は、県庁を退職してこの現場にきて２ヵ年、この事業に携わらせていただきました。どうもお世話になりました。ありがとうございました。まずはですね、昨年もそう思ったのですが、今日の午前中の発表を聞かせていただいて、非常に素晴らしい内容で、色々と感激しました。岡田委員長からもあったように、かえって学ばせてもらったような感じでございます。そういう点では、その指導にあたられた先生方に対してですね、非常に難儀されただろうということで、敬意を表したいを思います。今各科の先生方からこの事業の報告がありましたけれども、その生き生きとした発表を聞いておりますと、まさに生徒方を間近で見ている先生方が、生徒たちの変わり方を見てですね、この事業をやって良かったなという、本当に実感しているということが伝わってきました。それについても敬意を表したいと思います。まず、この事業の目的である、農業関連産業を変革することのできる人材の育成という、変革ができなくても、今回の結果を見れば、地域に住んで働きたいだとか、地域の役に立ちたいだとか、そういう気持ちがすごく高まってきたということは、変革する、しないは別として、まずは非常にそれだけですごい成果なのではないかというふうに感じます。２つ目の地域産業を担う人材。農家出身の方でない人がかなりいるとなると、なかなか地域農業を担うというだけはなくて、地域農業を担う人もいれば、担わなくても応援する人もいる。そういう応援する人材の育成というのも１つの視点としてはあるのだと思います。まずは困難といいますか、課題解決のプロジェクトのような活動は、金農では毎年やっているのかもしれませんが、この事業に取り組んだことで地域を知って、地域の魅力を知る、それが結果的に地域に残りたいというそういう気持ちが芽生えたり、さらにはもっと勉強したいという思う気持ちが育まれたりするということは、ものすごく大切なことでして、それが今回のこの事業の成果として良かったなというふうに思います。先程、大学に行ってから、こちらに帰ってきてやりたいという人も多くなったという話もありました。そこが私としては大事なところだと思います。私も県外の大学に行くときは、自分で帰ってこようという気持ちはさらさらなくて、親から帰ってくるのだったら行ってもいいよというようなことを言われました。そういう感じでした。それから、今日の先生方の報告を聞いて、帰ってきたいというふうに思って行くのと、そうでないとでは全然違うので、まずは地域を知って地域の魅力を全部でなくとも気持ちのどこかに刻まれた状態で、そういうことが生まれるということですので、そういった活動を続けていただきたいというふうに思います。この事業がなくなれば、来年度から時間割を割いてのこういった事業はなかなかできなくなるのかもしれませんが、予算のこともあるでしょうが、色んなやり方を考えて、こういう地域を知る活動というのは、１つの流れの中で仕組みとして根付かせていってもらいたいなというふうに思います。その方法は、色々やり方はあるかと思いますが、それは教育委員会の方とも相談していただいて、これはここだけではなくて、秋田の魅力、もっと地域の魅力を何らかの形で作っていくというのが、重要だということがここで証明された訳ですので、そういう形で広めていっていただければ、人口減少に少しでも役に立つのかなと思いますので、そこらへんもぜひご検討いただきたいと思います。予算はなくとも、ゼロ予算でできる、人との繋がりを考えればゼロ予算でもできることもあるでしょう。例えば農業ですと、農業法人協会ですとか、農業士会ですとか、そういうところとの連携もできるでしょうし、昔は地域振興局の方で農業高校との連携事業を盛んにやっていたころもありましたので、そういうところに力を入れながら、藤村部長にも予算をとっていただきながら、何とかやっていく方法を考えていただければ良いかなというふうに思います。本当に勉強になりました。ありがとうございました。

運営指導委員（椎川　浩）：

今年度からの参加で２回目ということで、大変恐縮ではございますが、生徒さんからの発表も踏まえまして、大変素晴らしい内容でした。敬意を表したいと思います。内容を見ますと、私たちが事業化しなければならないという、大変ヒントになる発表でした。特に農家の所得を考えますと、フリーズドライとか、もしくは発酵とかそういうところも非常に重要な部分だと思います。大変ヒントになりました。実践しなければならないと思いました。今後も継続をお願いしていきたいと思います。やはり目的としては、地元に定住していただいて、そして就職に繋げていただきたいと思います。県民に食で貢献するというところの１つの視点として、生徒さんを見ていただきたいなというふうに思います。

貢献するためには、体験とか実践とかそういうところが必要になってくると思いますので、我々も流通研修を毎年行っております。今年はスマート農業の実践体験ということで、金農さんは色んな事業で中止になりましたが、秋田北鷹高校さんとかでの実施などありますので、そういう体験などの機会を提供するということで予算の方は県の方から頑張っていただいて、またそういう機会をと思っております。質問といいますか、私の決意表明でございます。よろしくお願いします。

運営指導委員長あいさつ（岡田　秀二）

指導委員の先生方から的を得た良いご指摘をたくさんいただきました。総括的には、藤先生が全体像についてご指摘をいただいたと思います。当初の目的、すなわち人口減少にどう対応するか、対応したこれからの農業、あるいは高校・高等教育ということだったのですが、私の印象は、秋田の人口減少こわくない、金農があればこわくない、そういう印象を大変強く持ちました。私のお話しも十分にできませんでしたが、持続可能性というキーワード、これのもともとのところは、やはり環境と経済の両立だとか、どっちか大切かというようなことで、いわゆるＥＳＤ(持続可能な開発のための教育）と持続可能な開発、あるいは持続可能な発展というそういう言葉も使っていて、この発展については要注意だなと思い続けています。というのは、どうしても物の大きさ、あるいは勢いとしてのもっともっとみたいな、あるいは進化するみたいな、成長するみたいな、イメージの発展がどうしても近いなと思っていますが、あえてここでは発展という言葉を使いつつ、これまでの発展にはない発展、すなわち人間と協働の発展、これをやはりこの金農が具体的な形ではこうなるよと、こういうことを発展というのだということでね、この３年間で示していただいたなということを強く思いました。実は時代を捉えるキーワードの１つはイノベーションという、そういう言葉です。それは、シュンペーターという経済学者が最初に言っていますが、本来的なイノベーションは色んなところで色んな人がいわば既存の体制・組織・論理を破壊することによって出てくるのだとそういうことです。すなわち、人口減少に追いやったその論理と方法論をここで破壊をして、人口減少だけれども新しい発展をこの金農を中心に秋田が遂げていくと、こういうことができると日本のいわばこの雛形っていうか、エリートに十分になりうると、こういうことを強く感じました。本当に素晴らしいです。生徒の変わり様もそうですけれど、先生方の変わり様についても私は感激しています。３年前、今のような話はほとんど出ませんでした。大変私は心配していました。だけど見事にそれを払拭してくれました。本当に素晴らしい。この金農がそっくり大学の名前を付けても全然恥ずかしくないですね。それぐらいの我が国が今ほしい人材をつくりつつあるとそう思います。今日は本当にありがとうございました。

研究開発主任あいさつ（照内　之尋）

委員の皆様方から指導助言を含め激励のお言葉をいただきまして、本当にありがとうございました。ただその一方で、やはりまだまだ課題も多くて、例えばせっかくこうやって取り組んできたものを、適切に情報発信がきちんとできていたかと言われれば、やはりそういったところでもまだ弱かったところもありますし、学校のＨＰ等も含めてもう少し情報発信をできればと反省しています。また、齋藤理事長様からもお話あったように、この仕組みをきちんと組織化していくことが大切だと考えております。３年間ご協力いただきまして、本当にありがとうございました。

実施校あいさつ　校長あいさつ（松田　聡）

本日はありがとうございました。照内教諭の発表の中で、地元の行事に参加したこと、あるいはボランティアに参加したことの数値が低いという結果が出ていました。これを伸ばすためにやはり原因を探らなければいけないだろうなと思っております。本校は入学したときに、全員部活動参加というスタンスでいます。文化部であれ、運動部であれ、全員が１００％加入する。もちろん時間が経過するとやめたりする生徒もいるのですが、３年生になってもかなり高い割合で部活動の活動をしています。そうすると土日なんかは、時間的に余裕があるかというと、ちょっと厳しいかなというふうに考えております。ただし、ボランティアという意味では地域貢献に非常に大事な行事でありますので、３年生が就職決まった、あるいは進学決まったと、３年生は進学といっても推薦とか特色入試で合格する生徒がほとんどですので、１月、２月、３月あたりは受験とは関係ない生徒がほとんどですので、冬の除雪ボランティア等積極的に参加するように推奨していきたいなと考えております。また、先生方のお話しで大学生の様子も伺いましたが、本校の生徒でも大学に進学する生徒が多いのですが、希望ではありますが、そういった生徒が大学に行って、地域のことをもっと考えないかというような、けん引するようなそういう存在になってほしいなと思います。秋田県のみならず、色々な地方の大学に行くのですが、この地方のこの土地の課題って何だろうって考えてみないか、そういった問いかけをして、波及効果が全国に広がれば良いなというふうに考えております。地域との協働の事業は今年で終わりということになりますが、これで終わりということではなく、最初にお話ししましたけれども、学校でどうやったら自走できるのかということに関して分掌をきちんと構築・組織化し、そういった組織的な対応が必要かなと考えております。委員の先生方にはこれでさよならではなくて、これからの情報交換を通じていただければ非常に嬉しいなと思います。今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。本当に３年間どうもありがとうございました。

金足農高・造園緑地科3年生

高齢者宅の樹木剪定

学んだ技能で奉仕活動

秋田市の金足農業高校（松田聡校長、493人）の造園緑地科の3年生12人が13日、地域の高齢者宅を訪れ、樹木の剪定（せんてい）や庭の草刈りなどの奉仕活動を行った。

生徒たちがテーマを決めて調査や研究に取り組む「課題研究」の一環。地域の1人暮らしの高齢者宅を訪れ交流するとともに、学んだ技能を生かす狙い。

学校近くに住む男性(77)宅を訪れ、造園緑地科の12人が樹木の剪定を行うグループ、草刈りを行うグループに分かれて作業した。

剪定グループの8人は電動刈り込み機やはさみを使用し、低木を中心に刈り込んだ。指導教員らから「少し離れて全体のバランスを見ながら刈ってみて」などとアドバイスを受けながら、庭木の表面をきれいに丸く仕上げた。

三村美咲さん(17)は「角が立たないように、はさみを小刻みに動かすことを心がけた」と話した。

草刈りを担当するグループは、教員から電動草刈り機の操作方法について説明を受け、目を保護するゴーグルを装着して作業を開始。慎重に機械を操作していた。

野球部員の沢木竜誠さん(18)は「部活動では地域の方に応援してもらったので、その恩返しができれば」と語った。

家主の男性は入院中で、市内で別に暮らす次女(47)が作業を見守った。次女は「父の家に来ると家事の手伝いで1日が終わってしまい、庭の手入れはなかなかできなかった。お盆を迎える前にきれいにしてもらえてうれしい」と述べた。

（大谷好恵）

低木を丸く刈り込む造園緑地科の生徒

秋田市出身、元五輪代表

長崎宏子さんから親子で水泳学ぼう

秋田市出身の競泳元五輪代表でスポーツコンサルタントの長崎宏子さんが指導する水泳教室「長崎宏子のSWIM TO SMILE!」が30、31日に同市新屋町の県立総合プールで開かれる。県と県総合公社の主催。

30日は午後2時から3～6歳の未就学児と保護者を対象にした「幼児の親子ス
3時10
～3歳
護者を
ーアク
日には
ビーア
午前11
の親子

秋田市／県央

社会部
☎018・888・1830
FAX018・823・1780

令和4年7月17日　秋田さきがけ

け　（第3種郵便物認可）

男鹿梨コンポート完成

先輩考案のレシピを基に…

秋田市の金足農業高校生活科学科の生徒たちが、男鹿産のナシを甘く煮た「男鹿梨のコンポート」の瓶詰を開発した。卒業生が考案したレシピを基に後輩たちが製品化。23日の学校祭「金農祭」で来場者に販売する。

金足農高・3年生5人

23日の学校祭、瓶詰販売

コンポートは、今春卒業した杉本千尋さん(19)が1年時に考案。ヨーグルトムースと組み合わせたものは、2019年の「牛乳・乳製品利用料理コンクール県大会」で最優秀賞を受賞した。

杉本さんのコンポートのレシピを踏襲し、1学年後輩で3年の川井薫乃さん(17)、三浦結衣さん(17)、佐藤杏美さん(17)、萩原日彩さん(18)、宮田亜希菜さん(18)が研究を重ねた。

3年の5人は、地元で愛される男鹿産ナシのおいしさを多くの人に知ってもらおうと製品化に着手。調べるうちに、流通規格に合わないものは廃棄されることもあると知り、農家から規格外品を購入することにした。学校近隣の菓子店のパティシエからアドバイスをもらったり、県内の加工会社を見学したりして、試作を続けた。

材料にこだわり、フルーツシュガー、蜂蜜、有機栽培レモンの果汁を使用。ナシのまろやかな口当たりを生かし、自然な甘みに仕上げた。ナシの品種によって煮詰める時間を変えるなど試行錯誤の連続で、調理には生活科学科の仲間たちも協力してくれた。

5人は「街で売られている加工品が、どれほど苦労を重ねて製品化されたかよく分かった」と振り返る。「秋田には、地元の人も知らないようなおいしい食べ物があふれている。コンポートをきっかけに、秋田の豊かさに気付いてもらいたい」と話した。

杉本さんも5人の成果を喜び「今後さらに下の代の後輩たちが、食品加工に懸ける思いを引き継いでくれたら」と期待を込める。

23日の「金農祭」では午前9時半から販売する。250個限定で、500円。

（小山田竜士）

「男鹿梨のコンポート」を完成させた生徒たち

令和４年10月21日　秋田さきがけ

廃材変身 クリスマス彩る

金農高でワークショップ
児童らとキャンドルに

廃材を使ったアレンジメント制作のワークショップが、秋田市の金足農業高校で開かれた。造園緑地科の3年生14人が講師を務め、親子連れとクリスマス用のキャンドルアレンジメントを作った。

追分小学校などの児童とその保護者ら計31人が参加して23日に開催。金足農高の見本園で飾り付けの材料を探した。生徒と一緒に園内を歩き、ナンテンなどの木の実を見つけると、剪定ばさみで切り取っていった。

アレンジメントの材料はこのほか、金足農高の剪定作業や、県林業大学校のチェーンソー実習で出た廃材を使った。円盤状のスギ材の上にキャンドルを載せ、周囲を木の実や松ぼっくり、綿などで装飾した。参加者は生徒と協力しながら、丁寧に作業を進めていた。

親子4人で参加した泉小3年亀井この葉さん(8)は、カラフルな作品を完成させた。「接着剤で貼り付ける作業が大変だったけれど、楽しかった。部屋に飾って、クリスマスには明かりをつけたい」と笑顔を見せた。

亀井さんのいとこで、制作を手伝った金足農高3年鈴木凪さん18は「普段は外で遊ぶことが少ないが、今日は一緒に楽しむことができた」と話した。

金足農高は、持続可能な開発目標(SDGs)について考える機会にしてもらおうと、昨年度からワークショップを開催している。(佐沢幸徳)

アレンジメントの飾り付けをする参加者

参加者は生徒と一緒に見本園を歩き回り、材料を探した

㊥秋田市広報板

▼きららとしょかん土崎図書館は12月6日(火)から2月10日(金)まで、工事のため入館できません 期間中は臨時カウンターで予約した本の貸し出し・返却など一部のサービスのみ実施します。詳しくは、お問い合わせください。☎845・0572(きららとしょかん土崎図書館)

令和４年11月29日　秋田さきがけ

きがけ　(第3種郵便物認可)

東洋水産 商品アイデアコンテスト
金足農のスープ準V

東洋水産(東京)が東北の高校生を対象に開催した商品アイデアコンテスト「スマイル・フード・プロジェクトin東北2022」で、秋田市の金足農業高校がいぶりがっこを使いクリーミーに仕上げたスープを出品し、準優勝に輝いた。

フリーズドライを想定したスープを考案するコンテストで、金足農高からは、生活科学科の鎌田あいなさ　出品したのは「じっぱりんと、食品流通科の鎌田紗季さん、仲野谷鯛さんの1年生3人が出場した。

準優勝に輝いた(左から)鎌田紗季さん、鎌田あいなさん、仲野谷さん

いぶりがっこ使用/クリーミーな味に

秋田のいぶりがっこチーズチャウダー」。県外の人も食べやすいように、塩味や香りが控えめで比較的マイルドないぶりがっこを使用。牛乳やベーコンなど、そのほかの食材も県産品を「じっぱり」(たくさん)盛り込んだ。

8月下旬以降、試作を重ねた。小麦粉を米粉に替えたり、チーズやみそを加えたりして調整し、レシピを完成させた。

決勝大会は11月26日に仙台市で行われた。地元ならではの食材が使用されているか、フリーズドライに加工しやすいかなどの観点から審査された。

開発の経緯やこだわりを発表するプレゼンテーションも審査の対象。3人は使用した食材を取り巻く現状や生産者の思いにも理解を深める必要があると考えて準備した。メイン食材のいぶりがっこについては、衛生管理を強化した2021年6月施行の改正食品衛生法について調べ、生産者の反応を取材するなどして発表した。

鎌田紗季さんは「発表は緊張したが出場できてよかった」と話し、仲野谷さんは「達成感があり、いい経験になった」と述べた。鎌田あいなさんは「食は人と人をつなげるのだと感じた。来年も挑戦したい」と語った。

コンテストは、カップ麺の製造販売を手がける東洋水産が、食に関心のある高校生に日頃の学びの成果を発揮してもらおうと2015年から開催している。(田村璃子)

金足農高が出品した、いぶりがっこを使ったスープ

令和４年12月22日　秋田さきがけ

本研究実施報告書は、令和２年度文部科学省指定「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型)」の研究成果をまとめたものであり、秋田県教育委員会、秋田県立金足農業高等学校が文部科学省より委託を受け、実施したものです。

したがって、本研究実施報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要となります。取扱についてはご留意願います。